書評

～ことば ふれあい～

- みつめて、食
- たずねて、かぜ
  あるいて、吹田
- 私流文庫・新書の楽しみ
- ものがたりのそら

第129号
2008・春

折々のうた

大岡 信

田中 登

日本は古来より詩の国である。万葉の昔から和歌や俳句など極小の器に、花鳥風月や喜怒哀楽、様々な想いを折に触れて表現してきた。こうした詩の伝統は、平安・中世・近世・近代・現代と滔々と流れ来たって留まるところを知らない。本書は、詩人であり、当今一流の批評家でもある著者が、長い伝統を誇る日本詩歌の常識づくりを目指して、もと朝日新聞の朝刊に連載したコラムを一書にまとめたもの。限られた字数の中で各作品の魅力を語って余すところがない。

では、その評釈ぶりとは、どのようなものか。万葉歌人大伴家持の「春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ少女」について、時代背景を簡潔に記した後、「ただ、この有名な歌、実景だろうか。桃は満開だったとしても、少女は家持がよび出した夢の乙女ではないのか。歌からの想像で、確たる根拠はないのだが」と述べて、読者を遠い古代の世界へと誘ってくれる。また、杉田久女の「花衣ぬぐやまつはる紐いろ〳〵」に対しては、「花見帰りの軽い疲れた体をほてらした女が、一本一本着物の紐をほどき捨てていきながら、あらためて紐の多さにわれと驚いている風だが、そこにこそ女の知る愉悦も快感もあったし、またみずから桜となって花びらを散らす思いもあった」と簡潔に記す。

このコラムは好評を得、新書も続編を十冊まで出版。さらに新シリーズも九冊を刊行して、昨年見事完結した。

（たなか　のぼる・文学部教授）

岩波新書
正・1980年3月刊
続・1981年2月刊
3～10　総索引
（1992年9月刊）

新 折々のうた
1～9　総索引
（1994年10月～2007年10月）
本体価格　700円
総索引　660円

みつめて、食

ファーストフードの裏側……河西雄太郎・佐藤　宏樹・新田　真代　2
—身近なもので世界をみてみよう　福田　瞬・山田　絵里
食の安全性をめぐる一般消費者と食品研究者の認識の乖離……吉田　宗弘　15

たずねて、かぜ

彼女がオーバーステイになったわけ—ある中国人実習生の事例から……早崎　直美　24
民主主義のエッセンスを求めて—チャック・オーバビーさんからの手紙—…たかだ洋子 訳　31
書　評　魔女の復権はありえるのか『拷問と処刑の西洋史』浜本隆志著……金谷千慧子　36
図書紹介　『荊冠の志操—西岡智が語る部落解放運動私記』……田中　欣和　44
出版社探訪(3)　海風社—小さな声よ、届け……土倉　麻由　48
文庫をあるく　関西沖縄文庫—認めることと、理解すること……土倉　麻由　51
ル　ポ　豊かさを考えた—インド、ネパールで、同世代にふれ……下垣　和美　56
連　載　カエルをめぐる造形—アジア美術の世界(5)……長谷　洋一　66
連　載　博物館の資料(4)　物が語る歴史—関大博物館……山口　卓也　70

あるいて、吹田

60年余を経て甦る吹田の祭り“ドンジ”……黒江　順一　74
街角がパビリオン—吹田建築博覧会……石田　智子　84
吹田からはばたく“マロニー”……入江　篤史　90

私流文庫・新書の楽しみ

『折々のうた』大岡信……田中　登　表2
『我が愛する詩人の伝記』室生犀星……田中　登　表3
『教わらなかった会計—経営実践講座』金児昭……北山　弘樹　94
『日本全国　ローカル線おいしい旅』嵐山光三郎……小西　秀樹　96
『開口閉口』開高健……島田　広昭　98
書　評　漂流する「家族」の肖像—干刈あがた論……今村　秀雄　102
評　論　現代版漂流記—アニメ『無限のリヴァイアス』の魅力……城内　裕樹　108

ものがたりのそら

文芸創作講座　かたつむりと缶ビール……槇原　俊郎　118
文芸創作講座　胎動……原田　愛子　134
掌編小説　クラムボン、飛んだ……魚　日　記　144
連　載　自転車のはなし（五）……丸瀬　康裕　154
連　載　図書館資料紹介(11) International Military Tribunal for the Far East: Dissentient Judgement of Justice R. B. Pal…渡部晋太郎　116
(12) 弘文荘待買古書目……渡部晋太郎　117
本のいろいろ　関大図書館　(40) ケータイ読書　(41) 和漢軍書要覧…仲井　徳　100　113
(42) 破堤宇子　(43) 和漢朗詠集……114　165
編集メモ……166

表 紙 画：松尾一誠（美術部白鷺会）
カット画：飯田健・車谷考介・檀上奈津美・松尾一誠（美術部白鷺会）
切 り 絵：森祥吾（美術部絵画造形パート）……133・143

ファーストフードの裏側

身近なもので世界をみてみよう

河西　雄太郎
佐藤　宏樹・新田　真代
福田　瞬・山田　絵里

はじめに

地球温暖化、動物の絶滅、森林伐採、土壌汚染……いま地球上では様々な環境問題が起こっています。みなさんは、テレビなどを通して耳にする事も多いと思います。しかし、どこか遠くで起こっている出来事だなんて思っていませんか？

私たちは環境について勉強していますが、ふだん何気なく食べている食事にも様々な環境問題が潜んでいると知り、とても驚きました。食事の中でも特にファーストフードは多くの環境問題と関わりあっています。そこで、私たちは身近にあるファーストフードを題材にし、それが環境にどのような影響を与えているのかを調べました。

ほんの小さなハンバーガーが引き起こす環境問題を想像できるでしょうか。ハンバーガーの材料は誰がどこで作っているのか？　どこから運ばれてくるのか？　食べた後のゴミはどうなっているのか？　考えたことなんてあまりないかもしれません。しかし、環境問題は私たちのすぐそこで起こっているのです。

今日この文章を読んで、もしかしたらあなたのファーストフードへの考えが変わるかもしれません。

一章　ファーストフードと私たち

●ファーストフードとは

ファーストフードは英語でfast foodといいます。fastなフード＝短時間で調理でき、短時間で食べられる食事と訳すことができます。この定義で考えると、さっと作れるカップラーメン、うどん、牛丼などたくさんのものがファーストフードになってしまいます。食べる速さにおいては個人差があるので、なかなかfastの定義は出来ません。

そこで、今回は「ファーストフード」と言う場合、「フードチェーンが作り出した」、「安価な」、「手軽に食べられる」、「高カロリー食品・食事」という定義を使って、ファーストフードを眺めていきたいこうと思います。

●ファーストフードはなぜ増加したのか

ファーストフードには値段が安い、短時間で食べられる、気軽に利用できるなどの利点があります。日本人の労働時間はとても長く、必然的に食事に費やしている時間も短くなります。つまり、時間のない日本人にとってファーストフードとはとても便利で都合のよい存在だったのです。日本にアメリカ式のファーストフードが普及し始めたのは一九七〇年頃です。この一九七〇から現在に至る五十年にも満たない短期間に、ファーストフードは急激に数を増やしていきました。例えば関大前駅から学校までの狭い範囲にも、いくつかのファーストフード店があります。このように、ファーストフードはあっというまに日本の食を変えてしまったのです。

●食生活の変化

食生活の変化は様々な問題を生みました。たとえば今問題になっているメタボリックシンドローム。高カロリー摂取による肥満が問題となっています。その原因の一つにファーストフードがあるのではないでしょうか。例えばハンバーガー、ポテト、コーラを注文すれば女性の一日摂取カロリーの半分も摂取してしまうことになります。

しかし、問題はそれだけではありません。ファーストフードが引き起こす問題は人体だけではなく、環境にも多大な影響を与えているのです。

二章　ファーストフードをとりまく環境問題

ファーストフードがなぜ環境に影響を及ぼすのか、まず身近な問題からみてみましょう。

●ゴミ問題

ハンバーガーを一個注文した場合を想像してみてください。ハンバーガーはきれいに包装されて出てきます。これを食べ終わるのに五分もかからないと思います。しかし、食べ終わったその瞬間に包み紙はゴミとなるのです。セットで注文した場合はどうでしょう。ストローの袋やトレーの紙、ナフキンなどたくさんのゴミが出てしまいます。たった一度の食事でこれだけのゴミが出てしまうのです。レジから食べる場所までのほんの数分の間に、このようものは必要だと思いますか？

あるファーストフード店では一日にあたり、可燃ゴミ十・七kg、不燃ゴミ六・八kg、ダンボール五・三kg、コーヒーかす三・六kg、生ゴミ三・九kg、廃食油十五kgが出ています。安さや便利さなどのメリットから、現代の食生活に浸透したファーストフードですが、利用すればするほど、それだけ多くのゴミを出すことになります。

さらにファーストフード店では、ゴミは一緒に捨てられていますが、そうすると分別が難しくなり、資源として有効利用できるものもできなくなってしまいます。資源として再利用できないものは焼却するか、埋め立てるしかありません。

しかし、焼却する際も二酸化炭素を排出し、それは地球温暖化につながりますし、ダイオキシンが発生し大気が汚染されるかもしれないといった問題があります。

また、埋め立て処理をする際にも問題があります。東京や大阪といった都会の人口密集地では埋立地としての土地を確保することが難しく、地方へツケを回しています。地方でも埋立地の限界があり、平成十七年度での残余年数は十五年となっていて、枯渇が懸念されています。そうなると不法投棄にもつながりかねません。さらに、ゴミの中に含まれる有害な物質が土に流れ出し、雨によって川や海に運ばれるため、土壌汚染や水質汚濁も引き起こすかもしれないのです。つまりゴミの量が増えることで、処理の際にかかる環境負荷も比例して大きくなっていくのです。

そこでリサイクルが勧められています。みなさんの中にも、きれいに洗った牛乳パックやトレーを近くのスーパーに持っていかれる方がいらっしゃると思います。リ

サイクルのメリットには、ゴミの削減化、限りある資源を無駄なく使うことができるなどが挙げられますが、リサイクル製品も最終的にはゴミとなる、リサイクルする段階でエネルギーを使用するなどのデメリットもあるので一概に良いとは言い切れません。このように私たちがふだん何気なく出しているゴミが、環境問題に大きくつながっているのです。

●フード・マイレージ問題

次は大きく世界規模でみてみましょう。ファーストフードの魅力の一つは「安さ」ではないでしょうか。ではなぜ低価格で提供できるのか、それは生産コストの低い国で作られた食材を使っているためです。ハンバーガーに使われている牛肉はオーストラリアから、レタスやトマトといった野菜は中国から、というようにファーストフードに使われている食材の多くは外国から輸入されています。食材を外国から運ぶには飛行機や船を使います。そして、その飛行機や船を動かすには石油が必要です。石油を燃料として使うと二酸化炭素を排出します。二酸化炭素が増えると地球温暖化が進行します。つまり、食料を輸入することは環境問題とつながっているのです。多くの食料を輸入している日本は、輸出国の資

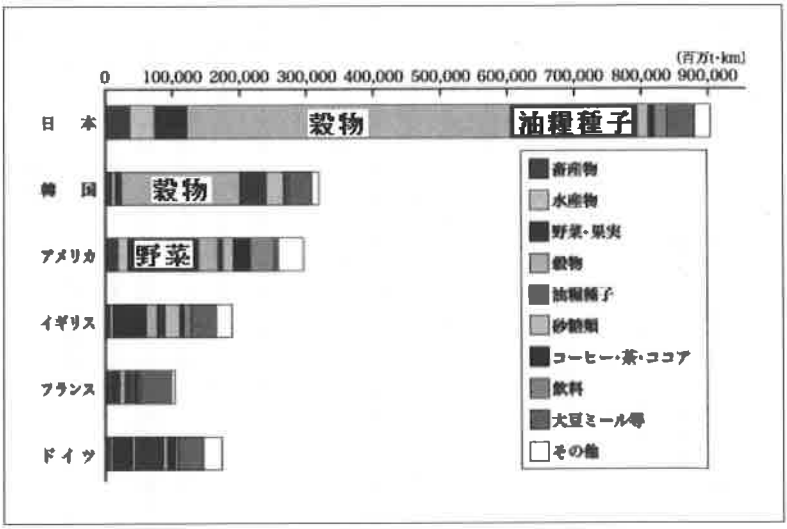


図1　各国のフードマイレージの比較（品目別）

源や環境に大きな負荷を与えているのです。

こういった食料輸送に伴う環境負荷を把握するために「フード・マイレージ」という指標があります。フード・マイレージは「食料輸入量×輸送距離」で表すことができるのですが、食料の海外依存が高い日本はこの値が非常に大きいのです。

図1は日本、韓国、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツの六ヶ国のフード・マイレージを比較したものです。ご覧のとおり、日本の値が際立って大きいことが分かります。穀物と油糧種子は量的にかさばることに加え、アメリカ、カナダ、オーストラリアといった遠隔地から輸入しているため、日本では全体の七割を占めています。

もう少し身近なところで、コンビニ弁当について見てみましょう。あるコンビニチェーン店で販売されている「和風幕の内弁当」では、鮭はデンマーク産、エビはタイ産、油揚げはアメリカ産、ゴマはトルコ産、レンコン、ニンジン、シイタケ、里イモ、白インゲン豆、小松菜などの野菜は中国産、鶏肉はブラジル産、金時豆はボリビア産といったように、十九品目中、なんと七割が外国産でした。これらの総移動距離は十六万キロにもなり、地球四周分に相当します。

先ほども述べましたが、フード・マイレージの値が大きいということは、それだけ地球温暖化の原因となる二酸化炭素を多く排出していることになるのです。地球温暖化が進行すると、どういった影響が出てくるでしょうか。

一つには「生態系への影響」が挙げられます。サンゴ礁は温暖化に対し非常に脆弱であり、最近の異常な海水温の上昇が原因で、その多くが死滅しています。サンゴ礁は海をきれいにする働きを持っているので、サンゴ礁が死滅してしまうと海は汚れ、魚が住めなくなってしまうのです。

二つには「異常気象の増加」が挙げられます。温室効果ガスである二酸化炭素が増えると地面と上空の気温差が大きくなり、大気が不安定になります。大気が不安定になればなるほど、強い上昇気流が起こり、豪雨が頻発し、台風や低気圧も発達しやすくなります。二〇〇五年にアメリカを襲った大型ハリケーンのカトリーナに代表される異常気象の増加は、地球温暖化によって大気が年々不安定になってきたためだと考えられています。

三つには「海水面の上昇」が挙げられます。平均気温の上昇によって氷河が融け、また海水の膨張によって海水面が上昇します。気温が一度上昇すると海面は二〇センチも上昇すると言われています。その結果、海抜の低い島国は海の中に沈んでしまうかもしれません。平均海

抜一mにも満たないツバルは、世界で最初に沈む国とされています。またモルディブでは、海水面があと一メートル上昇すると国が水没してしまう危機に瀕しています。

現在、地球温暖化は最も深刻な問題と言われており、新聞やニュースなどでよく取り上げられています。何の罪も無い動物たちや島国に住んでいる人たちの居場所を、私たちは知らず知らずのうちに奪おうとしているのかもしれません。

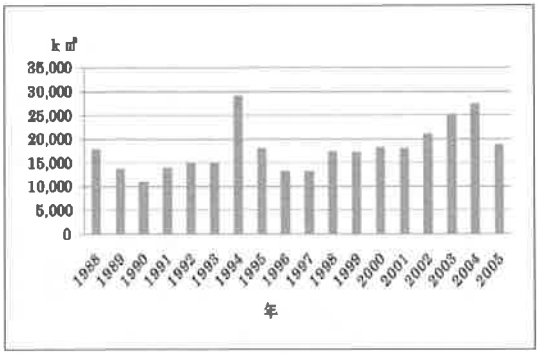


図2　アマゾン地域の森林消失の面積

●森林破壊

地球上にある熱帯雨林では森林伐採が深刻な問題となっています。森林は毎年十七万平方㎞ずつ減少しており、二年余りで日本の面積と同じくらいの熱帯雨林が消失していることになります。特に熱帯雨林の多くが存在

図3

しているアマゾン川流域では森林伐採が深刻な問題となっています。図2は、アマゾン地域で伐採されてきた森林の面積を表したものです。

この図を見てわかるように、森林は急速な速さで地球上から姿を消しており、その原因の多くを占めるのが放牧地の拡大です。牛の飼育数は一九九〇年には二六〇〇万頭であったのに対し、二〇〇二年には五七〇〇万頭へ増加しています。なぜこれほどまでに牛の数は増加したのでしょうか？　それは世界で牛肉消費システムが膨張しているからです。そして、この牛肉消費システムの代名詞とも言われるのがファーストフードなのです。アマゾン川流域では毎年約二万六〇〇〇平方キロメートルの森林が伐採されています。これは東京都の面積の十二個分に相当します。

アマゾンの熱帯雨林は「地球の肺」とも呼ばれ、多くの二酸化炭素を吸収し、酸素を供給する働きがあります。さらに水や湿気を蓄えたり、蒸発させることにより、地表近くの気温を一定に保つ働きをしています。また、「生物の宝庫」とも呼ばれ、野生生物の五〇％が住んでいます。しかし森林伐採が進むことでこうした役目を果たせなくなり、地球温暖化を進めたり、生物たちの絶滅が危惧されているのです。

地球上に住むすべての生物にとって大事な役割を担う森林は誰が守っていかなければならないのでしょうか？

●水問題

さらにファーストフードは水問題にも関わっているのです。みなさん、「仮想水」という言葉をご存知でしょうか。初めて聞く方が多いと思いますので、牛を例にとって考えてみます。牛を育てるには飲料用の水と飼料となる穀物が必要です。そして飲料用はもちろん、飼料となる小麦、トウモロコシなどの穀物を栽培するのにも水が必要です。仮想水とは農産物や畜産物の生産に必要な目に見えない間接的な水資源のことをいいます。一kgの牛肉を作るためには二一tもの水が必要であり、一kgのトウモロコシや小麦を作るためには二t、一kgの精米を作るためには三・六tもの水が必要とされています。さらに私たちに身近なものでみてみると、牛丼の並盛一杯では一八九〇リットル、ハンバーガー一個では一〇〇〇リットル、月見そば一杯では七五〇リットル、食パン一斤では五〇〇～六〇〇リットル、卵一個では一九〇リットルの仮想水が必要です。

先ほども述べましたが、日本は食料の多くを輸入に頼っています。私たちの毎日の暮らしは、実は膨大な水

を海外に依存して成り立っているのです。それでは日本は一体どれくらいの仮想水を輸入しているのでしょうか。

図4は、日本における仮想水総輸入量を示しています。仮想水の総輸入量は年間約六四〇億立方メートルで、これは琵琶湖の貯水量の約二・五倍に相当します。また、この値は日本国内の年間総水資源使用量約九〇〇億立方メートルの三分の二程度にあたり、日本国内で一年間に使う灌漑用水五七〇億立方メートルを大きく上回る膨大な量です。

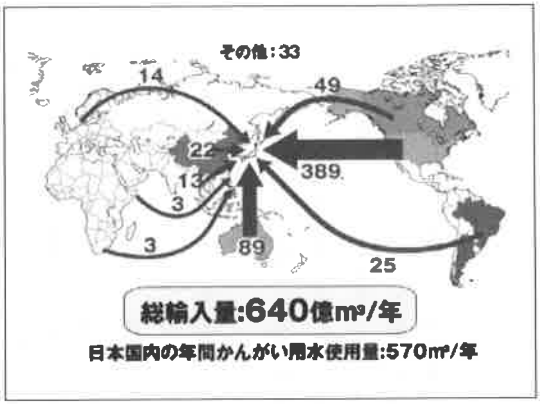


図4

それでは、仮想水の輸入量が多いと何が問題なのでしょうか。仮想水の輸入量が増加すると、その地域の水使用量が増え、水事情が悪化していきます。その結果、その地域では農作物の収穫量が減少したり、砂漠化を引き起こしたりします。現在、世界の穀物の半分を生産し

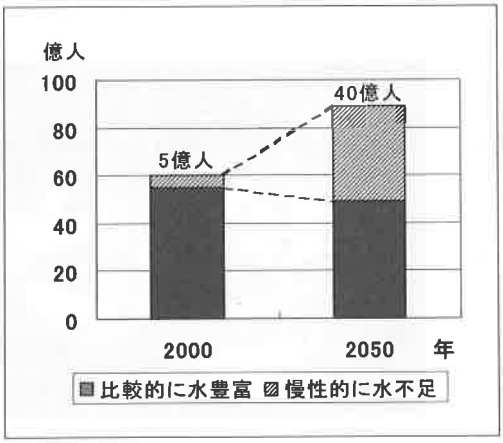


図5　将来の水不足

ている中国の華北平原、アメリカのグレートプレーンズ、インドといった主要穀物地帯では地下水が枯れつつあります。このままの状態が続くと大規模な食料不足に陥る可能性があります。そうなると、食料の多くを輸入している日本は大打撃を受けることになるでしょう。

そうなると、水問題を考える上で重要なことはやはり水不足ではないでしょうか。

二〇〇〇年には六〇億人中五億人が慢性的水不足の国に住んでいましたが、二〇五〇年には、四〇億人に拡大すると予想されています。今の生活をこのまま続けていたら、比較的に水が豊富とされている国や地域でも、将来的に水不足に陥るかもしれません。発展途上国の中には、一人当たり一日二〇リットルの水が贅沢であると言われています。しかし、日本では生活用水だけでも平均して一人当たり一日三二〇リットルもの水を使っています。私たちは、仮想水という形で水を外国に頼っている今のライフスタイルを、見直す必要があるのではないでしょうか。

上記で挙げてきたように、ファーストフードひとつとってみても、様々な環境問題と深く結び付いています。私たちにとって都合の良いものが、地球にとっても都合が良いものとは限らないのです。

三章　アンケート調査

これまで、ファーストフードが環境に与える問題点を見てきました。では、関大生のファーストフードの利用状況はどのようなものなのでしょうか。三章では、関大生に実施したアンケート調査の結果をもとに、学生の食生活においてファーストフードがどのようなものであるかを見ていきます。

ファーストフードが好きですか？

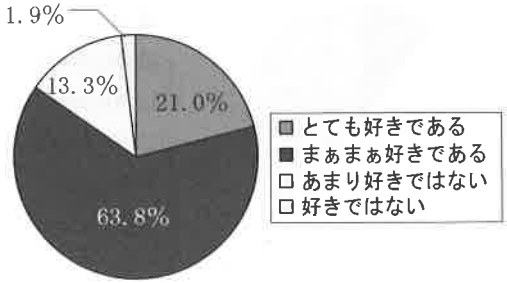


図6

●「ファーストフードが好きですか？」という問いに、「とても好きである」、「まぁまぁ好きである」と答えた学生は約85%、「あまり好きではない」、「好きではない」と答えた学生は約15%でした。

なぜファーストフード店を利用するのですか？

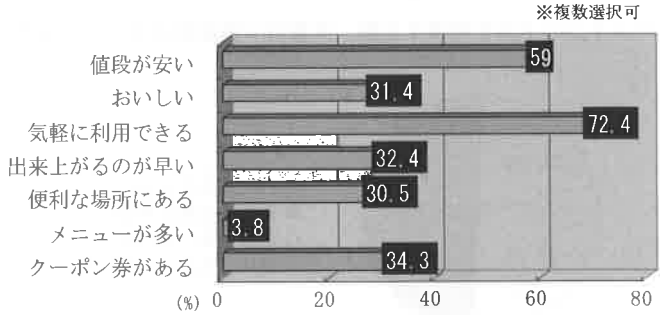


図7

●「なぜファーストフード店を利用するのですか？」という問いに、最も多かった回答は「気軽に利用できる」で約72%、次に「値段が安い」で59%でした。その他にも「おいしい」、「出来上がるのが早い」、「便利な場所にある」、「クーポン券がある」という選択肢に対し、それぞれ30%以上の回答がありました。

どれくらいの頻度でファーストフード店を利用しますか？

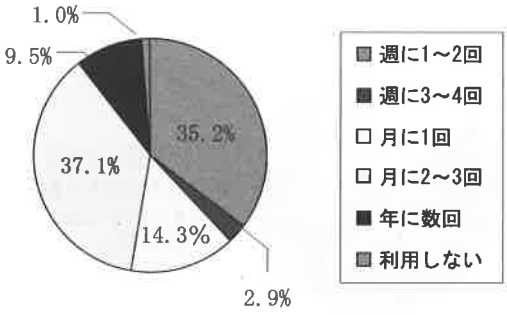


図8

●「ファーストフード店をどれくらいの頻度で利用しますか？」という問いに、最も多かった回答は「月に２～３回」で約37%、次に「週に１～２回」で約35%でした。全体で約90%の学生が月に一回以上、さらにそのうちの約40%が月に二回以上はファーストフード店を利用しているという結果が得られました。

ファーストフード店を利用する際、栄養面や健康面を気にしますか？

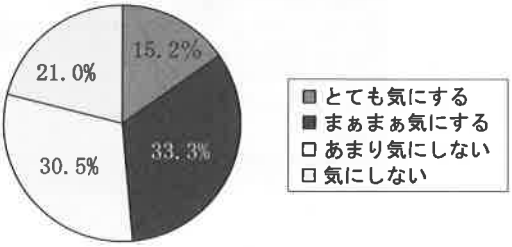


図9

●「ファーストフード店を利用する際、栄養面や健康面を気にしますか？」という問いに、「とても気にする」、「まぁまぁ気にする」と答えた学生は約49%、「あまり気にしない」、「気にしない」と答えた学生は約52%でした。

アンケートの結果から、ファーストフードが好きであると答えた学生が圧倒的に多く、「安くて便利」である点が現代の食生活にファーストフードが定着した背景であることがわかりました。一方で、その半数が栄養面や健康面を気にしながらファーストフードを利用しているという矛盾が生じていることもわかりました。ファーストフードは現代の食生活に浸透しており、全く食べずに生活するのは難しいと言えるのではないでしょうか。ふだん環境問題について学んでいる私たち良永ゼミ生も、忙しいときや時間がないときにはファーストフードを利用することもあります。ですから、「ファーストフードは環境に悪いので食べないで下さい。」と警告したとしても、ファーストフードを利用する機会が減ることにはつながらないでしょう。

四章　私たちからの提案

そこで、私たち良永ゼミ生はこの解決策として〝3CHOTTO〟を提案します。

この〝3CHOTTO〟というのは、「〝ちょっと〟控える」・「〝ちょっと〟考えて選ぶ」・「あと〝ちょっと〟食べる」というものです。

●〝ちょっと〟控える

先ほども言いましたが、「ファーストフードを一切利用しない」ということは難しいことです。しかし、ファーストフードの利用する回数をちょっと控えることはできると思います。私たちはファーストフードが地球環境に多大な影響を与えているということをお伝えしてきました。その解決策としてファーストフードの利用を一人一人少しずつ控えることが一番だと考えています。

読者のみなさん、ファーストフードをちょっとでいいので控えてみてください。そうすることが、ファーストフードにかかわる森林破壊や水問題、エネルギー問題などを解決でき、環境問題に対して関心を持つことにつながる大きな一歩だといえるのです。

●〝ちょっと〟考えて選ぶ

ファーストフードをちょっと控えてくださいといっても、さすがに急ぎの時や、疲れている時などはどうしても利用してしまうことがあるでしょう。でもその時にちょっと考えてみてください。ファーストフードといってもいろんなお店がありますが、フード・マイレージや仮想水といった問題の少ない、国産ものの食材を多く扱っている店を考えて選んでみてはどうでしょうか。国

産ものの食材を多く使用している店を利用することは、他の店と比べて値段も全体的に少々高くなってしまいますが、環境負荷の面から考えれば、海外から安価な食材を輸入している店よりもはるかに環境負荷を低減することが可能なのです。また、国産の食材は新鮮で安全で美味しいというメリットもあります。国産の食材は少々高いものの、こういったメリットに加え、地球環境にも貢献できると考えれば、それほど高い買い物ではないはずです。

●あと〝ちょっと〟食べる

もうお腹がいっぱいだといって、残す前にあと一口食べてください。その一口で少しばかりですがゴミが減るのです。

ファーストフードはただでさえ水問題や森林伐採などといった環境負荷がかかっているのにも関わらず、私たちが食べ残しをすると、より地球環境を悪化させてしまいます。できるならば〝ぜんぶ〟食べることで、廃棄物ゼロ=ゼロエミッションを実施してみてはどうでしょうか。

以上が私たち良永ゼミ生の提案した3CHOTTOというものでしたが、こうした私たち一人一人のちょっとした意識の変化を行動に移すことが、地球環境を守っていく上で非常に重要だと考えています。

最後に

この文章を読んで、みなさんは少しでも環境問題を身近に感じたでしょうか。今後はファーストフードを手に取る前に、もう一度考えてほしいのです。自分が一体何を食べているのかを。ファーストフードに潜む様々な環境問題を。

そして、自分たちの住んでいる地球に関心を持ってください。私たちが起こすほんのちょっとの行動が地球にどのような影響を与えるのか。逆にほんのちょっとの行動が、環境を守ることにつながるということを考えて下さい。一人が百歩進むよりも、百人が一歩ずつ進む事の方が大切なのです。

そのちょっとの関心があなたに芽生えますように。私たちはそう願っています。

（かさい　ゆうたろう・さとう　ひろき
にった　まさよ・ふくだ　しゅん
やまだ　えり　（経済学部四年生））

食の安全性をめぐる
一般消費者と食品研究者の認識の乖離

吉田宗弘

食品に対する信頼性を損ねる報道が相次いでいる。数年前の雪印乳業に始まって昨年から今年にかけても、不二家、石屋製菓（白い恋人）、ミートホープ社、赤福、船場吉兆などが新聞紙面をにぎわした。そして本原稿執筆中にも、中国製餃子への有機リン系農薬混入が報道されている。消費者の食品に対する信頼性は地に落ちたといっても過言ではない。「私たちはいったい何を信じて何を食べればいいのか」という叫び声が聞こえてきそうである。

近年の食の安全性に関する問題は、①消費期限切れ、もしくは通常は廃棄されるはずの食材の転用もしくは再利用、②賞味期限や産地の偽装表示、③有害物の混入、などのパターンに分類可能である。もちろんこれらが重複しているケースもあるが、①に該当するのは雪印乳業、不二家、ミートホープ社、赤福、②に該当するのは石屋製菓、船場吉兆、③に該当するのは中国製餃子への有機リン系農薬混入、BSE発症の危険性のある米国産牛肉、鳥インフルエンザウイルスに汚染された鶏、となるであろう。ただしこれらの中で、実際に健康被害を発生させたのは、雪印乳業と餃子に混入していた有機リン系農薬のみである。その他の事例は、精神的なものは別にして、具体的な健康被害はほとんど発生させていない。本稿においては、食品研究者の立場から、批判を承知の上で、昨今の食の安全性をめぐる世間一般の議論に対す

る違和感を述べ、食品の安全について論じてみたい。

食品企業の問題は何であったのか
（問題の本質は何か）

当然のことであるが、食品の生産・製造者が提供するものは安全でなければならない。ここでいう安全とは、通常の食べ方において「健康を損なうことがない」と定義されるものと思う。ここで「通常の食べ方」という表現をとったのは、どのような食品であっても「無茶苦茶な食べ方」をすれば健康を損なう可能性が高いからである。この点についてはのちほど具体的な例を述べる。筆者は、この定義を用いて「安全」ということに限れば、先に述べた食品企業の大半は罪一等減じられると考えている。もっとも悪質と思われ、廃業にまで追い込まれたミートホープ社のケースにおいても、具体的に身体的な健康被害は発生していないのである。

では先の食品企業はなぜ世間から非難を受けたのであろうか。それは、賞味期限、産地、原材料、使用添加物などを偽装したこと、消費期限が切れたなどの理由で廃棄されるはずのものを再利用したことを黙っていたこと、など食品製造に関する情報を正しく開示しなかったからである。企業の側に、情報をすべて開示した場合に「消費者がその商品を購入してくれるだろうか」という心理がはたらいたことは否めない。消費者が「捨てるはずの餡を再利用した赤福です」「期限切れのチョコレートですが、まだ食べることが可能なので再利用して新たな商品に作り直しました」「くず肉と色々な添加物を混ぜ合わせたミートボールですが、味と食感は（そしておそらく栄養価も）本物のミートボールと遜色ありません」といったコピーがついた商品を喜んで購入するかは疑問である。製紙メーカーによる古紙混入率の偽装という出来事があったが、廃棄物混入率の高い食品を「環境に配慮したエコ商品」として消費者が歓迎するとは到底思えない。企業側を擁護するわけではないが、消費者側の購入行動が食品偽装を生み出した遠因のひとつであることは間違いないだろう。

食品に携わる人間の基本的態度は「食品を捨てたくない」である。すなわち「もったいない」である。消費期限が来るまでに廃棄されているコンビニの弁当類を見ると筆者は心が痛む。穀物をバイオエタノールという名称でエネルギーに変換することにも耐えられない。食品のもとは生物、すなわち生命である。私たちは他の生命を食しているのである。徹底的に食べなければバチがあたると感じることは正しいと思う。

食品に変換された生命を利用し尽くすための、食品の加工技術や保蔵技術は著しく進歩している。多くの食品は適切に処理すれば再利用可能である。筆者の専攻する「食品工学」の技術はこのためのものである。ゆえに、昨今の世間の論議の中に、偽装や情報開示不足でなく、「食品廃棄物を再利用して食べさせた」ということ自体を非難する声が混じっていることに強烈な違和感を覚えるのである。古紙の再利用、プラスチックの再利用などは推奨されているのに、食品廃棄物を再度食べ物に加工することはなぜ非難の対象になるのだろうか。

食品添加物

食品加工とは、そのままでは食べ難いものを食べ易いものに変換する技術といえる。食品の加工や長期保存に食品添加物は必須である。そこで次に食品添加物について説明しよう。

(一) 定義

食品衛生法第四条第二項では、「添加物とは、食品の製造の過程において又は食品の加工若しくは保存の目的で、食品に添加、混和、浸潤その他の方法によって使用するものをいう。」と記述している。ここでいう添加物が世間でいうところの食品添加物に相当する。難しい表現で記されているが、食品添加物とは「食品の機能を保存または高める目的で食品に添加される物質」と考えればいいだろう。食品添加物は、国が定めた基準を満たしたもの、いいかえれば指定もしくはリストに収載（これらをまとめてポジティブリストという）されたもののみが使用できる。

(二) 法律上の分類

食品添加物には二とおりの分類基準がある。一つは、表1に示す指定添加物、既存添加物、天然香料、一般飲食物添加物という食品衛生法上の分類である。「指定添加物」とは、食品衛生法第十条に基づき、厚生労働大臣が安全性と有効性を確認して指定したものである。当初はかつて合成添加物と称したものがこれに相当したが、現在では天然物由来であっても新たに食品添加物として利用する場合には安全性評価が義務づけられており、合成物と天然物の双方を含む。「既存添加物」とは、長い食経験のある天然物から作られた食品添加物で、例外的に食品衛生法十条を適用しないものを指す。かつて天然添加物と呼ばれたものであり、世間からは指定添加物よりも安全であると思われているが、実は安全性の確認がすんでいないものが多い。このため厚生労働省では既存添加物の安全性評価を積極的に進めており、アカネ色素

表1．食品添加物の分類

食品衛生法上の分類	
指定添加物	370品目
既存添加物	418品目
天然香料	612品目
一般飲食物添加物	72品目
用途別の分類	
食品の保存	保存料、酸化防止剤、防かび剤または防ばい剤
おいしさの改善	
色調の改善	着色料、発色剤、漂白剤、光沢剤
味の改善	甘味料、調味料、酸味料、苦味料
香りの改善	香料
物性（食感の改善）	増粘剤、安定剤、ゲル化剤または糊料、乳化剤 膨張剤、ガムベース
栄養価の改善	栄養強化剤
製造上必須	製造用剤等

のように安全性に問題ありとして収載リストから削除されたものもある。「天然香料」とは、バニラ香料やカニ香料など、着香を目的として動植物から得られた添加物で、一般に使用量が微量であり、長年の食経験で健康被害がないとして使用が認められているものである。「一般飲食物添加物」とは、一般に食品として飲食に供されているものを添加物として使用するものと定義されている。オレンジ果汁を着色の目的で使用する場合や、こんにゃくの成分であるマンナンを増粘の目的で使用する場合などがこれに相当する。

（三）用途別の分類

食品添加物はその用途に従って、表1に示すように、①甘味料、②着色料、③保存料、④増粘剤、安定剤、ゲル化剤または糊料、⑤酸化防止剤、⑥発色剤、⑦漂白剤、⑧防かび剤または防ばい剤、⑨乳化剤、⑩膨張剤、⑪調味料、⑫酸味料、⑬苦味料、⑭光沢剤、⑮ガムベース、⑯栄養強化剤、⑰製造用剤等、⑱香料、の十八種類に分類される。これを整理すると、食品の保存に関係するもの、食品のおいしさを改善するもの、食品の栄養価を改善するもの、食品の製造上必須のものという分類ができる。食品の製造上必須というのは、豆腐製造における「にがり」、中華麺製造における「かんすい」などが

表２．化学物質の安全性を評価するための試験法

一般毒性試験	28日間反復投与毒性試験	実験動物に28日間繰り返し与え、生じる毒性を調べる
	90日間反復投与毒性試験	実験動物に90日間以上繰り返し与え、生じる毒性を調べる
	１年間反復投与毒性試験	実験動物に１年以上の長期間にわたって与え、生じる毒性を調べる
特殊毒性試験	繁殖試験	実験動物に2世代にわたって与え、生殖機能や新生児の生育におよぼす影響を調べる
	催奇形性試験	妊娠中の実験動物に与え、胎児の発生、生育におよぼす影響を調べる
	発がん性試験	実験動物にほぼ一生涯にわたって与え、発がん性の有無を調べる
	抗原性試験	実験動物を用いてアレルギーの有無を調べる
	変異原性試験 （発がん性試験の予備試験）	微生物や動物細胞を用いて、遺伝子や染色体への影響を調べる

相当する。こうしてみると、食品のおいしさに関係するものは、色調の改善、味の改善、香りの改善、物性（食感）の改善に細別される。こうして分類項目をあげるだけでも、食品添加物を駆使してそのままでは食べ難いものを食べ易いものに変換していることが理解できるであろう。私たちは、食品添加物が存在するからこそ、食物を長期間保存でき、本来食べられないものをおいしく食べることができるのである。添加物によって本物らしく仕立て上げられた食品を「添加物まみれ」と批判することは簡単であるが、このような食品によって私たちの食生活は支えられているのである。私たちは食品添加物のおかげで食中毒（微生物および酸化物に起因する）と飢餓から解放され、一年中様々なものを食することが出来るといっても過言ではないのである。

（四）安全性評価

まずことわっておきたいことは、「この世の中にまったく無害な物質は存在しない」ということである。すなわち、ある物質が人体にとって有害であるか否かの判断は定量的なものであって定性的なものではないということである。このことは薬のことを思い浮かべていただければ容易に理解できることである。

食品添加物の中で、指定添加物は安全性評価が義務づ

けられている。安全性評価には表2に示すように様々な方法がある。現在認可されている指定添加物は、世界中の研究機関で実施された安全性評価をもとに定められた最大無作用量（無毒性量）の一〇〇分の一量を一日摂取許容量（生涯にわたって毎日食べ続けても安全と考えられる量）とし、これよりもさらに摂取量が少なくなるように使用量が定められている。このことを理解すれば、天然物由来というだけで安全性評価が義務づけられなかった既存添加物のほうがよほど危険であることは明らかである。このため厚生労働省では既存添加物の安全性評価を緊急の課題と位置づけ、これを実施している。その結果、先述のアカネ色素のように、収載リストからはずされる（すなわち使用禁止となる）ものが出現しているのである。

それでも一般消費者の中には、「個々の添加物の安全性評価は行われているが、実際の食生活では多種多様な添加物を使用しており、それらの複合的な影響は検討されていない」、「内分泌かく乱物質（環境ホルモン）のように今まで知られていない毒性があるかもしれない」などの不安を抱く人は多い。後者の「未知の毒性」については科学の及ぶところではない。これを言い出すと何もできなくなるとだけ述べておく。

前者に関して、厚生労働省は食品添加物一日摂取量実態調査を実施している。平成十二年の報告書によれば、成人の場合、硝酸塩の一日摂取量が一日摂取許容量をこえている。ただし、硝酸塩は野菜類などの天然物に大量に含まれており、一日摂取量のほとんどは添加物ではなく天然物由来である。硝酸塩以外にも、リン酸、アルミニウム、鉄の一日摂取量が対一日摂取許容量比一〇％を超えているが、着色料や保存料に関してはすべてが一％未満であった。そして国は、調査の範囲において、食品添加物の摂取量に関する安全性について問題となるような知見は認められなかったとしている。この判断は専門家の意見を総合したものであり、筆者は信頼できると考えている。なお、食品安全委員会リスクコミュニケーション専門調査会において、「食品添加物を使用しない食品が添加物使用食品よりも健康にいいという科学的証拠は全くゼロであり、無添加食品を健康にいいという誤解を与えて販売することは詐欺商法に近い」という発言が出ていることを付記しておきたい。

天然物だって食べ方を誤れば有害である

（一）魚肉

食品そのものに含まれる成分が人体に有害な影響を与

える場合がある。これはフグ卵巣や毒キノコのような明らかな生物毒とは別の話である。数年前に、水銀（メチル水銀）濃度が高いという理由で一部の魚種（キンメダイとカジキ類）に関して、妊婦を対象に摂取制限が勧告されたことを覚えておられるであろうか。この水銀は環境汚染に起因するものではなく、自然に蓄積したものである（ヨーロッパの博物館に保存されている産業革命以前に捕獲されたマグロ標本から現在と同水準のメチル水銀が検出されている）。この摂取制限は、魚種ごとのメチル水銀濃度の最高値とメチル水銀の一日摂取許容量をもとになされたものである。勧告が妊婦に限定されたのは、水俣病の経験から、メチル水銀の毒性が胎児に対して大きいことが判明していたからである。大型魚ほどメチル水銀濃度が高いことから、日本人の好むマグロ類についても十分なモニタリングの必要なことは明らかである。以前、テレビでマグロ一頭を短期間少人数で食べ尽くすという企画が放映されたが、そのような行為は水銀の毒性という立場から見れば危険きわまりないといえる。

（二）ヒジキ

現在、食の安全ということでもっとも議論されているのはヒジキに含まれているヒ素である。ヒ素は古来より毒物の代表として扱われてきた。とくに亜ヒ酸に代表される無機のヒ素化合物の毒性は強く、遺伝毒性や発がん性のあることも証明されている。現在、ＷＨＯでは無機ヒ素の一日摂取許容量を体重五〇キログラムの人に換算して一〇七マイクログラムとしている。

自然界において、ヒ素は海水中に高濃度に存在してい

る。このため、海藻類やこれを主食とする甲殻類（エビ、カニ）には、高濃度のヒ素が蓄積している。しかし、これらの海産物に存在するヒ素は、無機ヒ素よりもはるかに毒性の低い有機ヒ素であるため、毒性学的な問題はないと見なされてきた。ところが英国において行われた各種食用海藻類の分析は、ヒジキが高濃度の無機ヒ素を含有することを示していた。この分析によれば、水戻ししたヒジキは、グラムあたり最高で二十三マイクログラムの無機ヒ素を含んでおり、一日に五グラム近く摂取すれば、許容摂取量をこす可能性があることになる。英国食品規格庁はこの計算にもとづき、国民に対してヒジキを食べないように勧告している。同様の規制はカナダにおいても行政指導として実行されており、欧州ではヒジキの販売規制すら検討の対象となっている。

これに対して日本の厚生労働省は、日本人のヒジキの一日あたりの平均摂取量が一グラムに満たないことなどを理由にヒジキ摂取に関する勧告は行っていない。しかし無機ヒ素には、発がん性以外に、より低濃度曝露によって催奇形性を生じるという報告もされていることから、妊娠女性と乳幼児はヒジキを摂取すべきではないという意見もある。以上のような状況をふまえ、日本の食品安全委員会がヒジキ摂取について、何らかの制限を勧告する可能性は高い。日本では、ヒジキが鉄を豊富に含むことから、鉄の摂取不足を予防・解消するために、食事指導においてヒジキの積極的な摂取を呼びかけることがしばしば行われてきたが、今後はこのような指導は控えるべきであろう。このことは、現実的な健康被害という観点からは、食品添加物の毒性よりもヒジキによるヒ素中毒のほうが確率的には大きいことを意味している。

結びに替えて

日本の食糧自給率は先進国中最低である。今や世界中から様々なものを輸入しなければ食生活は成立しない状況である。自給できるはずの穀物や野菜類まで輸入に頼っている。これは国が経済的な効率のみを重視して、農業を見捨てたからである。たんに安く生産できるというだけで、外国で生産した作物類を利用している。しかし、過剰な農業生産は必ず土地の砂漠化を引き起こす。また、水産物も世界中で水揚げされたものを集めているが、このことによって水産資源は枯渇しつつある。食糧資源の効率的な利用というのは地球環境の保全という観点からも重要なのである。その意味で、食品の保存や加工に必要な食品添加物は必須のものと理解していただきたいのである。

昨今の食の安全に対する消費者の不信感の大部分は情報開示に関することである。したがって食品企業は自信をもって食品の製造過程を公表すべきである。期限切れの食品を再利用したものについては、消費者に安心を与える意味で第三者機関を設けて品質の評価がなされるべきであろう。そして消費者側も食品廃棄物利用に対する意識改革が必要となる。ヒジキをめぐる議論は、食品添加物無使用ということが、食の安全に結びつくものではないことを示している。添加物を使用しない食品でも、限度を超えて消費すれば健康に悪影響を及ぼす。食の安全をめぐる議論は定量的でなければいけない。食品添加物は適切に使用する限り健康に悪影響を及ぼすことはない。そのままでは食べることができないものを食べることができるものに変換する技術がいかに素晴らしいものであるかを今一度強調しておきたい。

（よしだ　むねひろ・化学生命工学部教授）

カット　檀上奈津美

彼女がオーバーステイになったわけ

ある中国人実習生の事例から

早崎直美

はじめに

私は、「すべての外国人労働者とその家族の人権を守る関西ネットワーク（ＲＩＮＫ）」という名称の団体で、中国語による相談活動をボランティアで行っている。

日本には一九八〇年代後半から多くの外国人労働者がやってくるようになった。その背景には「先進国」と「開発途上国」の経済格差があるが、グローバル化の時代に、母国での現状を打開し自分の将来を切り開くために、海を越えることを一つの選択肢とする人々が増えることは何の不思議もない。日本も少し前までは移民を送り出す国であった。南米等に渡った「日系」移民の子孫たちが、今多数来日して働き、生活していることはよく知られている。

多くの移民を受け入れて成り立ってきた国と違って、日本社会には自分たちとは異質な者や新参者への抵抗感が強い傾向がある。この日本で外国人であることは、往々にして「デカセギ外国人」「外国人は〇〇だ」と、外国人をひとくくりにステレオタイプで表現する言質にさらされることとなる。外国人に対する偏見や差別も根強く存在する。

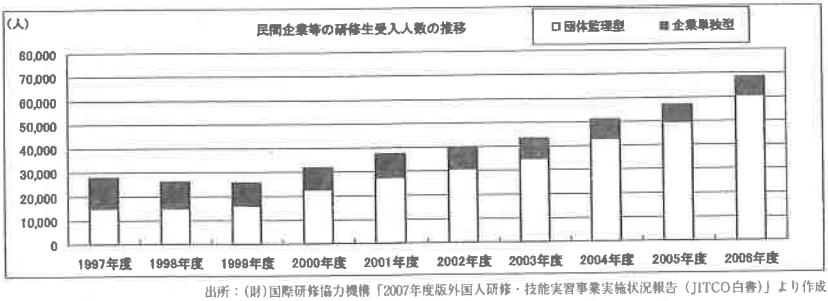
日本で暮らす外国人が生活の中で様々な困難にぶつかったとき、多言語で相談にのれるＲＩＮＫのような団体にＳＯＳの電話が入る。私は相談活動を通じて、日本

人と結婚した人、留学生、日本で就職している人など実にいろいろな外国人と知り合ってきたが、八年前福井県で働いていた中国人実習生からの相談を受けたことをきっかけに、現在は主に中国人研修生・実習生からの相談に対応している。一昨年ぐらいから相談が増え続け、そのなかから制度そのものがもつ問題点を痛感させられている。

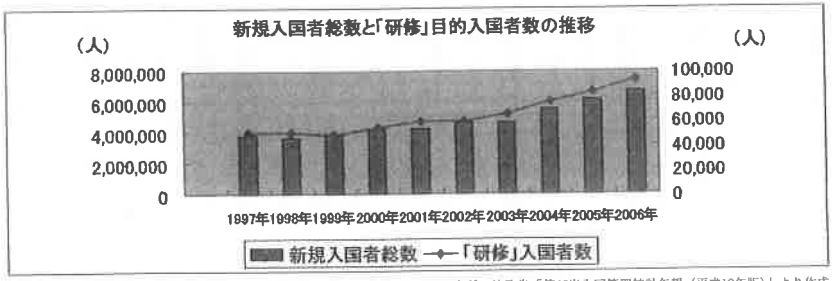
問題だらけの外国人研修・技能実習制度

この制度は、もともと来日した研修生が日本の技術を学ぶという名目でつくられた。しかし実際には、研修生たちが低賃金労働者として酷使されるという事例が後を絶たない。研修生は一年間の研修を終えると、技能検定試験に合格した後技能実習生になる。研修で学んだ技術を二年間の現場実習によって高めるという建前だが、研修と実習の実態に違いはなく、ただ単純労働をさせられている場合がほとんどだ。技能実習に移行できる職種は限られているので、移行できない職種では一年ごとに研修生が入れ替わって働いている。私の知り合いがアルバイトしていた仕出し弁当屋にも中国人研修生が時給四〇〇円で働いていた。

研修生の受け入れには様々な形態があるが、最も問題



出所：(財)国際研修協力機構「2007年度版外国人研修・技能実習事業実施状況報告（JITCO白書）」より作成



※棒グラフは左軸、折れ線グラフは右軸。

出所：法務省「第46出入国管理統計年報（平成19年版）」より作成

が多いとされているのが団体監理型と呼ばれるものだ。零細企業がいくつか集まって事業協同組合を立ち上げる。そこを通せば、家族経営で日本人の従業員が一人もいない事業所でも研修生・実習生を九人まで受け入れることができる。昨年末外国人の在留を管理する法務省入国管理局が、外国人研修生・技能実習生の在留に関する指針を改訂したが、ようやく上記のような事業所では適正な研修が確保されないので受け入れを認めないとの方針をうちだした。日本政府には、制度がもつ矛盾をそのままにしておくならば、来日した外国人が人権侵害の被害者になるばかりであるということを肝に銘じてもらいたいと思う。

以下、私が出会った一人の実習生の事例を紹介する。彼女のエピソードを通して、読者の皆さんが今現在この日本で生きている外国人労働者の現実の一端を知り、彼女たちとこの日本社会で共に生きていくためにどうすればいいのか考えるきっかけとなれば幸いである。

突然の強制帰国

Yさんは中国上海から来日、実習生として大阪の縫製工場で働いていた。初めて彼女と知り会ったのは一九九八年、私が研修生の問題に関心をもち始めたころであった。毎日かなり遅くまで残業をしているが、出来高計算のため時間にするととても低い残業代しか払われていない、毎月生活費として基本給のうちの一万円と残業代が現金で渡される、それ以外は強制的に貯金させられ、通帳は会社が管理しているという実態を聞かされた。

その次にYさんに会ったとき、彼女にはとんでもない事件が起こっていた。Yさんの働いていた会社から最近二人の実習生が逃亡した。さらに逃亡する者が出て入管局から研修生の受け入れ停止処分が下ることを恐れた会社は、Yさんを無理やり帰国させようとしたのである。どうやら、彼女が同胞の男性と交際しており逃亡する恐れがあると、仲間の実習生が会社に密告したらしい。ある日の早朝、会社の宿舎に協同組合から何人かの男性がやってきた。まだ寝ていたYさんは無理やり起こされた後、彼らの監視のもとで荷物をまとめさせられ、そのまま関西空港に連れて行かれた。彼女は帰国したくないと泣いて抵抗したがどうにもならなかったそうである。そして、関空で何とかすきを見て逃げ出してきたと言う。彼女はとても悔しそうに、自分は逃げるつもりなどまったくなかったのにとつぶやいていた。

そんな彼女に再び予想外の事態が出来した。同じ協同

組合の別の会社でやはり実習生として働いていたYさんの妹が、姉が帰国せず逃亡したため、妹も逃亡する可能性があるという理由で帰国させられてしまったのだ。私は何と乱暴なことをする協同組合かとあきれたが、Yさんは自分のせいで妹が巻き添えになったことに衝撃を受けており、自分は帰国してもいいので、何とか妹を戻してもらえるよう協同組合と交渉できないかと私に頼み込んできた。

実習途中で入管局の再入国許可もとらずに帰国した場合、その実習生が同じ実習を受ける者として再来日できる可能性はない。見込みのない交渉ではあったが、私は協同組合のやり方は明らかに行き過ぎだと思い、責任者に会いに行くことにした。協同組合の理事長は、Yさんが関空から逃げて身を隠したことをとりあげ、彼女はやはり外部に知り合いがいた、あのまま会社に置いておいたらきっと逃亡したとも言い切って、自分の行為を正当化した。妹についても、今後姉が逃亡の誘いをかける可能性が高いから帰国させたと平然と言い放った。

研修生を受け入れている会社では、Yさんと妹の身に起こったような突然の強制帰国が頻繁に行われている。来日にあたって母国で多額の手数料を親戚などから借金して支払ってきた研修生たちは、三年間の満了以前に帰国させられることを非常に恐れている。それを知っている社長たちは、研修生たちに言うことをきかせるため、何かあれば帰国させるという脅しをすぐ口にし、必要に応じて実行する。外国人の入国には慎重な審査をする入管局も、帰国に関してはノーチェックで、自分の意志に反して帰国させられる研修生たちを救うことができないのが現実である。

返還されない強制貯金

その三年後、Yさんから「実習生時代に働いていた会社が倒産したらしい。実は当時一〇〇万円ぐらい残っていた預金を解約しないまま空港に連れていかれた。帰国後渡すと言われ、現在までもらっていない。会社に請求したいので助けてほしい」という依頼があった。

私は協同組合に連絡をとったが、以前会ったことのある理事長は、社長は空港で渡したと言っていると言い、社長の連絡先も教えてくれようとしなかった。私は会社の破産管財人弁護士を探し出し、事情を説明して社長に問いただしてもらえるよう依頼した。弁護士の問い合わせが功を奏したのか、しばらくして社長から私あてにYさんに一一〇万円を渡すという連絡があり、Yさんは私の立会いのもと無事自分の働いてためたお金を受け取る

ことができた。

Yさんは何とか貯金を取り戻せたが、最近会社や協同組合が逃亡した研修生たちの貯金をかってに解約して（通帳や印鑑を会社が保管しているのでこのようなことが可能になる）、中国の派遣会社に送金する事例が増えている。研修生たちが帰国後返還を要求しても、逃亡したことへのペナルティだと言って返還に応じない。貯金は賃金の一部であり、会社は本人に直接支払うことが労働法で決められている。労基法違反以前に、会社が労働者本人になりかわって貯金を解約するのは犯罪行為に他ならない。

Yさんについても、強制貯金そのものが違法であるうえに、それを帰国後渡すというやり方は、本当に渡されるかどうか何の保証もない理不尽なものであった。さらに、もしYさんが一人で交渉していたら、貯金を取り戻すことはほぼ不可能だったと推測される。何しろ社長は最初すでに渡したと大うそをついたのだから。

久しぶりに会ったYさんは、帰国させられそうになった当時と比べずいぶん明るくなり、日本語もじょうずになっていた。今は小規模の縫製工場に正社員として雇われており、日本人と同じ待遇で働いていると話してくれた。

「不法な就労」はあるのか？

それからしばらくしてYさんから以下のような相談をされた。現在彼女は社長の信頼を得て仕事を任されているが、オーバーステイ状態だ。在留資格をとって日本に住み続ける方法はないだろうかというのである。

日本に住む外国人は、自分の在留状態や身分に合わせて入管局で在留資格の申請をし、許可を受ける必要がある。Yさんは実習生だったので、「特定活動」という在留資格をもっていたが、強制帰国事件以後オーバーステイ（正規の在留資格がない状態）になっていた。Yさんのような外国人が在留資格をとれる可能性は、現状では日本人との結婚など限られたケースでしかない。残念ながら私は、現状ではYさんが在留資格をとれる可能性はまったくないと答えるほかなかった。

そしてつい最近、Yさんが働いていた会社の社長から、彼女が摘発され大阪入管に収容されたと連絡があった。社長によれば、自分の会社は衣服の見本を製作する会社で、Yさんには縫製の技術とセンスがあり、また営業能力もあってどんどん顧客を増やしており、今は工場長待遇で仕事の一切を任せていた。Yさんのおかげで会社は最近業績があがり黒字になったところであるとのこ

とであった。

私は、Yさんの身分について知らされていなかった社長が、彼女の裏切りに怒っているのではないかと思ったが、真相を知った社長はむしろ彼女の能力を惜しみ、彼女が日本に留まるすべがないことをとても残念に思っていた。Yさんは収容後すぐに帰国を決めたらしい。社長は他の従業員を始め顧客を含む一〇〇人以上の人が彼女の帰国を惜しんでいると語った。

出入国管理法を厳密に適用すれば、社長は雇用する外国人の身分確認に落ち度があったことになり、「不法就労」を助長した罪に問われることになる。Yさんと社長、同僚、顧客との間に築かれていた信頼関係を思うとき、私には一つの大きな疑問がうまれてしまう。Yさんは入管法上は「不法滞在」であるが、その労働は「不法就労」ということばで表現していいのだろうかと。私自身の意見を言わせてもらうなら、私は、労働そのものが犯罪にあたるような就労でない限り、不法な就労は存在しないと思っている。Yさんが自身の努力で会社の業績向上に貢献した労働はどこに出しても恥ずかしくないものだと思う。

おわりに

Yさんの事例は私にいろいろなことを考えさせた。外国人労働者が日本で生活するときには、在留資格の種類や有無が非常に重要な意味をもってくる。しかしながらYさんの事例からもわかるように、現実には在留資格と外国人が人間らしく生きられることとは必ずしも一致しない。Yさんはオーバーステイになってから、摘発の不安はあっても仕事のうえでは充実した日々を送ることができていた。

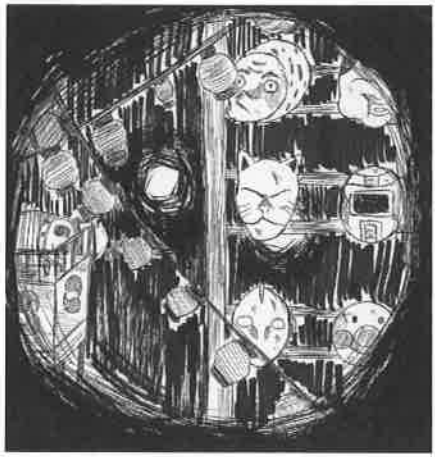
Yさんを雇用していた社長は、大切なのはその人の在留資格がどうかより仕事に対して誠実かどうかだ、外国人を雇用するからといってその身分確認に慎重になりすぎれば、外国人を雇用時に差別することにもなりかねないと語った。実は昨年の一〇月一日から、外国人を雇用する事業主には所轄のハローワークに外国人の国籍、在留資格、在留期間などを報告することが義務付けられるようになった。厚生労働省が出している指針によれば、事業主は「通常の注意力をもって外国人と判断できる場合」には、パスポートなどで報告に必要な項目を確認することとなっている。

一方で同じ厚生労働省は、これまで本人の能力・適性

以外を基準に採用の可否を決めないよう啓発活動を推進してきた。外国人と判断された人が応募にあたって能力・適性に直接関係ない事柄を明らかにせねばならないことは、就職差別を防ぐために取り組まれてきた啓発活動と矛盾するのではないだろうか。外国人を管理しようとする動きが強まるなか、上記社長のことばは重く響く。

Ｙさんは、正規の在留資格があった実習生のときに、人としての人格を全否定されるような目に合っている。もし彼女があのまま帰国していたら、日本という国は彼女に悪印象しか残さなかっただろう。私には、研修・技能実習制度を現状のまま維持することは、日本社会が外国人と対等に関わりあう貴重な出会いの機会をみすみす失うことになると思えてならない。廃止も含む制度の根本的な改善をめざして、私は今後も相談活動を続けていくつもりである。

（はやざき　なおみ・すべての外国人労働者とその家族の人権を守る関西ネットワーク（ＲＩＮＫ））



カット　檀上奈津美

民主主義のエッセンスを求めて

「九条の会・アメリカ」設立者 チャック・オーバビーさんからの手紙

（たかだ洋子 訳）

友人、親戚の皆さん、今年もこんにちは。

私たちは今年も皆さんと一緒に、美しい〔地上の万物の母なる大地〕地球に重力のシートベルトでしっかり繋がれて、時速約六六、七〇五マイルの速さで、私たちの命を支えている星（太陽）の周り、ほぼ五八四、三三六、〇〇〇マイルの軌道を、無事に楽しく飛行しました。地球は、私たちを運んでくれていますから。そんな風に考えてみれば、二〇〇七年の旅は、とても穏やかでしたね。

他方人間が、人間や地球のために次から次へと創り出したあらゆる無秩序、混沌に目を向ければ、事態はかなり恐ろしいものがあります。目下その一つは、嘘と、ネオコン・セオコン《セオクラシー・神権政治―自分の信じる宗教のドグマだけが真実であると、政治にそれを押し付ける極端な宗教政治のことで、アメリカではブッシュを大統領にしたキリスト教原理主義者たちのこと》の詐欺師達が創り出したあふれんばかりのイデオロギー的偏見や作り話をもとにしている〝石油資源戦争〟―三〇〇万人のイラク難民―恐らく五〇万人のイラク人は死亡（その殆どが、罪のない子ども、婦人、私たちのような老人）―四、〇〇〇人のアメリカ兵の死亡。では、我々はどうかといえば、欲深で、傲慢で、浪費して、我々の母（地球）の資源という宝を不必要にそして不公平に大量消費して地球を病気にして

しまって地球温暖化発熱させています。それは、「学校も、飲み水も、健康保険も（文末でブラックウォーターの本を紹介しますが）戦争そのものも、何もかも民営化」「何の規制もない自由な市場」「おかまいなしのグローバリゼーション」という神様たち（実は、我々の本当の神はまさにこれです）にすっかりひざまずいてしまって、その過程で我々の〝コモンズ（共有財）〟と〝コミュニティ〟を破壊しています。〝コモンズ（共有財）〟というのは、種としての我々が、受け継ぎ、所有し、創造し、まっとうな暮らしをするためにお互いに必要とするものです。それらは、文化と自然からの贈り物で、共有し、そして子孫に伝えていかなければならないものです。空気、水、土地、生態系、太陽光、言語、芸術などや、地域のものから地球規模のものまで例えば、公立学校、図書館、大学、交通機関、通信などのインフラもそうです。〝コミュニティー〟というのは、〝個人としての私たち〟に対して、集団でなければできないことをする〝集団としての私たち〟です。これらに関しては、二〇〇七年新刊の二冊をご紹介します。

（1）ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン、ディザスターキャピタリズムの出現』

（2）ジェレミー・シャヒル『ブラックウォーター、世界最強の傭兵軍隊の出現』

一体全体どうやって我々〔アメリカ人を指している〕は物事をこんなにひどくねじれさせてしまうのか。一つの文化としての我々が麻薬中毒では世界の先頭に立っているのも肯ける話で、この問題に対処するに愚かにも「麻薬戦争」をして軍事的に解決しようとしている。銃と化学薬品を積んで対地攻撃用ヘリコプターを送り、ただアメリカというひたすら巨大な《自由市場》の需要に応えているにすぎないアフガニスタンや中南米の零細農民を殺したり化学薬品を浴びせたりしているのだ。我々は決して「かくも多くの人が、生きていくために麻薬を必要とする我々の社会はいったい何が悪いのか」という重要な問いかけを本気ですることがない。何にせよ我々の文化の《麻薬中毒》《石油中毒》は、軍事で解決できるものではないのに、地球上で我々の種として抱えている諸問題の殆どもそうなのですが、そうであるにも拘らず、アメリカでは、我々はまず、「銃をとれ」となってしまう。

私たちは、我々の優秀な科学者やエンジニアに、今より何十倍も資源節約型の「資源戦争を防ぎ」「地球温暖

化を防ぐ」テクノロジーとシステムを考案し構築するために、その素晴らしい技術を使って欲しい—我々自身のために、そして開発途上国が見習うための優れたモデルとして—などと決して頼むような文化ではありません。私はこういった考えにＧＴＢＤ（グリーンテクノロジーバイデザイン・設計段階からの環境に優しい工学技術）と名づけ自分の工学者としての四〇年間をこのために働きましたが、なかなか受け入れられませんでした。本気でやろうと思うのなら、我々のエンジニアや科学者が、〝戦争のご馳走〟—殺人と破壊のための物づくり—のために、その優秀な科学技術能力を浪費するのをやめろと、強く主張するべきでしょう。

私は今でも日本の戦争放棄の第九条に熱く恋しています。二〇〇七年は再び日本に、北は北海道から本州を通り南は沖縄まで五週間の講演旅行に招かれました。一九九二年から数えて九回目です。私の講演タイトルは「国境のない第九条のマジックを想像してみよう」。三月には、エクアドルのキトとマンタにも行き〝外国の軍事基地をなくそう〟という国際会議に出席しました。我々のグループはマンタのアメリカの影響下にある軍事基地で抗議行動をし、私はそこで戦争中毒のアンクルサムの衣装でちょっとした〝パフォーマンスアート〟をしました。それからまた、平和のための退役軍人の会（ＶＦＰ）のおかげで、九条を手本にした合衆国憲法の修正提案を、五三五名の全ての議員（ＭＯＣ）に送ることができました。予想したことですが、まだ採用されてはいません。ここに述べた事柄について詳しくは私のホームページを見て下さい。www.article9society.org

妻のルースと私、そして、ソルベイ、キム、ハイジの三人の素晴らしい娘達とその家族の皆は夫々、やりがいのあることを見つけながら頑張っています。元気で楽しい話を最後に。私はこのたび、私の小さい水圧式の薪割り機で、家の森の枯れた硬い材木で二〇コードの薪をつくりました。断熱がしっかりした《ＧＴＢＤの》我が家では、三～四年は十分、冬が越せそうです。もう、斧で薪を割る気にはなりません。私はまだ、私のウルトラライト〔超軽量飛行機〕で空を飛んでいません。きっと、二〇〇八年の夏までには、と思っています。飛行機のトレイラーの準備にはちょっと溶接作業が必要です。どなたか、手伝っていただけませんか？

平和を願って

ルースとチャックより

あとがき

皆さんの殆どの方は、私の生きてきた道「ロバートフロストの詩にあるような、人跡の少ない道」について少しはご存知だと思いますが、まだご存じない方は、ホームページに私の短い身上書がありますからご覧下さい。今年のこの二〇〇七年やそれ以前のホリデイノートを読まれて、疑問や関心を持たれた方があるかもしれませんから、書き足します。

私はパイロットです。そして私は、自国を非暴力の方法で批判します。自分の意思で自分の命を二つの戦争、第二次世界大戦と朝鮮戦争で、危険にさらし、私はこの国のために暴力を働きました。B29の乗員仲間や私が朝鮮でやれと言われたことのいくつかは、何年も後に学んだのですが、《戦争犯罪》という行いでした。それらは、第二次世界大戦でナチスが行った時には、〝それを命令した〟ドイツ人たちが何人か、ニュールンベルグ裁判の後処刑されたものでした。恐らくこの話は、なぜアメリカが国際刑事裁判所（ＩＣＣ）に参加したくないのかの理由の説明に役立つでしょう。

今のアメリカ合衆国は、多くの人々にとっての希望の灯台としての道を失っていると私は思います。私にとってはそうです。現代のアメリカで、我々は民主主義のエッセンス〔本質・真髄〕を失ったような気がして心配です。私は私の国を愛しています。他の何百万人かの仲間達と共に、私は、我々がもう一度誇りを持てるようなアメリカに、《付随的損害》とか《消費する機械》とか《操縦されるもの》として人間を見るのでなく、地球上の全

ての人間を尊厳と尊敬を持って接するようなアメリカになってほしいと思います。私は、公平さや、民主主義、コミュニティ、そして、この地球上での軍事的でない、暴力のない、倫理的で、環境保護的な、優しさと愛情のある relationships 人々のつながりを精一杯大切にするアメリカを捜し求めています。

月刊誌『ザ・グリーンシート』に掲載されました。

カット　飯田　健

平和を、二乗、三乗、四乗の平和を

チャック・オーバビー

このホリデイノートに書いたことをもっとよく知っていただくために役立つ、三つの新しい文書を追加しましたから、私のホームページを見てください。www.article9society.org　新しく追加したのは〔一〕『ダルマワールド』という仏教関係の雑誌〇八年一―三月版に寄せた自分の新しい文章で「国境のない九条について考える」という題です。〔二〕〇七年日本講演旅行での私の原稿「国境のない九条のマジックを想像してみよう」〔三〕日本講演旅行中に、日本から六通の手紙を書きました。「日本からの便り」として、地元アセンズの新聞『アセンズニュース』と、アセンズのユニタリアン仲間

書評

『拷問と処刑の西洋史』（浜本隆志著）

魔女の復権はありえるのか

金谷　千慧子

Ⅰ　本書の構成と概観―ヨーロッパ暗黒史の生成メカニズムの解明

本書は以下のような構成になっている。

序章　ヨーロッパ史の光と影、第一章　王殺しの記憶、第二章　異端尋問と死の祭典、第三章　魔女裁判の仕組み、第四章　拷問という権力装置、第五章　処刑する人・される人、終章　ヨーロッパ史の闇の系譜となっている。この構成と流れの中で「魔女」は中心的テーマであり、一貫した負の根源として展開されている。そこで本稿も魔女を中心に検討していく。

本書はヨーロッパの暗黒を描いている。「ヨーロッパの歴史は暗黒の闇を秘めていることは、拷問や処刑をめぐる歴史を見れば一目瞭然である。とりわけ中世・近世においては、拷問は宗教的・政治的支配の強力な装置にほかならなかった。通常犯罪のみならず異端審問、ユダヤ人狩り、魔女裁判に例外なく拷問が導入されていた。常に治安の維持や公共の安寧が優先されており、当局はそのお墨付きによって、拷問を残酷なものとしてではなく、必要不可欠なものとみなしていたからである」（一一頁）。

私たちは、ヨーロッパの光の部分だけを追いがちである。啓蒙主義、ヒューマニズムの精神、音楽、芸術などに憧れを抱いてきたのである。しかし影の部分は決して隠蔽されてはならないし、輝かしい近代文明と残酷な闇の世界をじっくりと見つめ、そこから、歴史における残酷性の生成メカニズムを解明する必要があると、著者は言う。戦慄のページを開いていこう。

Ⅱ　本書の眼目―「魔女裁判」は、『神判』だったか

(1)　むしろ、倒錯した性的な妄想を楽しむための言いがかりではなかったのか

第三章「魔女裁判の仕組み」では、多くの魔女裁判の事例が提供されている。魔女裁判の儀礼とマニュアル、魔女の判定、スピード裁判と処刑などの項目では身の毛もよだつ虐待が描かれ続く。著者は、魔女裁判はキリストの名において実施された一種の「神判」であったというが、その意味は「魔女狩りの関係者の多くは、悪意を持って無慈悲に残酷な行為を行っていたというより、むしろ魔女の存在を憎み、自分の職務を忠実に全うしようとしていた。裁判関係者の大部分も、敬虔なクリスチャンであり、かれらは拷問の際に被告に聖水をかけ、神が真実を啓示して、神が真実を啓示してくれるよう祈っている。被告の方も、どれほどの拷問を加えられても、無実であれば神が救済してくれるはずであると固く信じ、拷問を受けながらもキリストの加護を念じていた。それゆえ異端審問や魔女裁判は、キリストの名において実施された一種の『神判』であった」、という。この「絶対的な神は、裁判所側と被告側の座標軸であるが、両者の信仰の食い違った「二重構造」のなかに、裁判所という権力装置の底なしの暗黒面がクローズアップされてくる（二二九～二三〇頁）」いう。つまり、裁判所という権力装置の暗黒部分のせいでこんな結果になったという解釈のようである。

「敬虔なクリスチャンは罪を犯すはずはない」のではなく、敬虔なクリスチャンだからこそ法廷に関わり得たのであり、敬虔なクリスチャンだから罪を犯したと私は思う。それ以外の誰がこんな空恐ろしい犯罪を犯し得るだろうか。

魔女とされた人たちは、神の名の下に、ゆえなき言いがかりとぬれぎぬで、拷問に痛めつけられ続けた。それはローマ教会を頂点とした女性を排除した閉鎖社会で、倒錯した性的な妄想を楽しむための言いがかりであると思う。著者は「魔女の存在が疑いないものとされ、サバ

ト（魔女集会）も実際に開かれていたと確信されていたといっている。かつ女性が悪魔に誘惑され、性的関心を持ちやすいという、女性蔑視の抜きがたい先入観もある」（八一頁）と記しているが、私は、魔女の存在やサバトなども、キリスト教の「処女懐胎」や「神は男のために、男の身体（あばら骨）から女を造った」といったあり得ないことが宗教的真髄になっている土壌が諸悪の根元だと思う。人権感覚の芽生えがない時代の産物でもあるが、この土壌は女の男への従属、女性蔑視思想が下地となっているのは言うまでもない。

(2) フォークロアの視点からの成功

著者は、「裁判の被告（女性）も、自分は敬虔なキリスト教徒であり、無実であると固く信じていたので、神はきっと自分を助けてくれるはずだという、信念を持っていた（七九頁）」と記述しており、この前提で、民衆のフォークロアの視点を入れたという。民衆の言い伝えや公開処刑された女性の血を喜んでもらい受けたなどなどである。フォークロアの視点をいれ、本著作は幅と広がりが持てた、としている。

19歳のジャンヌダルク像

この被害者の神への信念については、かなり理解困難なことが多い。映画「ジャンヌダルク」でもここがもっとも理解しにくい所だと思われるが、百歩譲って「持っていたとしても」、魔女は一方的被害者であっただけである。裁判所と犯罪性や人権問題で対決して敗訴したから火刑なのではない。その意味では、裁判官も神学者（法学者も）もよってたかって、性差別と性的妄想にわが身をゆだねていただけである。

Ⅲ　私の読後感からすると

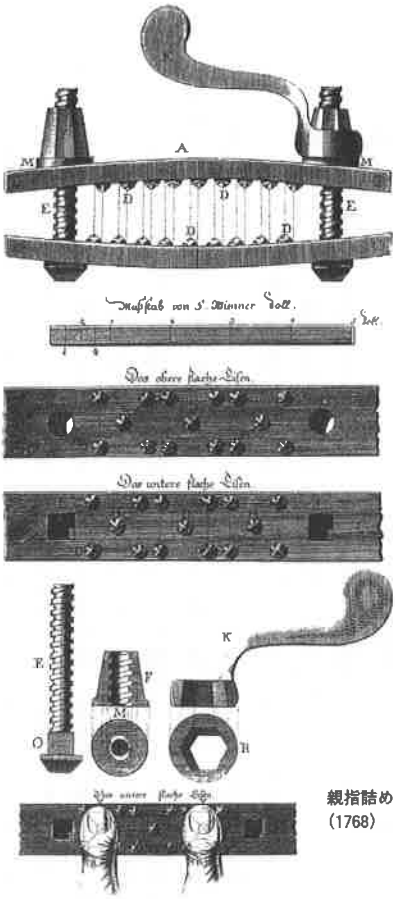
しかし、しかし……。私の読後感としては、視覚的にもわかり易い図版を多用してあることも相まって、常にマイノリティを生きてきた女である私は、この書を読み通す間に、どのくらいの回数、親指詰め、ローソク責め、はしご吊るし、生きながらの火あぶり、首切りなど

の公開処刑などに痛め尽くされたことか。鋭い痛みと絶望感に沈み込んでしまう。

しかしその痛みと悲しみは、ジュール・ミシュレの『魔女』（篠田浩一郎訳）や森島恒雄著『魔女狩り』を読んだときとは少し違う感触である。これらには告発の書としての使命感のような志が感じ取ったが、本書にはなんとなくいたぶりを楽しんでいるゆとりを感ずる。

本書は学術書として客観的な記述を目指している。資料の信憑性を充分吟味し、事実に基づいて検証しながら叙述されている。実際に現地での文献収集をはかり、それを図版や資料を多用し、視覚的にもわかり易い展開をはかっている。著者はあとがきで「拷問や処刑というテーマは、たしかに日本でも好事家の目を引き、ヨーロッパの文献が翻訳されたり、興味本位に取り上げられたりしたことがある、それもことさらに興味本位に」とある。それに反して本書は、あえてそれを避けていると明言している。確かに視覚的にもわかり易い図版の多用は、一般読者をも本課題（ヨーロッパの暗黒史のなぞ）に引き釣り込む手立てになっている。

しかし、裁判所と被告は両側の席に対座していたので



親指詰め
(1768)

拷問用具の図

はないし、女性は一方的な被害者である。女性（男性魔女もあったが）は、自らを貶め続けられる（ミシュレのいう化け物じみた思想的倒錯）と、自ら倒錯した魔女を納得してしまいがちである。その背景があってこそ、あきれるほどのあの手この手の拷問用具の開発（親指詰め、紐締め、梨型の金属の塊を口に差し込み拡大する、天井つり下げ、犬輪付き拷問椅子、はしご吊、ろうそく責め、水責め、魔女のしるし探しの針刺し、鉄の処女などなど）への意欲や裁判調書と称して、拷問の様子を悲鳴までも含めてあきれるほど几帳面に記録することなどがある。それも性的な残虐行為がほとんどである。これらの拷問用具のわかりやすい図や使い方は相当綿密に記述されている。

(1) ミシュレは言う

「『魔女』はローマ教会の犯した犯罪である」と

ミシュレは言う。『「魔女」はいつの時代から始まるのか。私は、ためらうことなく、それは「絶望の時代からだ」と言おう。ローマ教会の世界が産んだ深刻な絶望から生まれたのだ。私は、ためらうことなく、「『魔女』はローマ教会の犯した犯罪である」と言おう。「化け物じみた思想的倒錯のために、中世は人間の生身の肉というものを、その代表（イブ以来呪われた）女のうちに、不純なものとして眺めていたのだ。「聖処女」は「聖母」としてよりは、処女として称賛され、現実の女性の地位を高めるどころか、逆にその地位を低めてしまったのであり、その理由は、人々は純潔の問題をめぐっての煩瑣哲学の道に迷いこみ、ただやたらと末梢的でたらめな議論にふけるだけのことになったのである。女性そのものも、さいごには、このおぞましい偏見を持ち、おのれを汚れたものだと思いこんでしまった。女はお産をするために身を隠すようになった。ひとに恋すると顔を赤らめ、人に幸福を授けると顔を赤らめるようになった。（略）……その女性がほとんど、存在すること、生きること、生活のさまざまの条件を果たすことに、ゆるしを乞うようになったのである。羞恥心のあまり、へりくだった殉教者となった女は、われとわが身に刑罰を加え、ついには、脳髄よりも三倍も神聖で、かつては礼拝の対象であったこの腹部をひとの目から隠し、もともとなかったもののように装い、ほとんど抹殺しようと欲するまでになったが、男性という神様は、この腹から生まれるのだし、永遠に生まれ返るのである」（岩波文庫版上巻一九〇～一九一頁）と。

(2) さらにミシュレは言う

「ところが彼女たちは不屈の憐憫の情で、この宗教を養い、まだ生きつづけさせたのである。しかしかの女性はなんという犠牲を払ったのだろう」と

ミシュレはまたいう。焼き殺された魔女たちが宗教を正しく生き返らせ甦らせたと。

「『自然』が彼女たちを魔女にした」といっているが、魔女とは、「『女性』に固有の「精髄」とその気質なのである。女性は「妖精」として生まれる。規則正しく反復される気分の高揚をつうじて、女性はシビュラ（預言者）である。

愛によって、彼女は「女魔法使い」である。産婆であった女性は村の医者であった」と。ところが力強く活力ある宗教が、やがて失墜し、病に陥り、中世の暗黒に包まれるや、宗教に魅惑と後光とを与えた女性のすばらしさが魔女だというひと言ですべて、奪い尽くされた。ところが彼女たちは不屈の憐憫の情で、この宗教を養い、まだ生き続けさせたのである。しかし、かの女性はなんという犠牲を払ったのだろう。

「こうした全ての宗教について、『女』は母であり、やさしい保護者でありまた忠実な乳母なのだ。神々も人間たちと同じで、彼女の乳房で育てられ、そこに抱かれて死ぬのである」、ともいっている。

私は、アメリカのフェミニスト研究者バーバラやディアドラなどとともに、中世までの村での女性の預言者的、医療者的役割が中世の堕落した宗教により、魔女にしたてられ、魔女裁判という欺瞞により、焼き殺されたのだと思う。その意味で神学部に続いて創設される法学部の法学者が果たす欺瞞性には現在に通ずるものを感じる。

そしてミシュレがいうように、魔女とされて虐殺された女性たちの犠牲のおかげで、「堕落した、病に陥った宗教を生き伸びさせた」という主張に納得もする。

(3) 『魔女狩り』はこう結ぶ

今後とも狂信と『新しい魔女』と政治とが結びついたとき現出する世にも恐ろしい光景を、出現ささないようにしよう！と

森島恒雄『魔女狩り』にも、「この迷信と残虐の魔女旋風が、中世前期の暗黒時代においてではなく、合理主義とヒューマニズムの旗色あざやかなルネサンスの最盛期において吹きまくったということ、しかもこの旋風の目の中に立ってこれを煽り立てた人たちが、無知蒙昧な町民百姓ではなく、歴代の法皇、国王、貴族、当代一流の大学者、裁判官、文化人であったということ、そして

いまひとつ、魔女は久遠の昔から、どこの世界にもいたにもかかわらず、このような教会や国家その他の公的権威と権力とが全国的に網の目を張りめぐらしたこの上なく組織的な魔女裁判によって魔女狩りが行われたのはキリスト教国以外になく、かつこの時期（一六〇〇年をピークとする前後三、四世紀間）に限られていたこと、―これはきわめて特徴的な事実ではあるまいか。魔女裁判の本質は、結局、この「地域」と「時期」との関連の中にある（岩波新書七頁）」。また結びのことばは「しかし、『新しい魔女』はこれからも創作され、新しい『魔女の槌』の神学が書かれるかもしれない」になっている。今後とも狂信と政治が結びついたときに現出する世にも恐ろしい光景を、出現ささないようにしよう！　という力強いメッセージが胸を打つ。この二つの古典的な「魔女論」に比べ、本書は、学問的精密さはあるが、メッセージ性は少ないといえるのではないか。

Ⅳ　拷問と処刑と自白と裁判制度

第四章　拷問という権力装置は、本書の中核をなすものだと思う。魔女との関連で考えれば、ゲルマン法による弾劾主義をとるイギリスでは、ほとんど火刑にあう魔女はいなかったとある。弾劾主義では、真実を解明し犯罪者を処罰することが裁判官の役割とされ、対立構造は「裁判官v.s.被告人」という図式となる。弾劾主義では、有罪無罪などを判断する者（裁判官の役割）と、犯罪を糾弾する者（検察官の役割）が分かれる。基本的な対立構造は「検察官v.s.被告人」という図式となり、裁判官はどちらにも与せず判断に専念する。それに反して、「自白は証拠の女王」とされるローマ法と糾問が結びついた

アンネ・ヘンドリクスの火刑（1571）

ドイツでは、魔女の処刑比率は格段に多かったというのは納得できる。ドイツ刑法はローマ法の影響を強く受け、証拠や被告の自白を重視し、肉体に苦痛を与え自白を導き出す拷問が、一三世紀以降広まっていった。魔女裁判は実行犯ではなく（風評やうわさでも告発できる）、証拠がないから実証することができない。そこで証拠づくりに拷問をエスカレートさせていく。

この糾問主義・弾劾主義は、刑事裁判における運用の違いであるが、歴史的には、先に糾問主義があり、のちに弾劾主義が登場した。現代では、先進国では弾劾主義が圧倒的に優勢である。糾問主義では被疑者の自白が大きな意味を持ち、客観的証拠より重く評価される傾向にある。そこで自白させるために拷問が正当化され有罪になる。著者も記しているように、「異端尋問や魔女裁判の根拠は、今日の目から見れば荒唐無稽であり、拷問も現在では無条件に非人道的な行為だと弾劾できる」（あとがき二二九頁）。

しかし今重要なことは、当時の人びとの意識構造の深層を知り、「この時代の目線に合わせた分析を前提とした上で、現代の視点からの解釈が重要になってくるのではないだろうか」（同）、という結語は重要である。そしてそれは、教育現場で教材としての「魔女」をどういう視点で扱うのかという課題とも重なる。さらに自白偏重主義からまっすぐに続く死刑制度そのものにも検討を加えるヒントになると思われる。

本書が、一人でも多くの知性の人に手にとってもらうことを願っている。そして光輝くルネサンス文化にあこがれる多くのヨーロッパ通に、暗黒の歴史の存在を再認識してもらい、さらに私の意見としては、暗黒史の被害者はなぜ、罪のない女性に多かったのかを心深く考えるきっかけにしてもらいたい。（了）

（かなたに　ちえこ・人権問題研究室委嘱研究員
関西大学非常勤講師）

『拷問と処刑の西洋史』
浜本隆志著
新潮選書
2007年12月20日刊　236頁
（本体価格　1,100円）

（本文で使用しました図は『拷問と処刑の西洋史』より転載しました。編集部）

図書紹介

部落解放運動を通し、日本の姿を照らす肉声

『荊冠の志操―西岡智が語る部落解放運動私記―』

（西岡智 著　編集・解説　黒田伊彦・田中欣和）

田中欣和

「狭山」と利権主義批判

部落解放運動が急速に社会的影響力を拡大した一九七〇年代、西岡智氏はその全国指導者の一人であった。七〇年代解放運動で、「三大闘争」といわれたのは同和対策事業の完全実施を求める闘争、部落民石川一雄氏の冤罪を訴えその解放を求める狭山闘争、学校法人関西大学を含む多くの企業や大学が購入していた被差別部落のリストを含む差別文書に関る地名総鑑糾弾闘争であったが、西岡氏は特に狭山闘争の全国的組織者（狭山闘争中央本部事務局長）として知られていた。

同和対策事業によって、当時貧困、失業、不良住環境等が集中していた実態を改善していくことは差別意識を解消するためにも不可欠のことであったし、実際に住宅、道路、上下水道、公共施設等の整備等はかなりの成果をあげた。しかし、後述するようにその進展は解放運動の中にモノトリ主義や利権派の勢力伸張といったことも伴ってしまった。その傾向を抑え、ただす役割を当時になっていたのが、対権力闘争としての狭山闘争であった。西岡氏はその中心であったし、運動内左派潮流と当

時みられて「中研派」＝部落解放中国研究会のリーダーでもあった。

その西岡氏が全国指導者としていわば「失脚」したのは、利権主義、より正確にいえば利権主義に甘い傾向に抗し、敗北したことによってであった。中央執行委員を辞任せざるを得なくなった時以後の氏は、全国の少からぬ活動家には意識し続けられたが、運動の本流からはずれた人と見なされてきた。部落解放研究所の理事や釜ヶ崎の運動との関りでその動静が伝えられることはあっても、世代交代が進むうちに「過去の人」としてすら知らない人が増えてきた。

聞き書きを通して

こういう人の事蹟を忘れられるままに放置することは、日本の反差別運動の全体像をゆがめることになる。部落解放運動が日本の人権運動の先駆者としてその突破口を切り開いてきたこと、その役割はアメリカの人権運動における黒人運動の役割に匹敵することを認める人々のうちですら、なぜその運動が利権主義にゆがめられていったのかを疑い、不信感を持つ人が増えてきた。運動の誠実な総括が必要だと多くの人がいいながらも、それが鮮明に示されることがないままに、世紀の変わり目をむかえた。

私自身、解放教育運動との関りを自分の仕事の軸としながら三十数年が経過した。教育運動に関してはその総括の素材をある程度語ることはできても、解放運動の総体に関わるものとしてできることは、運動の理念を具体化していった私より年長の活動家の聞き書きをまとめることであり、自分の本をまとめるより先に西岡智氏の本を作ることだと思うようになった。本書は私と黒田伊彦氏（矢田解放塾の指導者で西岡氏と行動を共にして長い。関西大学にも非常勤として長く出講していただいた）とが、聞き書きを整理し、解説を加えてでき上ったものである。私も注文生産的な仕事を除いては、まとまったことのできる時間は年間にそれほどなく、本書を作るのに二年以上かかった。一つには、はじめはコンパクトにまとめるつもりだったのが、二〇〇六年から七年にかけて次々と暴露されていった同和行政をめぐる「不祥事」とそれをいいことにして解放運動の正当な成果までも否定する動きとに対応する必要から、それらをどう見るか、また今後の運動をどう改めるかに直結する部分をふくらませることにしたためである。

同和事業をめぐる不祥事については解放同盟の活動家やその周辺に位置する私たちのような者にも早くから意

識されてきた。私が解放運動全体については肯定的な評価を持ち続け、それと連帯する活動を続けて来れたのは同盟内で利権主義をただそうとする多くの人がいることを具体的に知っていたからであった。それにしてもその人々の動きが全国的な力にはなり切れないままの経過があった。

一つの山場は一九八一―八二年であった。解放同盟の専従中執のうちの二人、西岡智氏と駒井昭雄氏（元京都府連委員長）が連名の「意見書」を提出し、「不祥事」の根源を断つべく問題提起を行った。中央本部も一定の自己批判を含む総括をした。しかし、その自己批判を徹底するための大衆的総括論議や具体的な是正方針は不十分であった。論議の過程ではむしろ「西岡・駒井意見書」の動きは当時の上杉書記長（のち委員長）引きおろしのための策動と誤解され、本質からそれた所に焦点づけられ、「西岡失脚」という結果になった。もし、この時期に本来の問題に集中することができていたら、その後の展開は異るものとなっていたであろう。「意見書」も示したようにすでに一九七七年の大会で「代議員は口々に同盟組織と右翼融和主義者との癒着、暴力団の介入を怒りをこめて指弾」する状況があったのだ。

〝入門書〟としてつくる

本書の最終章のタイトルは「解放運動再生への提言――ピンチはチャンス！」である。不祥事から「戦後最大の危機」におちいった解放運動は、そこから教訓をくみとり、率直かつ徹底的な総括を行えば、かえって組織の自浄力を高め、社会的信頼度を高めることができるという意味である。こういうオプティミズムは運動再生の鍵だと私も思う。

本書の構成を示しておく。

Ⅰ．生い立ち
Ⅱ．初期の運動体験
Ⅲ．矢田教育差別事件
Ⅳ．部落解放中国研究会の結成
Ⅴ．松本治一郎から学んだこと
Ⅵ．狭山闘争中央本部事務局長として
Ⅶ．荊冠と銀のしずく―アイヌ民族との連帯
Ⅷ．闘いの中で出会った人
Ⅸ．『西岡・駒井意見書』と今日の不祥事
Ⅹ．解放運動再生への提言――ピンチはチャンス！

いわば本書の編集者である私自身の思いからいえば、本書は現代史への証言記録である。部落解放運動を通してこの何十年かの日本の姿を照らす鏡である。運動のプラス面もマイナス面も率直に語る肉声である。

部落解放運動に一般的な関心を持つ人、その理念は支持するという人は少くない。しかしその運動は人間によって進められるのだから、その失敗や腐敗の可能性を含めて示されなくてはリアルではない。本書は、これまでの運動にそれほど具体的な知識を持たない人が読んでも理解できるように作ったつもりである。ある意味では「入門書」として利用してもらえることも期待している。

一人の人間の生い立ちから具体的な体験を通じて部落解放運動がなぜあの時期に急成長したのか、当時多くの人の胸を打ったかがよく判るはずであるし、またその運動の再生を願う気持もよく判るはずである。もっとも適切な典型的人物を選んでよかったと思っている。

（たなか　よしかず・前人権問題研究室室長）

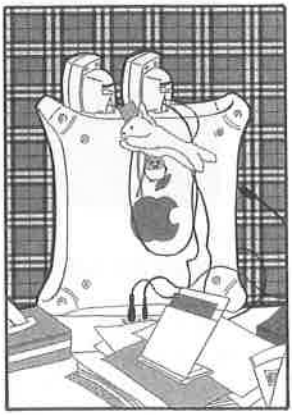
『荊冠の志操
　—西岡智が語る部落解放運動私記—』
西岡　智 著
編集・解説　黒田伊彦・田中欣和
つげ書房新社　2007年11月刊
（本体価格　2,800円）　304頁

出版社探訪(3)

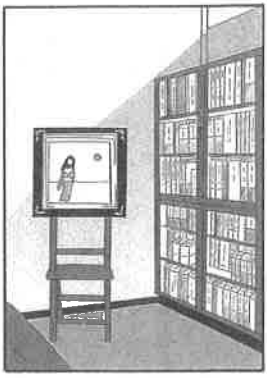
小さな声よ、届け

═海風社═

土倉麻由



大阪から〝南島〟をみつめ



〝海〟と〝風〟という南島のイメージを社の名前にあらわした「海風社」は、地下鉄天満橋駅四番出口から西に少し歩いたところにある。初めて出版社を訪ねるので身構えていた。しかし、ふたりの女性、代表の作井文子さん、編集部の松井初美さんからお話を伺うにつれて、次第に緊張がほぐれた。

社名通り南島に関連した本を一九八〇年から出版し続けている。あえて、辺境の地〝南島〟に光を当て、その地の文化、民俗やそこに暮らす人々の姿をテーマにした『南島叢書』を、一〇〇巻刊行すると挑まれている。現在(二〇〇七年一二月)まで八七巻を発行してきている。この『南島叢書』を世に送り出すため海風社を興したのが作井満さん。「本土と南島のはざまを架橋しようという試み」であり、「近代において被抑圧者からの真実の声を不当に封殺したまま埋もれつづけてきた未解放部落、在日朝鮮人、辺境としての東北・アイヌ・南島など、近代的な日本語文脈がとりのこしてきた闇の領域」をす

くいとる出版活動を目的とした。作井満さんは、「一〇〇巻完結後には、生まれ故郷の浜でひとり散歩し、浜辺で黒糖焼酎をチビチビやりたい」と夢を語っていた。その夢が脈々と、作井満さんの亡き後、ここに息づいている。「琉球圏から離れた大阪の地から見続けると、新しい発見がありますよ」とふたりは微笑まれた。

『南島叢書』の節目となる八八巻目に、版画家　儀間比呂志さんの絵本『テニアンの瞳』をこの春に発刊する準備をすすめている。これまで儀間さんの世界を『画文集新版画風土記　沖縄』『版画集儀間比呂志の沖縄』『絵本　沖縄の鳥人　飛びアンリー』『儀間比呂志　絵本の世界』と題して、私たちに届けている。儀間さんの著作は、版画という手法で視覚的に南島の世界を訴えかけてくる。戦争を題材にした版画に、私は恐しく目を背けたくなる。恐ろしい画と感じるうちはそっとしておいた方がいいと思っている。知る準備ができたときに手にとって儀間さんの想いに触れてみたいと思う。編集者は、「本の世界は映像の視覚とは違うのですよ。読む人の知識量とか体験とか、いろいろな要素がからみ、左右されて想像の世界が広がります」とやわらかくことばをかけてくれた。

耳を澄まさなければ聞こえない小さな声

『南島叢書』のほかに「どこかが出さないと発見してもらえない小さな声の本を出版しています」とその一冊『キラキラ　どもる子どものものがたり』（堅田利明著）を紹介してくれた。「少数者の、小さく純粋な声を知っている人はもちろん、知らない人にも読んでもらい、新たな発見をしてほしい」とさらっと語られた。

訪問後、買って読んでみた。吃音（どもり）のある主人公、長谷君がクラスメートの前で「このしゃべり方は、僕だけのもので、まねできないと思います。（中略）

これは、僕のしゃべり方なので、仕方ありません。だから、皆も、しかたないと思って、聞いてください」と

話す場面には、著者の想いが私の中に満ち、涙がでた。人と違うことは決して可哀相でマイナスなことではないのだと長谷君は伝えようとしている。

このような耳を澄まさなければ聞こえないほど小さく、そして純粋な声が刻まれた本があるのを知った。

『南島叢書』として出された八七巻はそのような想いに綴られているのであろうと思えた。

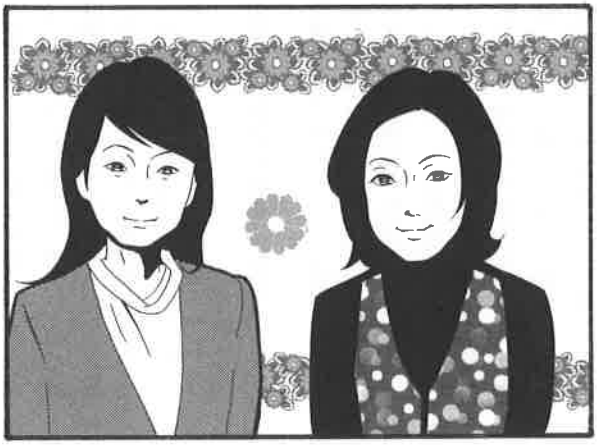
目録の頁を繰ってみた。

関根賢司著『ヤポネシア私行』『おきなわ評論』、福地曠昭著『オキナワ戦の女たち　朝鮮従軍慰安婦』、関広延著『コザの音楽家』『現代学校まんだら』『現代の沖縄差別』、高良勉著『琉球弧・詩・思想・状況』、三木健著『オキネシア文化論―精神の共和国を求めて』、岡部伊都子著『伊都子南島譜』、藤井令一著『南島文学序論』等々の表題が目についた。

小瓶に詰めた純粋な想いが風に乗って大海を渡り、運命的に誰かに届いていく。

小瓶を開けてその想いに触れるのはあなたかもしれない。

（画・文　つちくら　まゆ・政策創造学部二年生）



代表の作井文子さん（右）と編集部の松井初美さん（左）

文庫をあるく

認めることと、理解すること

―関西沖縄文庫―

土倉麻由

のびやかに交わり、ぶつかり合う

昨年の冬至、冷たい雨が降る日、ＪＲ大正駅から市バスに乗り、小林で下車し、少し歩いたところにある「関西沖縄文庫」を訪ねた。魔よけのシーサーが目に入った。約束した時刻より二〇分ほど早く着いた。主宰者の金城馨さんは、前日にあった「大江・岩波沖縄戦訴訟裁判」の取材に来阪された『琉球新報』の記者から取材を受けておられた。その間に文庫の一室を見て回った。ここは金城さんが三二歳の一九八五年に、沖縄文化を発信する拠点として自宅の一部に設け、沖縄の文化を伝える場所として広く開放されている。

部屋の一方に沖縄の物産を陳列、販売している。他方の広いスペースの四方の壁面に書籍がぎっしりと並べられている。

本棚の奥にも棚があり、背文字が並んでいた。そこには沖縄の近現代史、琉球時代の歴史の本、伊波普猷、柳田国男、宮本常一などの著作や沖縄の祭祀など民俗関連の本、柳宗悦などの著作や沖縄の工芸、民芸などの本、上野英信、島尾敏雄などの数々の本が歴史を漂わせ、詰まっていた。そして、アイヌ民族に関連して少数民族の本が多くあった。金城さんは、アイヌ民族は「未開人」と和人に呼ばれ、侵略され、とりわけ明治以降、少数民族に落し込まれ、その鉄の爪が、明治中期「琉球処分」

以降、沖縄の人々にも鋭く突きたてられ、沖縄人が日本人でないと知らされた歴史であった、と話した。「生きるために、職を求め」沖縄を離れ、大阪などに来た人々が、求職やアパートの広告に「朝鮮人・琉球人おことわり」と書かれた露骨な偏見と差別のことばに曝された。戦後、米軍の統治下の時代、「祖国復帰」以降、集団就職で大阪に来た沖縄出身者は文化やことばの違いで、差別を受け、涙を流し、怒り、嘆き、悲しみ、生き抜いてきた。そのような苦闘の歴史の本を一冊、一冊と古書店を歩いて買い求めた。それら七千冊以上の本がこの一室にある。

主宰者の金城馨さん

金城さんは、一冊の本を示した。二〇〇八年一月に発行予定の崎谷満著『DNAでたどる日本人一〇万年の旅―多様なヒト・言語文化はどこから来たのか?―』（昭和堂）を読むように勧め、多くの島々に分かれて暮らさなければならない日本列島の民が、沖縄を虐げつづけ、沖縄を省みずに、「暴力」をもって沈黙を強いる差別の連鎖の歴史を問われた。沖縄が「同化」と「異化」の相反する時間の堆積の上に生き続ける。そのたくましく、のびやかな沖縄の文化とことばのエネルギーがヤマトの人々を新しく魅了している。手の届くところで沖縄と出会い、交わり、ぶつかり合うそんな場所が、「関西沖縄文庫」である、と主宰者はゆっくりと語った。本棚の前に三線（サンシン）があり、沖縄独自の空間を醸し出している。

「同じ」であることの押し付け

金城さんは私たちの集団意識の危うさを問われた。「同じであることに疑問を感じませんか。ふたりの人がひとりの人になることはできません。そこでひととの交わりが大切になり、自分と違う人を知ろうとします。そうすると、知っていると思っていた自分自身があやしくなります。目を背けずに、お互いの〝違い〟をどのよう

に認め合っていくかが重要になってきます。〝違い〟を認め合うということは理解ではなく分らないことを受けとめることです」と金城さんはやさしく、丁寧に語る。私は、意識せずに何もかも一緒を強要するわがままな、そして自分の無知を認めない横暴な人を周りにみかけ、友達との付き合いがヘタな人のことを思い浮かべていた。

金城さんは、集団主義の「数の暴力」や「同じであることの押し付けの理解」を問題にあげた。他者との関係が対等でない現実の世界では、違いを認め合う難しさが日本にあり、少数民族に負わされていると歴史的な経過から説き起こした。「行動などの違いから、日本人に近づかなければならないという思い」と「〝普通〟ということばにひそむ差別」を指摘した。

「日本は沖縄に基地を押し付け、六〇年以上たっている。この現実に日本人はどのように責任をとるのかと自問したでしょうか。疑いもなく、多数の意見に従いますと答えています。これを押し付けと思いませんか。〝私には関わりない〟とこの問いから逃げています」「また戦争と平和を分けて考えています。戦争は平和時に準備されているでしょう。日本軍は一九四一年一二月八日に真珠湾奇襲作戦〝トラ、トラ、トラ〟を行いました。軍の命令で戦争が突然はじまったのです。この意味を考えることは現在に繋がっています。先日の一二月八日に〝トラ、トラ、トラ前夜二〇〇七―戦争の風に吹かれて―〟を企画して、行いました。ここで戦争と平和のサカイはないのだと発信しました」と、「戦争」と「沖縄」の「現在」を語った。

金城さんが主張した〝差別の連鎖〟のことばの海の中に、私は遠い出来事のようにリアル感が薄くなり、もがき、沈んでいった。金城さんは、〝してやったり〟というように笑いながら、「その混乱が大切ですよ」とかけられた声で、さらに混乱の波をかぶった。

目の前で三線を聞く

偶然居合わせた趙秀美さんが三線を弾き終えられたのでお話しを伺いました。趙さんはミシガン大学で人類学を専攻し、沖縄の芸能を調査するため、自ら三線を弾き、深く沖縄を理解するためこの文庫に通っていると自己紹介をいただいた。そして、沖縄の芸能を文字であらわすのは難しい点があり、現在、音であらわすため練習していますと述べられた。その後、私のためにあらためて三線を弾き、沖縄のリズムを奏でてくれた。調べから琉球音楽に根ざしたリズムが国境や民族を超えてひろがる沖縄の芸能文化を感じた。

三線を弾く趙秀美さん

私たちはアメリカの歌を唄い、沖縄のことばで唄わない

金城さんは、本来もっている沖縄のエネルギーが失われてきていると述べた。混乱させられている私に追い打ちをかけてきた、と身を固くした。

それは、この地（大阪・大正区）に根付く沖縄文化として行っている〝エイサー祭〟に、参加者が一万人を超えたことであるという。その関係を聞いた。この〝エイサー祭〟に沖縄出身者以外の人々が共感し、広がる嬉しさの一方で沖縄の独自性が埋もれてしまうのではないか、と金城さんは語った。その例を関西の人が話す関西弁と関西以外の人が話す関西弁に違和感があることと失われてきているパワーをあげ、同じ現象が沖縄にみられた、と説明された。ＮＨＫの朝のテレビドラマ『ちゅらさん』の中で、堺正章が演じ、話す沖縄のことばを、一時期〝まちゃあき弁〟と称して流行らせ、笑い飛ばした。しかし、沖縄のイメージがこのように「日本人向けの沖縄商品」として間違って消費される根の深い問題がある、と言及した。

「メディアの力で沖縄の音楽がわかりやすく、ＣＤで普及しています。たとえば、「島唄」は日本人に分りやすい歌となっています。しかし、沖縄の歌とはいえない。日本人がつくった日本語の歌で、日本人による沖縄イメージソングに変わっています。ところで私たちはアメリカの歌を日本語で唄っていません。得意になってアメリカ語で唄っています。このような違いは、なにか。虚構性をうみだし、民族（俗）音楽の根源性が喪われているのではないだろうか。新しいものを伝統は受け入れる力をもっています。ただのモノマネではない、エネルギーを内包して、今日に至っています。芸能は生活の一部であり、人の生活は消費されるものではありません。

これまでの日本の近代化は地域文化を壊し、築いてきました。この歴史的な文脈でとらえていく必要があります。アジアにつながる沖縄の歌、芸能の民族性に新しい光をあて、発掘する作業をこれから発信したい」と熱く語った。

さらに、金城さんは「集団自決」などの沖縄戦の証言集めに挑まれている。

「慶留間島出身の女性が文庫に来られたとき、お話をした。強制された〝軍官民共生共死〟を体験されていました。少しずつ私たちの聞き取りに応じられた。〝いざというときは自決〟という張りつめた戦時下、米軍が上陸し、その時、住民は防空壕や山中に逃げた。その女性は、母親と自宅近くの壕に逃げた。別の壕で父親は、『あの世で会おう。後からおいで』の言葉を残し、自決された。『私らも一緒に死ななきゃならんと思っていた。軍がおらんかったら、そこまで思わんかったでしょ』とためらいながら語られた。このような沖縄戦を生き延びた人からの聞き取りを行い、まとめたい」と。

金城さんの話の端々にでた「混乱」「疑う」「悩む」のことばの渦に、私はすでに巻き込まれていた。

「優柔不断で、頑固でありたい」

きっぱりと金城さんは言い切った。

耳に残る趙さんの奏でた三線と金城さん、趙さんのかろやかな笑い声の中、時を刻んでいた。

小雨の中を、自転車に乗って、「用事があるので」と颯爽と去っていく金城さんの後姿を見ながら、したたかな強さをもった〝沖縄〟を知りたいと思った。

（画と文　つちくら　まゆ・政策創造学部二年生）

豊かさを考えた

インド、ネパールで、同世代にふれ

下垣和美

ダラムサラ デモ

二〇〇七年の夏、私はインドとネパールに行った。インドでこの地に昔から住む人々の生活にふれた。また、北西地方の町ダラムサラでは中国のチベットから亡命してきた多くのチベタンと巡り会い、ネパールでは、中国とインドの二つの文化に挟まれるネパールの人々と行き合わせた。

ダラムサラの亡命センター

ダラムサラは首都デリーからバスで一三時間ほどの場所にある。山間にあり、町はそれぞれ二キロほど離れたロウアーダラムサラとアッパーダラムサラに分かれている。ロウアーダラムサラにはインドの人が、アッパーダラムサラにはチベタンが多く住んでいる。日中は二つの町の間を七ルピー(約二〇円)でバンが乗り合いタクシーとして頻繁に行き来している。チベタンが多く住むアッパーダラムサラでは店に並んでいる日用品の品数は少ないので、人々はバンを頻繁に利用していた。

アッパーダラムサラは、端から端まで歩いて三〇分もかからない小さな町であった。坂道の町で、大通りが二つある。大通りの真ん中にお寺があり、一度まわすとお経を一度読むのと同じだとみなされるマニ車が並んでいる。通りには観光客用のチベット仏教グッズ屋、飲食店、散髪屋などが並んでいる。

大通りを下っていくと安宿が並び、通りの入り口にチ

ベットの亡命センターがある。このセンターに中国から亡命して間もない人々が生活している。ここで生活訓練を受けた後、インド各地に移って行く。センターの台所をのぞかせて貰った。そこに大きな直径一メートルはある大きな鍋があり、小麦粉で作った〝すいとん〟のようなものが入ったスープを二人の男性が作っていた。台所にいると、水筒を持った人がお湯をもらいにきていた。

ダラムサラの町中にあるマニ車

中国では多くの人が水筒を持ち歩いている。この習慣はインドでは見られないが、中国の習慣や言葉がこのセンターの中では使われていた。

亡命してくる人のなかには僧侶が多い。朝や夕方に亡命してきて間もない僧侶の読経がよく聞こえてきた。しかし、最近は子供も多く亡命してくると聞いた。センターの入り口では一〇歳ぐらいの子供が数人、退屈そうに階段に座って通りを眺めていた。中国の学校では中国語の標準語で授業をする。多くのチベタンの子供は学校から帰ると親からチベット語の読み書きを教わっている。家での会話はチベット語である。しかし、親の一方がチベタンではなく、家庭内でチベット語が使用されないと子供は会話も読み書きもできなくなるそうだ。そこで、大人たちは子供たちがチベット語を理解できず、文化が途切れるのを恐れ、子供だけでも亡命させるケースが増えているそうだ。

センターのそばにボランティアのイングリッシュセンターがあった。外国からのボランティアや、長期で旅行にきている外国人が先生となり、亡命してきた人がインド国内で困らないように英語を教えていた。インドでは異なる言語が使われているため、英語で意思の疎通をはかっている場面を目にした。

ダラムサラ・コルラ道（巡礼路）

多くの人がセンターを出た後、デリーやその他の各地へ移動して行くが、ダラムサラに残っているチベタンも多くいる。ダラムサラは冬になると寒く、観光客は来ない、また観光業以外の仕事が多くあるような場所にはみえない。しかし、ダラムサラはチベット亡命政府の拠点であり、盛んに政治活動が行われている。僧侶が中心であるが、一般の人や還俗した人も活動に参加している。

私がよく利用していたネット屋は、チベタンの元僧侶の男性が経営していた。チベット自治区のラサから二時間ぐらいの村出身だと言っていた。コンピューターの知識が豊富で、日本語のフォントも使え、快適に通信できる環境が整えられていた。店内に五台のパソコンを置き、昼前の一一時から夜の一一時まで店を毎日開けていた。しょっちゅう店の前に出てきて、チベットの弦楽器を弾きながら、チベット語で歌っていた。このネット屋の前にはオーナーがチベタンの小さなオープンカフェがあり、インドの少年がふたり雇われていた。ふたりは兄弟で、遠く離れたところから出稼ぎにきていると聞いた。このカフェでは、チベット料理が出され、店にいつ行っても休憩中や仕事のないチベタンの男性が何人もたまっていた。そして、いつでも楽しそうに話をし、何人かはチベットにいつか戻りたいと言っていた。

ある日、デモがあると聞いた。チベットに対する中国の弾圧に抗議するデモであると言っていた。デモは夕方からあり、参加した。その日はネット屋がずっと閉まっていた。デモの集合場所は町の二本の大通りが交わるところである。少し早めに着くと、いつもとかわらない雰囲気で、デモに参加しそうなチベタンは見当たらなかった。しかし、それから三十分もしないうちに多くのチベタンが集まりだした。数百人がデモに集まってきた。いつもカフェで話していた人々もやって来た。大通りを三周して、ダライラマの住居のあるお寺に行くと教えてくれ、全員にろうそくが渡され、デモが始まった。テレビ局のカメラマンまで現れ、ＴＶで放映されるとチベット

ガンガーのガート

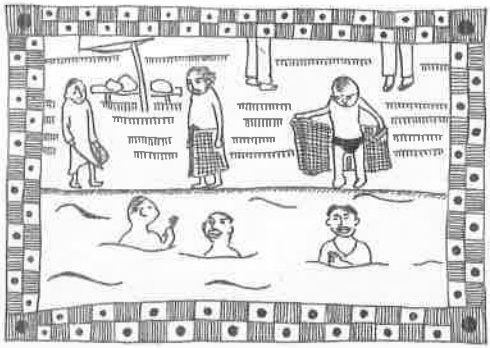
に戻ったとき中国政府に逮捕されると恐れて、隠れるチベタンがいる。デモの先頭を赤い袈裟を着た僧侶がお経を唱えながら歩き、その後ろに尼僧が続いた。そのさらに後ろを、一般のチベタンと外国人観光客が歩いた。みんなでお経を大合唱しながら大通りを三周し、お寺に向かった。お寺では演説があり、僧侶や民族衣装を着た男性、女性数人が演説し、最後はみんなで歌を合唱して終わった。いつも楽しそうに笑っていたネット屋の男性やカフェでたむろしていた人たちが、すごく真剣な顔で、デモに参加していたのが印象的だった。デモが終わり、いつものカフェへ行くと、参加者は高揚感を共有しており、いつもより興奮気味に話しをしていた。

チベットといってもその地理的範囲は広く、同じチベタンといっても場所によって習慣などが違っている。広いチベットの様々な場所から、インドのダラムサラというひとつの町に亡命してくる人々に共通しているのはチベット仏教である。人々を団結させるチベット仏教の力強さをここで感じた。

ヴァラナシ
ガンガーでの火葬と水葬をみる

ヴァラナシは首都デリーから私の乗った電車で十二時

間ほどだった。ここはヒンドゥー教で人気のある神の中のシヴァの聖地とされている。町に着き、宿を探していると、後ろの方からお祭りのような音が聞こえて来た。インドはお祭りが多いので期待していると竹で組まれた担架の上に、金色の紙で包まれた死体が運ばれてきた。ヴァラナシでは、安宿がガンガーという川に平行した通りのそばに点在している。ガンガーには火葬場がいくつかあり、二四時間死体が運び込まれ、火葬されている。



ヴァラナシ　男性の沐浴ガート

川沿いにガート（堤）があり、ガートごとに何をする場所か決まっている。洗濯のガートや沐浴のガート、火葬場のガートなどがある。上流の火葬場の灰も洗濯や沐浴のガートに流れていると思う。しかし、下流では、それを誰も気にせず利用している。

火葬場では死体を担架に乗せたままガンガーに浸して浄める。マリーゴールドの花輪がどの死体の上にも乗せられているのだが、それは川辺に捨てられる。そのマリーゴールドをこぶ牛がはんでいた。こぶ牛はシヴァの乗り物であるため、人々は尊敬している。通りを野良のこぶ牛が闊歩しており、牛が排尿したさいに、その尿で顔を洗っている人も見た。清めが終わると、薪の上に死体をおき、燃えやすくするための粉をかけて火をつける。ある程度焼けると係りの人が死体を小さくして最後まで焼く。焼くための薪代を十分に払わなかった場合、死体は最後まで焼かれない。火葬場には犬もウロ、ウロしており、肉を探していた。

火葬場で出会った男性は、友人の母親が亡くなったと言っていた。男性にインドの人にとって死はどういうものかたずねた。男性は死とは悲しいけれど幸せだと答えた。インドの人は輪廻転生を信じている。男性の友人の母は火葬されたが、火葬されない死体もある。ヒン

ドゥー教では子供や妊婦などが死んだ場合、火葬にはせず、水葬される。いったん、火葬場につれてこられた後、ボートに乗せてガンガーの真ん中に運び、水中に流していた。川には、人の死体の他に牛や犬の死体も死臭を放ちながら、漂っていた。古くからこの土地のルールがあり、それに乗っ取って人を弔っているのである。

インド、ネパールの市民の足、「リキシャー」

畏怖の父と母の寛容

宿のそばで観光業を生業にしている家族に出会った。親族で観光客相手にお土産物屋やボート漕ぎ屋をしていた。お店で働いているのは二〇歳から三〇歳の三人の兄弟と二人の親戚の五人で、人が足りない時には兄弟の父親がボート漕ぎを手伝っていた。

兄弟の家に連れて行ってもらう機会があった。店で働いているのは、次男、三男、四男で、このときは三男が案内してくれた。家の入り口で父親とすれ違ったとき、彼は声もかけなければ、目も合わさず、横を通り過ぎた。「父親じゃないのか」とたずねると、「そうだ」と言う。「なぜ、声をかけないのか」と聞くと「怖いから」という返事が返って来た。

彼らの家庭では、父親は尊敬されるとともに畏怖の存在であると言う。また、四人いる男兄弟のうち三男、四男にとって長男、次男は父親と同じような存在であった。三男、四男は、父親や長男、次男の前では絶対にお酒を飲まないと言っていた。父親の権力は絶対的で、結婚も父親が決めてきた相手とするのが普通だと言っていた。恋愛結婚だと金銭面や家族からの支援が受けられず、厳しく、一般的ではない。若い人たちは恋愛結婚に

憧れ、携帯でこっそり連絡を取り、交際したりしていた。しかし、地域社会の団結が強いインドで、つながりを持たない生活は難しいように思えた。

彼らの家を訪ねたさい、姉や義姉とその子供たちがそれぞれ五人ほどいた。誰が誰なのかはっきりしなかったが、彼らの母親だけはすぐにわかった。おそらく五〇歳ぐらいのお母さんは背が低く、腰が曲がっており、体が痩せて、すごく小さく見えた。何本か抜けた歯を見せながら、よく笑っていた。挨拶すると、私たちに手作りのお菓子やチャイを出してくれた。息子たちは家では、母親に小さい子供のように甘え、何もしていなかった。ただ、小さい子供と違うのはその日の稼ぎを母親に渡していた。しかし、お皿にご飯を盛って、スープをかけるだけのカレーの用意もせず、母親は帰って来る時間の違う男たちの面倒をすべて見ていた。そして、みんな父親に話せないような恋愛の話なども母親には話していると言っていた。

父親が絶対的な力を持ち、そこで暮らして行くための規律を保つ一方で、母親がすべてを許容し、甘やかしており、とてもバランスよく保たれているように感じた。

また、この兄弟たちに映画館にも連れて行ってもらった。そこは、最近できた大きなショッピングビルで四階建ての最上階に映画館があり、映画の料金は町中の三倍から四倍であった。一階にマクドナルドがあり、二階や三階に、ベネトンやナイキ、アディダスなどのお店があった。彼らは週末にこの映画館によく来るのだとうれしそうに話していた。彼らにとってこの映画館は安いわけではない。しかし、少し無理をすれば利用できるのだ。上映される映画は、ほとんどインド映画である。

中国とインドが出会う カトマンドゥ

カトマンドゥはネパールの首都である。周りを山に囲まれた盆地であり、近年は排気ガスなどが盆地にたまり、常に空気が悪い。水も水道管が破損しているところから泥が入るそうで、時折茶色の水が出る蛇口もあった。一泊三〇〇円以下の宿でも安全な水を買っており、屋上にタンクが備え付けられていた。また、電気についても週に二日ほど、夕方から夜にかけて計画停電が実施されていた。インドでも停電はしばしばあったがこのような計画停電は実施されていなかった。

ネパールは観光業が盛んである。また、支援活動などで海外からやって来て、滞在している外国人も多い。観光客が集まる地域では、日本とかわらない日本食や、日

本よりおいしいイタリア料理などの店が多く並んでいた。また、カトマンドゥがヒマラヤ山脈へのハイキングや登山の入り口となるため登山用品の店もたくさんあった。

ネパールには多くの民族が暮らしている。肌の色が濃い人もいれば、薄い人もいる。またチベタンのようにモンゴロイドもいる。服装もさまざまで、私にはいちいち区別がつかないが、ネパールの人の間では都会の人であるとか、田舎のどの辺りの人であると判断がついているそうだ。

カトマンドゥに滞在していると、北や南からやって来る旅行者によく出会う。北からの人はチベットを通りヒマラヤを越えた後、一番はじめに出てくる大きな都市がカトマンドゥになる。南からの人はインドの平地を抜けて、緑の多い山間を通って着く平らな盆地がカトマンドゥとなる。北から来た人と南から来た人が出会い、情報を交換する場となっている

カトマンドゥの町中

ネパールの人はインドの人を嫌っている。理由を聞いてもはっきりしないが、インドの人はネパールの人を馬鹿にしていると言う。子分のように思っているのが気に入らないと言う。かといって中国の人が好きかと言うとこれもまた、嫌いなようである。近年、中国の沿岸部に住む人を中心にチベットやネパールに旅行する人が増えている。カトマンドゥでも多くの中国の人を見かけたが、土産物屋などでネパールの店員に嫌われ、値段をふっかけられている姿を見た。ネパールの人はあまりふっかけたりしないので相当嫌われているのだと感じた。

どちらかというとネパールは文化や宗教などにおいてインドに近いのではないかと思う。国教もヒンドゥー教であると言っていた。しかし、ネパールに住むチベタンを中心に仏教も強く残っている。あるネパールの山岳出身の青年が、自分はネパール人であり、パスポートには国教であるヒンドゥー教徒であると書かれてある。しかし、仏教、ヒンドゥー、どちらのお寺にも行くし、どちらでもお祈りをする。だから自分は無宗教者だ、と言っ

ていた。ネパールの人は二つの大きな国に挟まれ、宗教だけでなくさまざまな面において、両方から多大な影響を受けている。

ストリートチルドレン

旅行者が集まる地区では、ストリートチルドレンが多くいた。ネパールではお店が早く閉まり、夜の九時には通り全体が暗くなる。街灯はなく宿などは重いシャッターを閉めて防犯する。そのシャッターの前で子供たちが集まって寝ているのである。年齢相当に成長していないと思われるので正確にはわからないが、八歳から一三歳ぐらいまでの少年ばかりであった。たいてい彼らは二～三人で行動している。博愛主義を知っているかのように欧米人に近づき、お金や食料を手に入れていた。東洋人は無条件でものを渡さない傾向があるので近づいてこない。多くの場合、彼らはスーパーの前で待っており、出てきた欧米人にクッキーやおつりの小銭などを貰おうとする。彼らはお金を貰うと、接着のりを買って袋に出して吸引する。いわゆるシンナー遊びである。年上の少年が準備して先に吸ってから、年下の少年に渡す。そのすがたは日中でもよく見かけられた。それを知っている人々は絶対彼らにお金を渡さない。苦肉の策として、スーパーの前で彼らを待たせておいて、食べ物を買い与えるのである。何かくれる人には人懐っこい笑顔を見せるが、実際は人を信用していないように見えた。悪い子たちではないが、純粋なだけに大人に対して何をするかわからないという恐ろしさを感じた。

最近、山岳から仕事を求めて都市部に出て来る人が増えたそうだ。彼らはそういった人々の子供であるという話を聞いた。しかし、実際は親がいるのかどうかもわからない。ただ、急速な経済発展を遂げる隣国、中国やインドを見て、豊かな生活を望み、山岳から都市部に出て来る人が増えているのは事実であると思った。

終わりに

ヴァラナシのショッピングビルのような建物が近年増えている。誰もがインドの経済発展を目で見て、実感できる。発展する中で伝統ある暮らしは、今後どうなるのだろうかと思う。発展によって、伝統ある暮らしは失われるのだろうか。努力すれば、努力しただけ豊かになれると言っているインド人がいた。その豊かさは物質的な意味でしかない。しかし、物質的な豊かさを手に入れれば、親の決めた結婚に従う必要はなくなる。また、互いに助け合う必要性も薄れるように思う。本当の豊かさと

は何なのかを考えずにはいられない。

また、ダラムサラでは宗教を信じて新しい土地に身を託す人々のたくましさを感じた。ダラムサラからインドの全土へ多くのチベタンが移動し、新しく生活を営む。多くの不安や問題を抱えていたが、希望を持っているように見えた。

そして、ネパールの人々は多くの問題を抱え、思うように経済発展できず、苦しんでいるように見えた。頼りたくない、馬鹿にされたくないという思う一方で、インドや中国が豊かになっていくようすに憧れを抱いているようであった。

ダラムサラ、ヴァラナシ、カトマンドゥのそれぞれの土地で、取り巻く環境の変化に戸惑いながらも人々が必死に生きる姿に感動を覚えた旅であった。

（しもがき　かずみ・政策創造学部二年生）

写真・画　筆者

髪の手入れをしながらおしゃべりする女性たち

カエルをめぐる造形

――アジア美術の世界（5）――

長谷洋一

「蛙」は春の季語でもある。田に水が入ると途端に蛙の鳴き声が聞こえ季節の移り変わりを実感する人も多いことだろう。かつてのように水田や小川が少なくなってきたとはいえ、我々にとってカエルはいつも身近にいる小動物である。

縄文土器や銅鐸にカエルのモチーフが用いられていることからも、カエルと人間との親しい関係は太古まで遡ることができる。特に銅鐸のカエルはトンボやカマキリなどと共に表され、そのプリミティブな表現からは青田が広がる弥生時代の風景を彷彿させる。

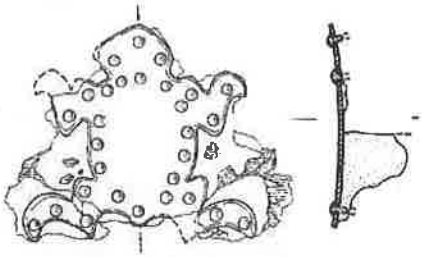
古墳時代になると一部の壁画古墳にカエルが描かれる（福岡県・珍敷塚古墳）ほか、蛙形の木棺飾り金具も出土している（同・番塚古墳）。古墳・古墓にカエルが描かれた例としては、中国・前漢時代（BC一八六～一六八年頃）の馬王堆漢墓から出土した帛画に「三日月」の上に乗るカエルが描かれ、また五世紀中頃に築造された高句麗壁画古墳のひとつである輯安・舞踊塚古墳では「月」を思わせる円の中にカエルが描かれている。奥津城である古墳・古墓においてカエルは「月」や「不死（の世界での栄華）」に関わるシンボルとして表現され、福岡県の事例にみるカエルもそうした意味を帯びて大陸からやって来たのである。

周知のようにその根源は中国の「嫦娥（じょうが）伝説」に求められる。前漢時代末に編さんされた『淮南子』覧冥訓によれば、弓の名手である羿（げい）が死を怖れ、西王母のもとで不死の薬を手に入れるが、羿の妻・嫦娥

がこれを盗み出し服用して仙人となり、月に逃げたとする。また同精神訓には「月中、蟾蜍（せんじょ・ヒキガエル）有り。」とし、さらに『後漢書』天文志に引く張衡「霊憲」では「嫦娥月に奔り、是れ蟾蜍と為る。」と、月で嫦娥が蟾蜍に変身したと伝えている。こうして蟾蜍は「月」と強く結び付き、「蟾」字は月自体をも意味するようになる。

我々は、月にはウサギが棲むと思いがちだが、月兎はインド『ジャータカ』〔本生譚〕に起源をもち『今昔物語集』天竺部にも記される兎の捨身物語に基づく仏教説話に由来するもので、神仙世界にあっては月には蟾蜍が棲むのである。

蟾蜍は別名を蝦蟇とも称する。京都・知恩寺蔵「蝦蟇・鉄拐図」（顔輝筆・中国元時代）の「蝦蟇仙人」も不老長寿を示す桃を持ち、大きな白い蟾蜍（蝦蟇）を肩にのせている。よくみると「白蟾」は三本脚で描かれ、いわゆる「三脚蟾蜍」となっている。蝦蟇は蝦蟇仙人の属性として伝統絵画のなかに棲みつく。幕末期奇想の絵師で知られる曾我蕭白筆『群仙図屏風』にも肩に白蟾をのせた蝦蟇仙人が描かれており、また蛙を助けた男が娘の病



蛙形木棺飾り金具（番塚古墳）

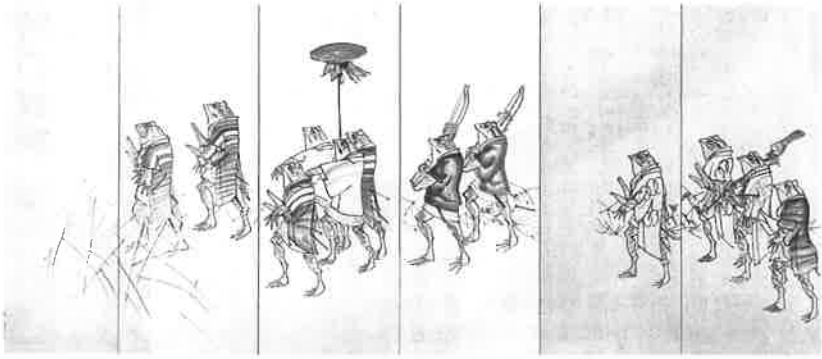
帛画（部分）（馬王堆１号漢墓）

曾我蕭白・群仙図屏風（部分）

鳥獣人物戯画　甲巻（部分）

を癒して婿となる根津美術館蔵『蛙草紙絵巻』（室町時代）に登場するのも蝦蟇である。こうしてヒキガエルは仙術による「不死」「栄華」を共通項としてその棲み処を月から神仙世界へ移していく。

とはいえ、すべてのカエルが蟾蜍で描かれたわけではない。日本でカエルを描いた絵画としては鳥獣人物戯画（高山寺蔵）が有名であろう。なかでも十二世紀末に描かれた甲巻では、擬人化されたカエルが射的や相撲に興じ、あるいはサルに打ちのめされ、時には仏像にもなり替わるなど、画面を所狭しと動き回る。ここに描かれたカエルは背中のうえに明瞭な線をもつことからトノサマガエルとみられる。大倉集古館蔵「仏涅槃図」（鎌倉時代）でもトノサマガエルが描かれており、ここでは人間と同じように喜怒哀楽をもつ親しい関係としてのカエルの姿が活写されている。朝鮮半島での草虫画のなかにもトノサマカエルを描いた作品があり、トノサマガエルの出現は中国・宋代以降に展開をみた草虫画・花鳥画からの影響を受けたものとみられる。人間と近しいために擬人化されやすく、大和文華館蔵　渡辺南岳筆「殿様蛙行列図屏風」（江戸時代末期）では、隊列を組んで二足歩行する三十四匹のカエルが軽妙に描かれている。



殿様蛙行列図屏風（左隻）

このようにカエルの造形は人間生活に近しい存在としてのトノサマガエルと神仙世界に棲む蟾蜍（蝦蟇）とに区別され、それぞれ独自の道を歩む。『北斎漫画』初篇には小動物が一種類のみ掲載されるが、カエルだけは蝦蟇とヌマガエル（いぼ状突起はない）が描かれている。伊藤若冲の大作である動植綵絵「池辺群虫図」には、行列をなすツチガエルや泳ぐトノサマカエルに交じって一匹のヒキガエルを土坡の上に孤立したように描かれ、そこにお互いが背負う意味の違いを暗示しているようにも思われる。

西洋でもイソップ童話などにカエルは多く登場するが、魔女が妖術を使う際にカエルを下僕としたこともあってあまり好意的には扱われていない。ヒキガエルのグロテスクな姿や有毒種である点が強調されたものと思われ、西洋のカエルは蝦蟇仙人の白蟾と対極に位置づけられているのである。

カエルの造形は中国・朝鮮半島・日本以外ではあまりみることはできない。世界各地でカエルは食されながらも水辺の隣人に対する温かな眼差しは、アジアでも極めて特異な感性といえ、このことはカエルの造形が神仙世界から誕生したことと決して無縁ではないはずである。

（はせよういち・文学部教授）

博物館の資料(4)

物が語る歴史——関大博物館

山口卓也

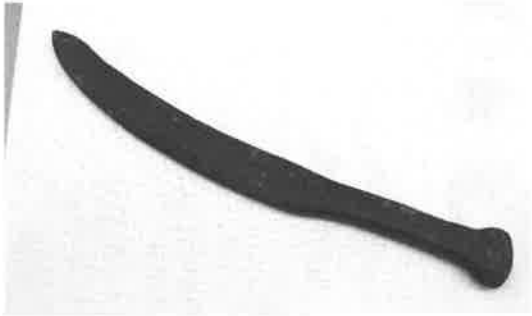


写真1　石刀（縄文時代晩期　長さ25cm）

反りのある青銅刀が鞘に収まっている状態を石で写した。刃の薄くなっている部分に、鞘の組み合わせの筋が、刻まれていることから、鞘入り青銅刀を模したことがわかった。どこで縄文人が本物の青銅刀を見たかが、研究課題となっている。

大学博物館は、古びたカワラケや石ころ、さびた金属が展示されているところだろうか。大学で考古学や歴史学を勉強する者にしか関係のない、ほこりっぽい場所だろうか。経済学や社会学、工学や情報学、科学を関西大学で勉強する皆さんには、無関係なのだろうか。今回は、博物館の展示品二つと私たちに身近な品物一つを取り上げよう。

縄文時代の必須アイテム：石刀のなぞ

縄文時代晩期、近畿地方以東の地域に石刀と呼ばれる石器がある。一端が瘤のように膨らんで柄の部分になり、一側縁が薄い刃を持ち背反りしている。形の系譜は、石棒につながることは間違いないが、最近このような刀の形をしている理由がわかってきた。

当時、日本海を隔てた大陸には、青銅器文化があった。縄文人は、大陸で使われている青銅刀を、どういう方法でか知って、その形を石に模したのだ。本物の青銅刀を真似たのだが、なんと、刀を

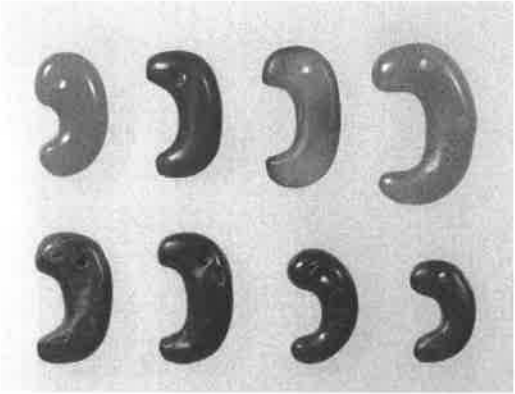


写真２　古墳時代勾玉（隠岐）
瑪瑙や翡翠の勾玉。もともとは縄文時代のイノシシなどの牙に孔を開けたペンダントを貴石で写したもの。形によって時代がわかる。

抜き身で写すのではなく、鞘に入ったままの形にするという不思議なことが起こっている。縄文人がどうやって大陸と交流をもてたのかは、まだ研究課題だ。当然、青銅のない縄文時代晩期では、抜き身刀を石に写しても、武器として使えない。たぶん、強い男の持つ「アイテム」として、石で作った刀を持つことが流行したのだろう。皆さんの周りに、役に立たない「男の必須アイテム」なるもの、いくつか転がっていないだろうか。

三つの勾玉

勾玉は、日本の古墳時代のアクセサリーとして有名だ。翡翠や瑪瑙、碧玉のきれいな垂飾である。実は、これとそっくりな勾玉が、作られたことが二度あった。一つは、日本の古墳文化の及ばなかった奄美列島だ。琉球王朝時代、祭祀を司ったノロと呼ばれる女性達がいたが、地位の象徴として胸に大形の勾玉を飾っていた。もう一つは、江戸時代後半、経済力を身につけた町人衆のあいだで、古代の石器や奇石を蒐集するブームがあり、本物とだまして売るために作られた贋作勾玉である。

両者とも、本来、古墳時代の遺物である勾玉を、両者とも本物を写して模造されたことは間違いない。ただ、奄美ではノロの地位を示すものとして、「実用」され、江戸時代日本では金持ちをだます「贋作」として密に取引されていたことがわかっている。

ブランド品とコピー、売る方と買う方、だます方、だまされる方、ともかく使う方、勾玉をめぐっておもしろい現象であろう。

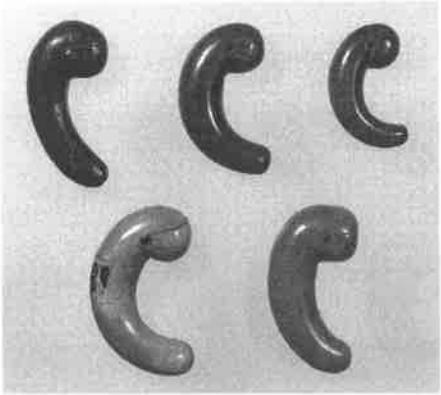


写真３　奄美　ノロの勾玉（右長さ9.5cm）
軟玉製の勾玉。石の質から中国製と日本製の説がある。
初期のものは年代的に江戸時代の贋作勾玉と近い。

ワイシャツのボタンと未来の考古学

私は、毎朝白いワイシャツを着て、関西大学博物館まで出勤してくるが、このシャツには白い半透明のプラスティック製ボタンが縫いつけられている。最近では仕事用のストライプ柄や派手なカラーシャツもあるのに、普及品のワイシャツのボタンはプラスティックで、なぜかみんな白い半透明だ。なぜカラーボタンは仕事用のワイシャツには付けられていないのだろうか。

その理由は、こうだ。私たちが身につけているボタンは、今ほとんどがポリマーやプラスティックになっているが、ほんの四〇年ほど前は高分子化学が未発達で、貝を刳り抜いて作っていた。貝の内側の均質な白い部分を削って作っていたので、白かったのだ。高瀬貝や蝶貝、真珠貝、あわびなどが使われた。天然素材なので、それぞれ異なった光沢模様があるのだ。今学生生活を送っている皆さんは、貝のボタンを知らないだろうか。

今では、プラスティックの白いボタンは、貝製のものの置き換えとして普及している。ワイシャツのボタンは、昔白い貝製だったし、今も高級品は白い貝製だ。値段が断然違うのだからそうなるだろう。

ボタンは白いと見慣れているし、職場の偉い人は今も白い貝製を付けている。だからこそ、カラーボタンをワイシャツに付けないのは、仕事場で「浮かない」ように、白が良いと無意識のうちに思われているせいなのだ。プラスティックなので、色を付けることは容

写真４　贋作勾玉（中央長さ13.8cm）
江戸時代のコレクターを騙すために作られた。かなり高価であったという。考古学の知識が足りなかったため、形は不正確な物が多い。

易なのだが、白が「無難」という伝統と自己規制に押されて、ワイシャツには、カラーボタンが付かないことになっている。

貝の白ボタンとプラスティックの白ボタン、人の目を意識して身だしなみを整えるのが前提の、保守的な服装の伝統と流行の仕組み、なんとなく自覚している所属階層、人々の意識や社会の動き、経済や科学技術が反映していることがわかるであろう。ボタンは、社会や経済、科学技術を読み解く、一つの入り口になり得るのである。

大学博物館に並べられた無数の石器や土器、瓦や錆びた金属の固まり、野外に残された古墳や遺跡、城塞や宮殿、寺院も、長い人間の歴史の中で、付けられたボタンのような「もの」である。もともとの機能と作られ方が、流転の中で変わったり、忘れられたりするのも同じだろう。博物館に並んでいる「もの」に起こったことが、私たちの身近な「もの」でも起こっているのだ。皆さんも、身近な「ボタン」と、博物館の陳列品、じっくりと見比べてほしい。

今、仕事にカラーシャツを着こなす人が増えてきた。次第に服装の革新も進むであろう。カラーボタンがワイシャツに現れるのも近いかもしれない。そのとき、ボタンの変遷からオリジナルとコピーを見分けることができるだろうか。変化の早い時代（今の私たち）を研究することになるだろう、未来の考古学者は大変に違いない。

（やまぐち　たくや・博物館学芸員）

60年余を経て甦る吹田の祭り

“ドンジ”

黒　江　順　一

私たちは平成19年度関西大学博物館実習の一環として関西大学博物館展示会「吹田を知る」の展示スペースの一部を使用し、「吹田のまつり～甦る「ドンジ」～」というテーマで実際に展示を行いました。ドンジとは岸部にある三つの村がそれぞれで神社に神饌（供え物）を奉納する祭りです。この祭りは江戸時代から続いていたとされていますが、戦後になると祭りは途絶えてしまいました。しかし、地域の伝統文化の復興と保存の機運が高まる中で10年前に旧三村の一つである小路で「吉志部神社小路どんじ保存会」が設立、古式にそったドンジ祭が復活します。そして今年、旧三村の残り二村である東村と南村も本格的に祭りの復興に参加し、三村合同で「吉志部神社どんじ保存会」が設立されるとともに約60年ぶりに三村揃っての神饌の奉納が実現しました。

❖ 行列提灯

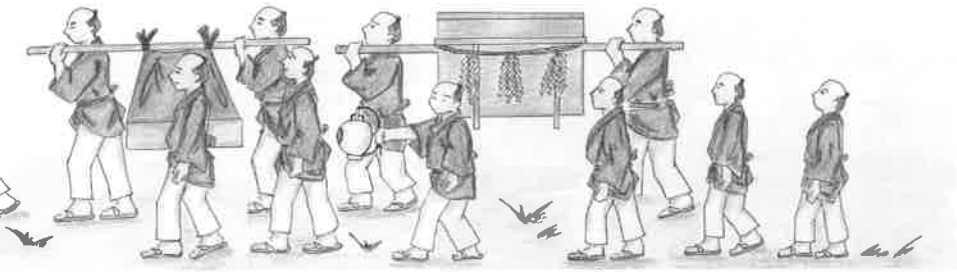
行列提灯は行列の先頭付近を照らす提灯です。かつては３ｍ程度の竹の上部に掲げられていましたが、現在では手で持って歩きます。ドンジ祭りに用いられていた提灯は行列提灯以外にも弓提灯と先提灯があり、行列の出立が日中になった現在にも装飾として残っています。

60年余を経て甦る吹田の祭り“ドンジ”

途絶える以前のドンジ
写真は明治時代のもので、東村の頭屋である西嶋家から行列が出発する様子を撮影したものです。

出典：池田半兵衛著『ふるさとの想い出写真集　明治大正昭和　吹田』（国書刊行会・1985年刊より）

神饌の奉納に向かう行列の図



失われた文化を甦らせた地域の連帯にふれ

私たちは吉志部神社小路どんじ保存会のご好意のもと、ドンジ祭の準備の初期段階から当日までの様子を記録させていただき、記録の過程で保存会の方々の苦労の一部を知ることができました。文献を頼りに手探りで祭りの復興を始めてから一〇年、三村合同での保存会の設立に行き着くまでの保存会の方々の努力は並大抵のものではありませんでした。そして、保存会が歩んできた一〇年間を支え続けたのは、岸部に住む方々の強い連帯意識でした。その意識に触れた私たちは、失われた文化を甦らせることが非常に困難であること、その困難は地域の力で乗り越え得ること、この二つを来館者の方々に伝えることを目標に展示を組み立てました。

❖ 長持

ドンジ祭で用いられる長持は全部で三つあり、主に神饌を運ぶのに用います。現在使われている提灯と長持は十年前に「吉志部神社小路どんじ保存会」が結成された際に製作されたもので、祭りが断絶する前に使われていたものは吹田市立博物館に展示されています。

◆ドンジ祭ゆかりの場所

◎吉志部神社

天照大神など八柱の神を祀る神社で社殿が国の重要文化財に指定されています。この神社の秋の収穫祭がドンジ祭であり、祭り当日には頭屋の家から出発した行列がこの神社を目指します。

◎吉志部神社 一の鳥居

吉志部神社から南へ四〇〇m程度下った場所にあり、祭りの日には大注連縄と提灯で飾られます。現在残っている頭屋の家から神社までのちょうど中間点に位置しており、ここから神社の社殿までは一本道になります。

◎釈迦ヶ池

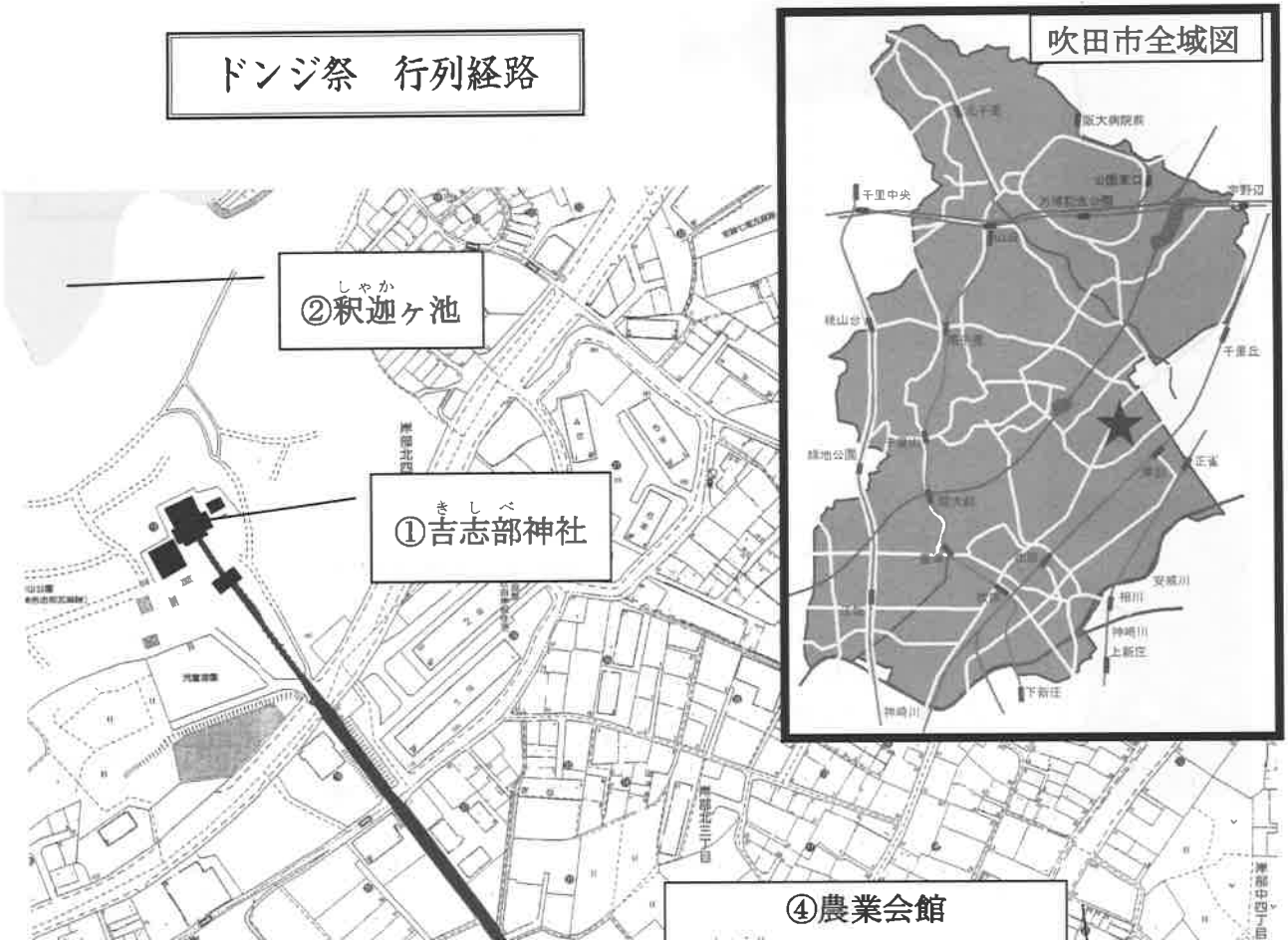
神社の北側に位置する池で、岸部地区の農業に古来より深く関係してきたと考えられます。この池には、ドンジ祭の起源といわれる大蛇退治などの伝説が残っています。

❖ 稚児

小路地区から選ばれた四人の女児で、神饌奉納の役割を担っています。彼女たちが頭に載せているサンドラ（桟俵）は、神饌を頭上運搬していたころの名残といわれています。彼女たちは祭り前日に莚（ゴザ）の上で睡眠をとり、当日には帯締めとして注連縄を締めて神社への行列に参加します。

ドンジ祭ゆかりの場所　左から、釈迦ヶ池、吉志部神社、吉志部神社 一の鳥居

ドンジ祭　行列経路



(小路農業実行組合集会場)
行列の出発点です。
一の鳥居を越えると、神社の参道に入ります。
③吉志部神社　一の鳥居
⑤西島家

◆なごやかに作業に入る　祭具製作

祭具には大きく分けて二種類あります。一つは吉志部神社小路どんじ保存会が発足した一〇年前に準備された品々です。これらには先に紹介した長持や提灯などがあります。もう一つは菰や藁などを用いて作られるもので、こちらは毎年新しいものを作ります。こちらには神饌台や莚などがあります。

毎年作られる祭具は保存会の方々が、祭りの三ヶ月前から材料を集め、一ヶ月前から制作を開始します。慣れた手つきで次々に祭具を完成させ、次の作業まで一休み保存会の方に話を聞くと、一〇年前は今の倍以上の時間を費やしていたと語られていました。毎年少しずつ作業に慣れ、保存会の中でも自然と役割分担ができたのだそうです。参加者の方は作業の時は冗談を飛ばしあって笑いながらも、その時々における自分の役割を見つけて行動しているように感じました。

神饌台制作過程

❖ 莚

莚は稚児が祭りの前日に敷いて眠る他、神饌台や長持の敷物にも用いられます。材料となる菰は７月に刈り取って乾燥させた後、状態のよいものだけを選んで使うそうです。用途が多く大量に必要になるにも関わらず、菰は刈り取った３割程度しか実際に使用できないため、莚のうちいくつかは前年に制作したものを用いることもあるそうです。

◆サンドラ、吹流し、注連縄

◉サンドラ

ドンジ祭においては稚児衣装のひとつですが、元来は穀物などを運搬・保管する俵の両端をふさぐために使用されたものです。ドンジ祭に使用されているサンドラは菰で制作されており写真の状態に御幣を付けて完成となります。

◉吹流し

吹流しは完成後、祭りの数日前から頭屋の門に立てられます。当日には神饌とともに神社に運ばれ、そこでもう一度立てられます。写真は先端部のみですが、実物の全長は八mもあります。その長さのため博物館に入れることができず、展示会には五mほどの竹に実際に使われた扇や稲穂を取り付けて展示しました。

◉注連縄

一般的な縄は右綯いで作られますが、注連縄は左綯いで作られます。ドンジ祭は神饌奉納の祭りのため、様々な箇所に注連縄が張られています。菰細工の多いドンジ祭りですが、菰は固すぎて縄を綯うには不向きのため、注連縄には藁が使われていました。

サンドラ

吹流し

注連縄

◆神饌類

神饌とは祭儀において献ぜられる飲食物を指し、一般神饌と特殊神饌に分けられます。一般神饌は明治以降における神社祭式で一般化したものを指し、特殊神饌は各社によって様々で、紹介されているものはこちらに分類されます。ドンジ祭の神饌には、白むし、餅、盛り花菓子があります。

このうち白むしには、円形のものと、それを袋に包んだもの、さらに直方体のものがあります。円形のものと直方体のものは神饌台の上部と内部に納められ、袋に包まれたものは供物用の長持にいれられて神社へと運ばれます。

餅は貨幣の形に丸められ、祭神一柱分に小判の形をしたものが七つ、一分銀の形をしたものが二つ供えられます。

盛り花菓子は菰を束ねて作られた台座に串にさした食物を乗せて供えます。一柱分につき栗の串が二本、柿の串が二本、茄子の串が二本、餅の串が一本準備されます。

写真では実際の神饌ですが、博物館展示室には持ち込むことが不可能なため、展示会では模型で展示しました。

神饌類　左から、餅、白むし類、盛り花菓子

重さを実感して長持をかつぐ

行列が見物の方々に餅と白むしを配りながら、頭屋の家から神社まで八〇〇m程の距離を練り歩きます。長い距離ではありませんが、長持類は重いので持って歩いている間は随分な距離に感じられました。特に神饌台を八つ入れた一番大きな長持はかなりの重量で、道中は車輪を付けた台座に乗せて移動させていました。しかし、社殿へと向かうには階段を使わなければならず、六～八人がかりで台座から取り外した長持を支えながら上っていきました。

（くろえ　じゅんいち・文学部四年生）

お世話になった方々（五十音順、敬称略）
大阪市立自然史博物館／吉志部神社小路どんじ保存会　総代　佐倉弘／吉志部神社小路どんじ保存会、及びその関係者の方々／関西大学　黒田一充／株式会社グリーンスタジオ／吹田市立博物館　藤井裕之／吉志部神社

スタッフ
小松優子／清水真奈／日詰知佐／安原奈都子／黒江順一／木下馨子／三十木桃子／久保智美／吉田裕亮／吉富覚子／松本勧大／鴨野有佳梨／二星祐哉／福岡麻衣／三木善文／山口卓也

～ドンジ祭の歴史と伝承～

「ドンジ祭」とは、吹田市岸部に残る古いお祭りです。その年一年の実りに感謝し、岸部の３地区（南・小路・東）の人々により吉志部神社に神饌（＝お供え物）が奉納されます。

ここでは、祭りの起源として残っている伝承と祭りの歴史を紹介しましょう。

（※）ただし、これからお話しする大蛇と祭りの成立に関わる伝説は、鎌倉時代の説話集『古今著聞集』に見える摂津国吉志庄（現在の吹田市岸部）の「熊鷹の大蛇退治」の話が付会変容したものであって、『古今著聞集』が成立した建長６(1254)年以後に作為されて言い伝えられてきたものと考えられています。

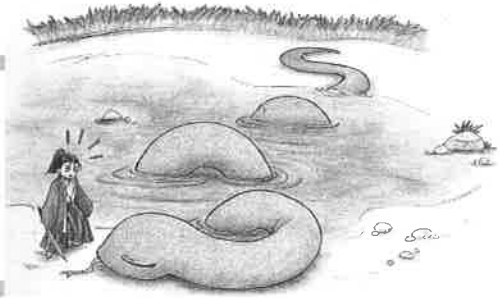
吉志部神社と大蛇伝説

伝承によると、平安時代（天長年間）、神社東の山手にある軟迦ヶ池に大蛇が住み着き、時折出現しては人々を悩ませていました。そのために村では、大蛇を鎮めるために木箱に娘を入れて人身御供（生け贄）として差げなくてはなりませんでした-----

ある時、この地の領主であった吉志復守が軟迦ヶ池の畔を歩いていると

小さな蛇が湖面を泳いで来ました。

この蛇を不審に思った復守が刀で切り捨てると――



何とその正体は巨大な蛇だったのです。
池は大蛇の血で真っ赤に染まり、見事これを退治することができました。
（なお、復守が大蛇を退治した状況については、生け贄の身代わりとなって大蛇を待ち受けたという話や、池で馬を洗っていたときに大蛇と遭遇したという話もあります）

人々はこれを牽牛神の御神徳であると感じ、祭礼を行ってその恩に報謝するため牽牛神が祭られている吉志部神社に神饌を献じる事になりました。その祭礼を「蛇祭」といい、現在行われている10月17日の秋祭りの元となったとされています。

街角がパビリオン――吹田建築博覧会

石田智子

吹田には素敵な建物がたくさんあります。知っていますか？　私たちはその建物たちを博覧会場のパビリオンに見立て「吹田建築博覧会～街角がパビリオン～」と題して展示を企画・実施しました。一つの建物には、そこに住んでいた、利用していた人々が作り上げた歴史・文化がつまっています。誰が建てたのか？　なぜその場所に立てられたのか？　どのような役割の建物なのか？　その答えを探すことで、全体テーマである「吹田を知る」ことができるでしょう。

まずはオリジナルの建築探索マップを作るために、班員それぞれ手分けして資料を集め、実際にその建物を見に行きました。集めた建物を①建築物として価値がある（歴史ある建物である、有名な建築家が設計した、など）②実際に建物を体験できるように一般公開されている、という点から一一ヶ所に絞りました。吹田市全体の歴史・文化を総合して紹介したかったため、洋風・和風、新・旧、地域をバランスよく選びました。そうしてできあがった「吹田建築地図」です。最寄駅からの地図をつけて、実際に「パビリオン」である建物たちを見に行ってもらえるようにしました。

今回はその中から展示内でも深く取り上げた、登録文化財である、「西尾家住宅」と「中西家住宅」について紹介します。

旧西尾家住宅は江戸時代、仙洞御料庄屋屋敷でした。平成一二年に登録有形文化財となり、平成一七年から吹田文化交流館として無料で一般に公開されています。日本の近代建築を代表する建築家、武田五一が改築に関わっており、離れの洋風館の設計を行いました。本館にも武田五一がデザインした家具や、アールヌーヴォ風の照明器具などが見られます。庭を入った先には茶室があり、京都の薮内家の燕庵と雲脚席の写しです。年末年始以外はいつでもボランティアの方の解説を聞きながら全体を観覧することができます。また茶室でのお茶会やコンサートなどのイベントを毎月開催しています。

旧中西家住宅も江戸時代の庄屋屋敷です。平成一五年

西尾家玄関

離れ

七月に、国の登録有形文化財となりました。主屋は平成一九年一月に吹田市に寄贈されるまでに住んでいた主人によって現代風にリフォームされており、古い梁や柱を残しながら現代でも住宅として使用できるようになっています。南側の屋根には江戸時代文政九年と銘が入っている瓦が残っています。前庭は深山幽谷を表現しようと、約六m角ほどの地面を約二m掘り下げ、高さが表現されています。また桜の木が植えられていて、春には花を秋には美しい紅葉を見ることができます。南西側の庭はいつでも主人が好きだった白い花を見れるように、それぞれの季節に白い花をつける植物が美しく配置されています。二〇〇七年の一一月から予約制ではありますが、無料で一般公開されています。文政九年の瓦や木槌などが展示されています。

中西家キッチン

瓦

展示企画・実施にあたって、たくさんの方からのご協力がありました。普段の大学生活では関わることのできない、博物館の学芸員の方、地域のボランティアの方、関係機関・市の職員の方、みなさんが親切に私たちの話に耳を傾けてくれました。学生だけでポスター・パンフレット作りから資料借用まで行うのは大変でしたが、その温かい協力に支えられて展示会を成功することができたと思います。

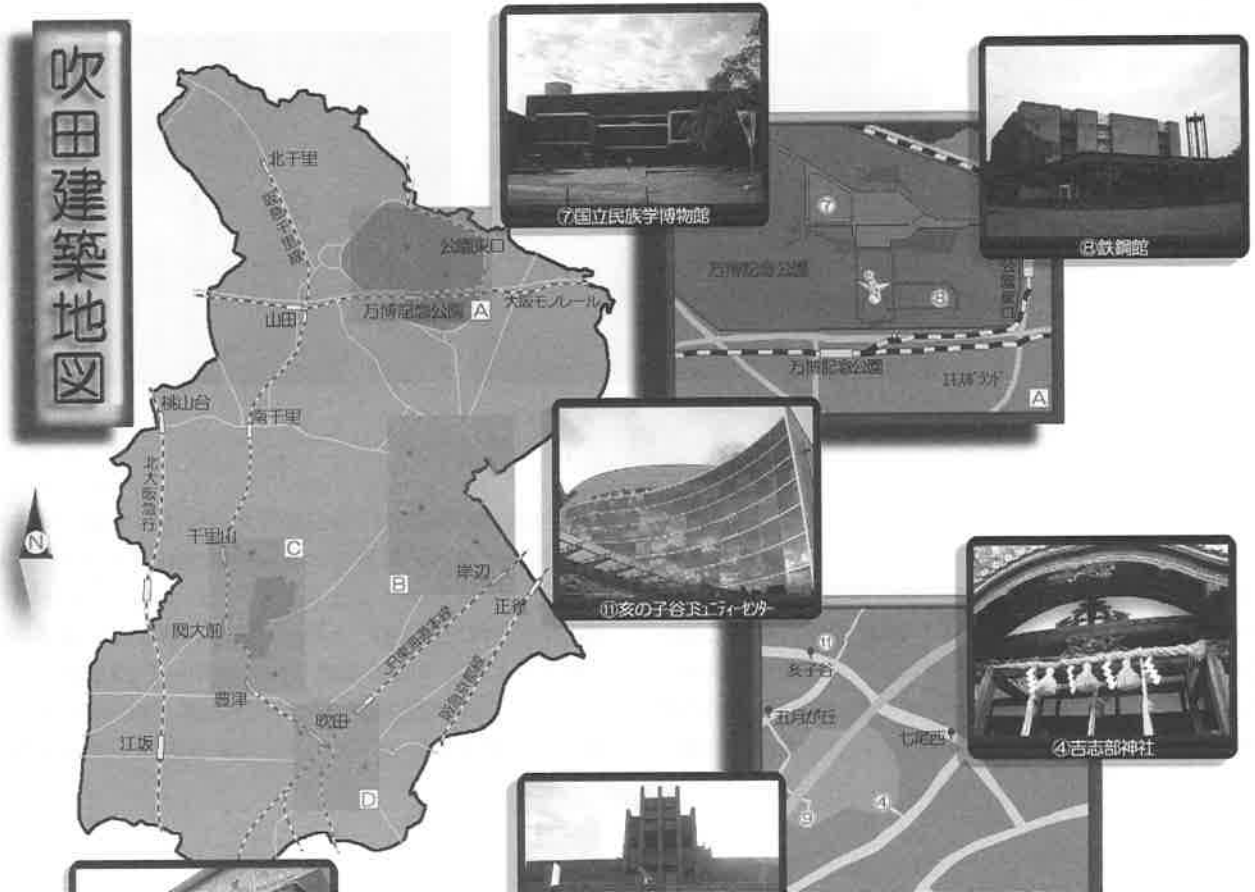
展示を見ていただいたお客様以上に、展示を企画した私たちが「吹田を知る」ことができました。毎日通っている大学がある吹田市についてあまり知らない人が多いと思います。この機会に一度吹田市を歩いてみませんか？　紹介した建物以外にも素敵な建物を発見できると思いますよ。

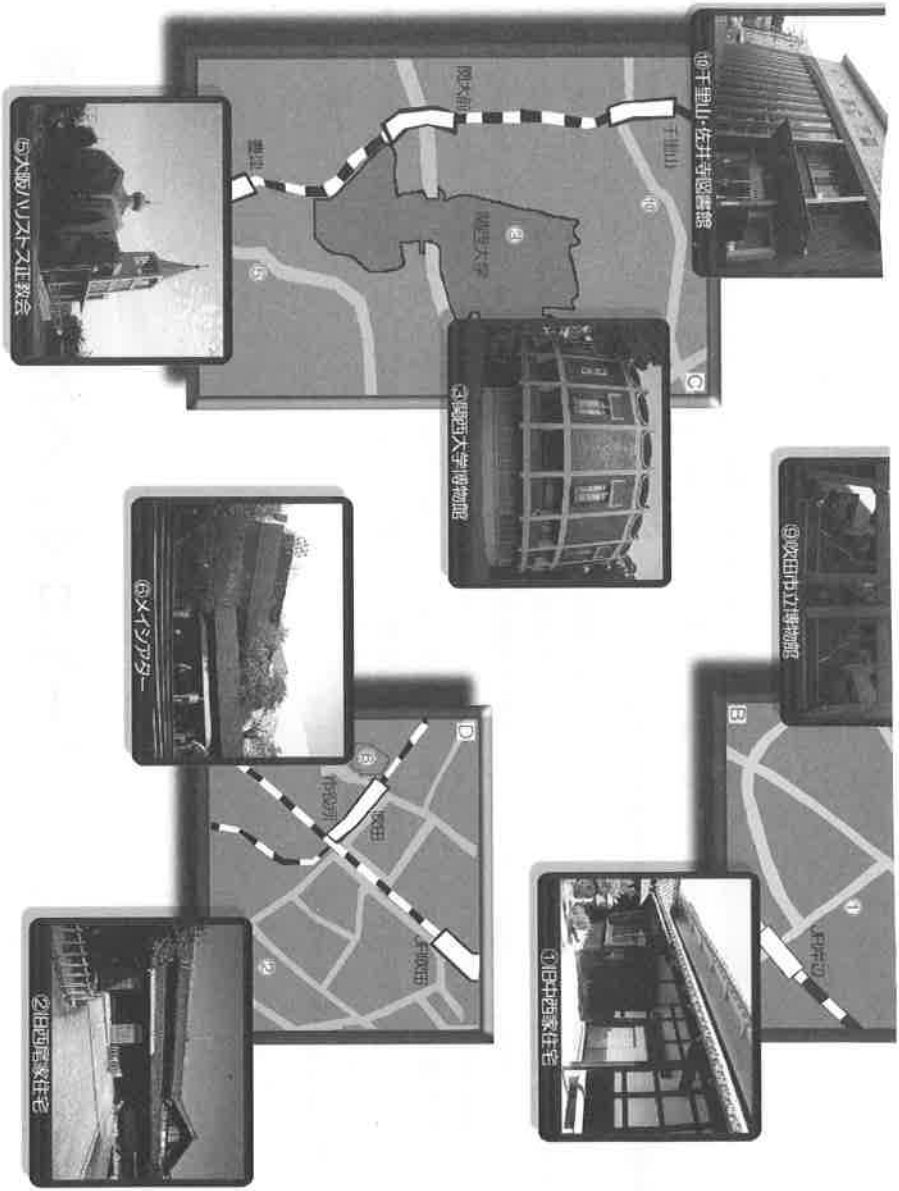
（いしだ　ともこ・文学部）

展示風景

「吹田と建築」班班員
安部元宏、石田智子、大草敏弘、大矢奈々、奥村祐未、尾山仁美、河辺有紀子、木下璃沙、潮田知恵、高橋薫、高橋沙希、竹川沙世子、中野絵美、中東由季、藤井万里子、牧野都、松下陽子、松本和城、宮下あずみ

吹田建築地図


⑦国立民族学博物館
⑬鉄鋼館
⑪亥の子谷コミュニティーセンター
④吉志部神社
北千里
公園東口
山田
万博記念公園
大阪モノレール
桃山台
千里山
岸辺
正雀
関大前
豊津
吹田
江坂
N
A
B
C
D


⑩千里山・佐井寺図書館
千里山
関大前
関西大学
博物館
⑤大阪ハリストス正教会
③関西大学博物館
⑨吹田市立博物館
戸数口
⑥メイシアター
吹田
市役所
千里丘
①旧中西家住宅
②旧西尾家住宅

吹田からはばたく〝マロニー〟

入江篤史

一　はじめに

関西大学が所在する吹田市は、人口約三五万人、企業数は約一〇〇〇〇社あるといわれている。大まかに市の中・北部地域は、大学・博物館などの文教施設とベッドタウン、南部地域が工業地域となっている。吹田市は、これらの住み分けができた均整のとれた町である。

「マロニー」をご存じだろうか。わたしたちは、「吹田を知る」というテーマの一環として、吹田市に所在する「マロニー」をとりあげることにした。単なる一企業のPRに陥ることを危惧しながらも、赤ちゃんから老人まで幅広く愛され、日本人の食生活を支えて全国展開されている「マロニー」こそ吹田市を代表する企業であろうと判断したからである。

製品の改良に連動して社名を変更していることからは、社運を「マロニー」にかける企業の意気込みが伝わってくる。カップヌードルなどと同様に関西圏から全国展開を果たした、いかにも関西らしい発想の成功例の典型の一つとして「マロニー」をとりあげ、誕生前後の足跡を追ってみた。

二　ブランド力をもつマロニー株式会社の歴史

マロニー株式会社の創業者吉村義宗氏は、大正三（一九一四）年福岡県に生まれた。吉村氏は昭和二四（一九

四九）年、親戚からモヤシ作りを手伝わないかと誘われる。モヤシの製造技術を覚えて独立し、大阪で吉村商店を開いた。ところが、緑豆価格の高騰や流通形態の変容などの問題から、新しい事業展開を考えた結果、「溶けないはるさめ」の開発を思いつく。試行錯誤を重ねた結果、「マロニー」が誕生する。「マロニー」は、つるつるした舌触りと味つきがよいという特色をもった製品だった。

会社経営がようやく軌道に乗り始めたころ、昭和四二（一九六七）年、社名をヨーサン食品株式会社に変更する。昭和四三（一九六八）年には、「マロニー」の売り上げ高が一億円を超えた。昭和四八（一九七三）年には、二三年間続けたモヤシ製造をやめ、工場を「マロニー」の倉庫に改造した。そして、昭和五三（一九七八）年、「マロニー」をより普及させていくため、社名を現在のマロニー株式会社に変更した。マロニー株式会社は、平成一二（二〇〇〇）年に創業五〇周年をむかえた。いまや、「お鍋の名脇役」とよばれるほどのブランド力をもった「マロニー」であるが、まだまだ成長の足は止まらない。今後一層の発展が予想される優良企業である。

江坂地区での田植風景

友禅流しをしていた頃の神崎川

三　関西と関東のキャラクターの違い

マロニー株式会社のキャラクターは、名前もそのまま「マロニーちゃん」である。マロニー商品のほとんどにこのキャラクターが掲載されていることから、近畿を中心によく知られている。マロニーちゃんは、実は西日本のマロニーと東日本のマロニーでは姿が若干異なっている。関西のマロニーちゃんは、北海道十勝のじゃがいも畑から生まれた。双葉がついたばかりの小さな子供で、スーパーの乾物売り場とこんにゃく売り場の近くでいつも遊んでいる。頭についているのは、もやしの葉っぱ。このようなプロフィールのマロニーちゃんは、昭和四一（一九六六）年に登場している。

一方で、趣の異なったマロニーちゃんもいる。これは、西のマロニーちゃんが関東に行くときに変身した姿で、東日本で販売されている商品パッケージやCMに登場する。緑の線でシンプルな西のマロニーに比べ、おっとりとした性格がにじみでるかわいらしいキャラクターである。会社側の意向としては、関東側マロニーちゃんは、関東でマロニーが知られるまでの足がかりであるとのことである。ゆくゆくは関東でも、関西と同じキャラクターを使っていくという考えといわれる。そして、いよいよ今年からは関東でも関西と同じパッケージが使われる予定ということである。

関西版マロニーちゃん　関東版マロニーちゃん

本社社屋・大阪工場

四　まとめ

二〇〇七年度の関西大学博物館展示会「吹田を知る」において、私たちは数ある企業のなかからマロニー株式会社に焦点をあてることにした。もっと大きなテーマを選んだ方がよいという見方もあろうが、わたしたちは吹田市に所在する企業のなかでこの企業の企業力を評価したのである。その理由を列記すると、

① 幅広く愛用されている商品の「マロニー」を製造している会社である。
② 「煮ても溶けないはるさめ」という製法を生み出した研究開発力を評価する。
③ 研究開発に連動して、販売力を高めていく企業力がある。

といったところに、関西所在の優良企業の底力をみた思いがするからである。

わたしたちは、「マロニー」誕生の経緯を知ることをとおして吹田市に貢献する企業を知る機会をもつことができた。展示を見ていただいた方々に、「マロニー」が成功した秘訣を知っていただけると幸いである。

（いりえ　あつし・文学部四年生）

代表者：出口善明・五十嵐康貴・五十栖実沙・入江篤史
スタッフ：大向智子・岡野裕也・加藤葉子・蟹江絵里香
小林宏江・柴田彰久・谷内美穂・土肥香央里
中森恵子・福庭万里子・槙本　力・松浦暢昌

歴代のマロニー

教わらなかった会計

経営実践講座

金児 昭

北山弘樹

日経ビジネス人文庫
2005年4月刊
316頁
本体価格 714円

生々しい人間的な所産

ともすれば数字と専門用語の羅列になりかねない会計学の研究教育にさいして最も腐心する点の一つは、抽象的になりがちな議論をいかに経済社会の臨場感を保って行うかということにある。例えば商売経験の無い学生さんに、商店主の立場で商品を手渡したにも関わらず代金が未収になっている場合の代金受け取り権利としての売掛金（未収金）について説明するさい、備忘的に記録するための仕訳（しわけ）という記号操作自体の会得は何の苦も無い訳であるが、長年の顔見知りばかりからなる商売上の共同体が前提になってはじめて現金取引ではなく信用取引が成立していることを想起してもらえるよう促す。さらに商売としては最終的に現金で回収できて一回転である。そこで反対側の立場として自らの中高生時代の倶楽部帰りの菓子パン屋での付けでの甘美な買い食い体験（店の黒板上に累積した代金―買掛金・未払金―は卒業式前に精算した筈）を引用しつつ、この売掛金という現金受け取りの権利自体はふわふわしたあやふやな実体のもので、ときに全くの零になりかねないことを納得してもらえるよう説明に努めることとなる。また保有する株式・有価証券の市場価格を見て取得時からの上下の変化金額を評価益または評価損として把握するルールの説明では、いま話題のアメリカ発の世界的な経済変動を引き起こしつつあるサブプライムローンに関係付け

て、世界帝国の分け前を米国国民全体に分配するには無理があったこと（帝国は内部から崩壊する）、一方損失を最終的におっ被った各国の資金運用担当者は、かなり実体が怪しい住宅ローン債権が証券化のお化粧を経て幻惑されていたであろうことを想像して貰う。嘱望として会計学を通じて表層的抽象的な思考に足元が絡め取られることの勿体無さを喚起したいとの思いがある。

ここで挙げる「教わらなかった会計」は、世界的に優良な原材料製造の大企業である信越化学工業の発展を経理財務会計畑から長年支えた金児昭氏の打明け話であり、最終的に会計数値として集約される経済活動がいかに生々しい人間的な営意の所産であるかを語って余り無い。他の会社を合併買収するさいの契約条件で後で絶対嵌められない為の交渉（三二頁）、基本材料確保のための水も漏らさぬ深慮遠謀ぶり（七三頁）、借り入れ条件を巡って合利主義で欧州の銀行と対等に渡り合った経験（一二〇頁）、究極の為替リスクヘッジとして一切為替の先読み予約等を断念してしまうという考え方（一八〇頁）等、通常当事者以外は伺い知れない企業の最前線でのせめぎ合いという最も動的で興味深い側面が開陳され、その間に連結経営・キャッシュ・フロー・売上高・設備投資・ディスクロージャーといった専門用語を実感的に説明し、さらに涙の解雇伝票・子会社での灼熱営業体験・会計士試験残念記・公認会計士との腹蔵無い付き合い・竜宮城的接待体験記など絶妙な間合いの随筆が挟まれたもので、数多い著者の本の中で最もお値打ちとも見受けられ、学生さんに大企業における会計の意義を皮膚感覚として把握して貰うのに恰好の一冊である。なお、「会計学は人間を幸せにするためにあるすばらしい学問である」との断言に戸惑ってしまうかもしれないが、豊富な経験を真に抽象化した上での人間社会の方向性を見据えた告白であり、読後の爽やかさを損なうものでは無い。

（きたやま　ひろき・商学部准教授）

カット　飯田健

日本全国 ローカル線おいしい旅

嵐山光三郎

小西秀樹

講談社現代新書
2004年3月
246頁
本体価格 700円

北海道の稚内から宗谷本線の普通列車に乗り、旭川にむかう途中の音威子府駅（中川郡音威子府村）で下車をしたことがあります。ここは駅そば（「常盤軒」さん）が名物です。黒い色をした麺は美味しく、いうことはなかったのですが、つぎの列車まで二時間近く待たねばなりません。いくら美味でも、さすがに「駅そば」で二時間を過ごすわけにもいかないため、駅周辺の散策を試みました。一二月初旬の午後、外は一五センチほどの積雪です。降りしきる雪のなか、慣れない足取りで駅前の道を進むと、一つ五百円の「鮭みそパン」を売っている店（「原菓子舗」さん）がありました。さっそく二つほど購入しました。さらに歩いたところには「道の駅おといねっぷ」がありました。ここも、そば（「麺屋一ふじ」さん）が美味しそうで、やはりいただきました。小一時間ほどで「名物」三種を楽しむことができたわけです。

この途中下車の旅、実は行きあたりばったりではなく、事前に旅行ガイド本と音威子府村の公式サイトでいくつかの情報を仕入れておいたのです。以前は旅行となると、旅行ガイド本を購入し、あるいはネット検索を試みるなど、事前の目的地調査を欠かしませんでした。最近は特にそうしたことをしなくても、とりあえず目的地に行けば観光案内センターや「道の駅」などには多くの冊子があり、ホテルでも案内はしてくれます。いずれにしても、なんらかの事前情報を得ておくことは（特に時間的制約がある場合は）旅行を充実させるコツです。そしてガイド本のほかには、鉄道利用を軸にした旅行案内

やエッセイにも興味深いものが多くあります。

鉄道紀行といえば内田百間（百閒）や宮脇俊三、鉄道ミステリーといえば西村京太郎ということでしょうが、掲げた嵐山光三郎『日本全国　ローカル線おいしい旅』は、こまかな鉄道ネタというよりも、「ローカル」の、それも「おいしい」というところがポイントです。宗谷本線は出てこないのですが、上野～札幌～帯広、東京～広島～博多、あるいは北陸へ、南紀へ、東北へと、出発時の「腹ごしらえ」から、到着地での人びととのふれあい、あくなき美味探訪の顛末までがテンポよく綴られています。ときに皮肉まじりで、物怖じしない著者の明るいキャラクターが滲み出た洒脱な文体であるものの、そこに暮らす人びとへの優しい眼差しを決して忘れていないところが魅力です。著者には類書に『日本一周　ローカル線温泉旅』（講談社現代新書、二〇〇一年）もあります。たとえ著者のマネはできなくとも、自分も旅行に行った気分になり、あるいは旅行の計画に厚みを加えるヒントとなるでしょう。

もちろん、旅行のガイド本ばかりを読み調べ、そして時間の節約などに気を留めていては、真に旅行を楽しめないという批判もあるでしょう。たしかに、そうです。型にはまった行動しかできそうにありません。実際に目的の土地を踏みしめて、風と情を感じてこその旅行でしょう。冒頭に記した稚内では、駅前商店街の案内や店の看板には、それぞれ丁寧にロシア語表記もされています。稚内が国際関係、日本外交の最前線であることを教えてくれます。音威子府についても、なだらかな山のふもとの天塩川に沿った小さな村であるものの、交通の要衝で、自然と歴史を生かしたまちづくりに工夫を凝らしている自治体であることを知りました。「一輌編成のジーゼルカーに身をまかせ、地図を見ると、自分の位置を俯瞰することができる。俯瞰しつつ、ゆらぐ実景のなかを行くのである。自分が何者かを知る」（本書「あとがき」）。やはり旅行には、ひとつの頼みとしてガイド本、あるいは紀行本も携帯したいものです。しかし難点もあります。車内でこうした愉快な書物を読み、文字で綴られた「旅情」を味わっていると、車窓を楽しめないことです。

（こにし　ひでき・政策創造学部教授）

開口閉口

開高 健

島田広昭

新潮文庫
解説　谷沢永一
1979年12月刊
353頁
本体価格 590円

どちらかといえば体育会系であった私は、学生時代あまり読書に時間を費やしたという記憶がない。したがって、読書と呼べるのは社会人になってから始めたと云っても過言ではない。それまでの私は、学校の科目にない「雑学」に強い関心を持っており、「世界の七不思議」などに代表される雑学の本を暇つぶしに読む程度であった。この様な私が、この人の書いた本を読みたいと思うようになったきっかけは一冊の文庫本に出会ってからである。『開口閉口』というエッセイ集がそれである。この本で著者「開高健」の鋭い洞察力と国際的センスのユーモアに溢れた文章の虜になった。そして、この人の感性はどの様な生い立ちで築かれたのかなど人間「開高健」に興味を持つようになった。私の場合、一人の作家が気になるとその人の思想や生き様も知りたくなり、上梓されている全作品を年代順に読んでみたいという願望が生まれてくる。そして、入手出来る限りその順序で読破していき、共感出来ることや著者の経験の中で自分にも体験できそうなことはしてみたくなる。こうして私はこれまで数多くのものにチャレンジしてきた。

「開高健」と云えば「魚釣り」にまつわる本を数多く出している作家であるが、現在私の趣味となっているルアーやフライなど疑似餌による魚釣りはこうして嵌ったものの一つである。それともう一つ、「開高健」に感化されたものとして「旅行」がある。彼の代表作にもなっ

ている『私の釣魚大全』や『フィッシュ・オン』などは釣行記だけのように思われがちであるが、その所々に世界中の「お酒」や「食べ物」が紹介されている。この本に出会うまで旅行に関しても混雑する時期にわざわざ遠くへ出かけなくても良いではないかと考えていた。しかし、その時期のその地へ出かけないと経験できないことのあることや、その当時流行していた旅行会社によるパック旅行が日本独自の旅行スタイルであることなども気付かされた。それ以来、私は国内外を問わず旅行するときは自分で旅程計画を立て、時間の許す限りその土地でしか体験できないことや、その時期が旬の美味・珍味な酒の肴探しを楽しむようにしている。私流の読書の特徴は、単に文章で表現されていることに感心するだけでなく、著者と同じ場所に立ち同じ状況を経験したいと心に記憶しておき、その近くを訪れる機会があれば、少し時間を作り記憶の引き出しからそれらを取り出し実現させることにある。これが私流読書の楽しみ方であり、記憶しておきたいことをみつけるのが片道二時間弱の通勤電車の中での楽しみにもなっている。時間的に余裕があった学生時代に何故もっと多くの本を読んでこなかったのだろうかといささか悔やまれる。これを読んでくれている人には、自分の感性や人生観に合致した本に出会えるまで、何でも知ってやろうという気持ちで片っ端から多くの本を読んで欲しいと願っている。そして、「興味がわいた」あるいは「同じことを経験してみたい」など今後の人生観が変わるような作家や本を見つけて欲しいものである。まずは、現代社会とのズレを若干感じるかもしれないが、私が三〇年ほど前に感化された開高健著の『開口閉口』を読んでみることをお薦めする。

（しまだ　ひろあき・環境都市工学部専任講師）

連載

本のいろいろ㊵　関大図書館―ケータイ読書について―

仲井　徳（いさお）

ケータイ小説の画面

少し趣を変えて、ケータイ読書について考えてみたい。

ケータイ（電話）は、すでに契約数一億台を超えた。驚くべき普及である。

一九七〇年、千里丘陵地をひらき催された「万国博覧会」で、夢の携帯電話としてお目見えしたときは五五〇gの片手には余るサイズ・重さであった。それまではキャッチホン（呼び出し電話：ブザーがなれば近くの公衆電話に走る）、無線電話（交互に送話と受信を行う）があったが、携帯電話が実用化されたのは二〇年前で三kg、一〇年前に三〇〇g、現在は一二〇gまでになった。

今や、ケータイは最高の文明の利器であり日常生活に無くてならない道具となった。

読書の観点から、

ケータイ読書　を考えてみると、

○ケータイ小説は、

書くのも読むのも一〇、二〇代の女性が多いといわれている。会話主体の平易な文章で書かれて読みやすい。無料で読めて読者が感想を書き込める。

身の回りの出来事を、「相手」に向かってひとりごとのように、一五字から二〇字ほどで「打たれた」文字で「人とのつながり」を「感じる」という今日の若者のネットワークのひとつとなっている。画面のサイズ上、短いセンテンスで構成され、ケータイメールで日常使っているような文体のため、若者には親近感をあたえると思われる。いきおい状況描写は少なくなる。

『恋空（上下）』（美嘉）や『天使がくれたもの』（Chaco）など、一冊一、〇五〇円で出版されて一〇〇万部以上売れている。

○電子コミックはこれまた一ヵ月に二〇〇万件ダウンロードするものがある。

コミック雑誌『少年マガジン』と『少年ジャンプ』は売り上げが激減しており、最盛期の半分、それぞれ二〇〇万部と一〇〇万部になっている。以前はよく見られた光景であったが、今では電車の中でほとんど読んでいない。一見、「マンガ不況」と称される状況であるが、結構、ケータイ読書していると思われる。

若者文化に違いないが、語彙不足、文章表現が幼稚・軽薄など批判があるが、読書の形と質が変わってきているのは確かなことであろう。

本年二月一九日の朝日新聞・夕刊にも面白いマンガが掲載されていた。

学生が授業中にケータイに熱中して困る、子どもの有害ケータイサイト問題、「白ロム」詐欺など様々な問題を抱かえつつ、ケータイ文化はさらに進化し続けるであろう。

ケータイができること

財布、定期券、スケジュール表等々、サラリーマンのポケットの中身のうちケータイに入らないものはハンカチだけと言われる。

『朝日新聞』（2008年２月19日夕刊掲載。筆者しりあがり寿氏）（承諾をえて収載）

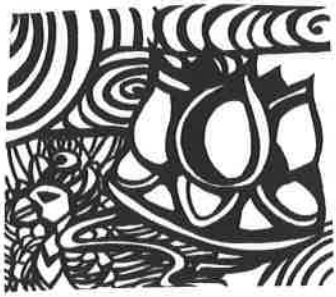
① 電話（無線による。TV電話も。国際電話にも可能）
② メール
③ アドレス帳
④ スケジュール帳
⑤ 電卓
⑥ 時計（アラーム機能も）
⑦ 電子図書（電子コミック、ケータイ小説も）
⑧ おサイフ（自販機など）
⑨ 定期券（JR東日本のスイカ）
⑩ 電子マネー（エディ）
⑪ 銀行カード
⑫ 電子キー
⑬ ブログ（放送局機能）
⑭ ワンセグ（デジタルTV、文字放送も受信可能）
⑮ カメラ（「写メール」も）
⑯ ビデオ（動画）
⑰ ネット音楽（「着うた」）
⑱ ラジオ（「FMケータイ」）
⑲ 音声通訳
⑳ 地図とナビゲーション（GPS機能）
㉑ QRコードの読込み
㉒ 辞書
㉓ ゲーム
㉔ 「ユーチューブ」の検索可能
㉕ パソコン付も
㉖ 仲間内でのチャット（「プッシュトーク」など）
㉗ ETC機能

（神戸女子大学文学部准教授・元関西大学図書館員）

漂流する「家族」の肖像

――干刈あがた論

今村秀雄



1　新しい「私」の中身

一九八〇年、ビートルズのジョン・レノンが銃殺されたニュースが世界中を駆け巡った日。「私」（三九歳の主婦）は、歳末の新宿で地下道を本屋へと急ぐ途中、見知らぬ青年から声を掛けられた。

青年は、彼女の持っている新聞がもう売店でも売り切れていて、読ませてほしいと頼んだ。「お礼にコーヒーご馳走します」と彼から誘われるまま喫茶店で話した。

「学生ですか」

「大学へ行くのはやめて金を貯めてインドへ行こうかと思ったりします」

若者は沖縄から上京して来たといい、丸刈り頭で青臭い精気が感じられる。かって父母が南島出身だった彼女には懐かしい思いがかきたてられ、若者を観察する。

〈ねえ、男を見る時どこを見る。私は胸を見る。抱かれ心地のよさそうな、広くて厚い胸がいいわ〉

〈私は違う。頭蓋骨を見るわ。自分の胸に抱いた時、どんなに重いか想像しながら〉

やがてジーンズブーツをはいた今風のオバさんの「私」が、二十歳も年下の青年を連れて、高層ビルが林立するガード下をくぐり、原宿の怪しげなスナックバーまで誘うことになる道行きが描写される。

それから二人がラブホテルにでも入るシーンに続くと

すれば、まあよくあるような不倫小説となるのだが、ここではそうはならない。

この小説でフラッシュバックのように「私」の脳裏に繰り返し浮かび上がるのは、

〈コーヒーゼリー買ってきてね〉

といって家で待つ、次男からの幼い声のうったえだ。

また、近くのビジネスビルに事務所を構え、写真デザイナーとして夜も自宅に帰れないほど仕事に没頭している夫のことが気にかかっている。やさしく知的で、真面目すぎる夫だ。「私」（妻）の側からは、家庭に母と子供たちという領分を区分して、彼（夫）の立場を排除したのではないかという、懸念が後戻りできない……。

右の干刈（ひかり）あがたの処女作『樹下の家族』は、日本の戦後社会が高度成長期を終えた、八〇年代初頭に発表された。団地のマンションか都市郊外の新興住宅地で、夫婦が一～三人の子供と住む、「核家族」という生活風景が普通になった時代だ。

夫たちの多くは会社勤め。妻たちは専業主婦もいるが、パートタイマーか共働きする形態が過半数を占めつつある。作家干刈の登場が画期的であったのは、これらの平均的な主婦＝「私」を取り出して小説の主人公として設定したことによる。

明治以降の近代小説史においては、主人公の「私」が＝男性知識人として社会に向けて自我形成を追求したことに対し、干刈の小説では、家庭内の母や妻という女性的エロスの露呈が「私」の中身として入れ替えられた。

けれど小説の場面に戻れば、主婦の「私」は、二児の母親として自足しながら、他方ではヨッキュウフマンノヒトヅマという浮遊してゆく自分を止めることができない。夫に不満などはない。

子は持たないと黙約していた、夫を騙すようにして出産したのは女としての欲求からだ。その初産の際で不思議な生死の境をさまような経験を、「私」は夫にではなく、目前の行きずりの青年に対して語っている。

「私は海の底に沈んでいたの。ずっと上の方に水平線があって、……しーんとしてとても寂しいんだけれど、なんともいえず広々とした安らかな気持ちなの。そして水平線の上のわーんという響きは、生まれた子の産ぶ声だったの」

そして目が覚めたとき彼女には、病院のベットのそばにただ座っている夫の姿が、たまらなく哀れで孤独に見

えた。母にはなれない男性という存在と、女性との区別と対立が明らかになったからだ。

2 「主婦」というジレンマ

干刈の小説とちょうど同年の一九八三年、芹沢俊介著『女性はいま どこにいるのか』という評論集が刊行された。ここで芹沢が問いかけている対象もまた、戦後三十余年を経て形成された「核家族」の主婦層という女性の中心に向けられている。

まず芹沢の問題意識は、日本の戦後社会で避妊技術や妊娠中絶の普及によって、性行為と結婚または生殖が直結しなくなった事態における、これを背景とした女性たち自身による性意識の解放度や欲望の現状を直視することだ。統計やリポート調査を駆使したこの本の中で、象徴的なアンケートへの回答を抽出すれば、

(1) 結婚後、夫以外の男性とセックスの経験があるか
ある　専業主婦……26・0％
　　兼業主婦……55・6％

(2) もう一度結婚をやり直すことができるとしたら、再び現在の夫と結婚したいと思いますか
いいえ　専業主婦……51・6％
　　兼業主婦……57・7％

芹沢は右の数値について、「ニヒリスティックな放恣を生み出す何か」「結婚における解体的な感受性」の拡がりと評言している。核家族における主婦層の「エロス」がもはや家庭内には収まりきれないで、外へとあふれ出す勢いが示唆されている。

実はこの小説においても戦後の女性史を背景として、自由への衝動と現実生活との葛藤が、活写されている。作品の構成は、初対面の青年との会話を現在時間として、そこへ想起される近過去の家族の日常シーンがモザイク模様のようにはめ込まれる詩的手法が取られている。

つまり、妻は今も夫を必要とし続けているのに、その「愛」が直接に表現され得ないのはなぜだろうか？　家庭内の男と女の間隙に、芹沢が評したような空漠とした齟齬が拡がることを止められないからだ。

自伝的なこの処女作では、父親が奄美出身の警察官家庭で貧しい少女期を育ち、あの六〇年安保闘争の時代には女子高校生としてデモの隊列に参加した興奮も追憶されている。その国会前で殉死した「樺美智子さん！」に向けて、「女性の自立とは何か？」と切なくも発問するところで小説は終わった。

けれど逆説的にいうなら、家庭の「主婦」という主体とは、同じ「主婦」が家庭外＝社会へと解放されようとする時代的なジレンマにおいてこそ、成立したといえる。

干刈あがたの第二作は、すでに「私」が離婚して、母子家庭になった現在から書き出されている。

3　シングルマザーという家族

太郎、君は白いスニーカーの紐を結ぶと、私の方を振り返って言った。

「それじゃ行ってくるよ」（別れた夫の所へと）。

十朱幸代主演、映画化もされた『ウホッホ探検隊』は、長男の太郎に向けて「君は……」と語りかける、めずらしい二人称の文体で展開される。

十五年間連れそった夫婦が離婚に至った過程は、よくあるパターンだ。仕事に忙しい夫と子育てに追われる妻との間に亀裂が生じ、やがて夫の方に新しい愛人ができた。小説では、そのことによる夫婦間の生臭い葛藤が隠されているというより、空白のまま置かれて描写もされず、むしろこのエロスの空洞化が離婚に至る原因だったとも、読める。

「私」にとって苦しかったのは、それが決意されるまでの中途半端な半年間だった。暗い迷路で揺れるような「私」が原因で家の中は荒れ、夫はますます帰り辛くなり、それが子供たちに反映した。

兄弟喧嘩が頻発し、太郎が次郎をとことんまで殴って苛め続ける。

「君」に拒食症が起きて、母親が用意した食事を受け付けなくなってゆく日々。

こうして「私」は君たちに、父と母が〈べつべつ〉サインをした結果を告げることになった。

「お母さんがお父さんと別れたら、君たちも、どちらかと別れなければならないわけだから。でも今、お母さんは、自分自身として立ち直りたい。こんなふうにだんだんダメになって行って、君たちもメチャメチャにしてしまう人間でいたくないと思った。それで、お父さんの奥さんでいることはやめたの」

離婚が決まってからはかえって家の中は明るくなった。〈離婚家庭が暗いとは限らないというテーマの、幼くやわらかな抵抗劇〉が、子供たちによって演じ続けられたからだ。

「お父さんの〈にくたいかんけい〉のせいか」と次郎。

「お父さんは、なんで別の人を好きになったのかなあ」と「君」が言った。
「いろいろあるみたいよ。言われちゃった」
「どじ」「美人じゃない」「短足。ペチャパイ」
「でもお父さんと結婚してよかった。二人を産めたから」
離婚後は毎晩、母と子が三つの蒲団を並べて寝るようになった。その家へときどき、「お父さん」が「ウホッホ」と咳払いしながら息子たちと会うために訪れて来るというのが、小説の題名になっている。だが、お父さんとお母さんはもう夫婦ではない。
「私」と幼い「君たち」の三人は、母子家庭という未知の海に向かって航海の旅に漕ぎ出さねばならない。母が艦長で二人の乗組員が力を合わす。
この事態に対し文庫本の解説で川本三郎は、「不思議と明るい新しい家族のイメージ」と、肯定的な感想を述べている。家族とは元々、子供が成長してやがてバラバラに解体してゆく運命の「柔らかい家族」なのだとする川本の規定に、私も反対ではない。でもその先には何が待っているのだろうか？
小説の冒頭のシーンで「君」は、中学生になって、別れた父親のマンションへとネクタイの結び方を教えて貰うために訪れた。いっしょに行くはずだった次郎の方が、太郎とささいなことで争い、「じゃあ僕は一人旅してくる」と言ったきり家を飛び出して、帰って来ない。
心配になった「私」は自転車で、次郎が遊びに行きそうな駅前のゲームセンターや町外れのS池公園まで捜して回る。その途次の有りふれた首都圏近郊の風景描写が、この作家の平凡さの真骨頂なのだ。

俄か造りのプレハブ小屋が二つ並んでいる。片方がコインランドリーで、片方が〈太陽ランド〉ゲームセンター。オレンジ色のペンキで稚拙な太陽の絵が描いてあるのが、安物のブリキ玩具のようだ。……私はこの二つ並んだ建物の風景が好きなのだ。

薄暗い店内を覗いても中学生たちがたむろする道路端にも、次郎らしい姿はない。殺風景な町角を「私」がさ迷い続ける小説後半の場面では、古典的な物語の「子捜し」の道行きを連想させ、読者の胸をつまらせる。
けれど、ここで「私」は本能的な母性によってだけ子を求めたのではないと思える。彼女はまず、一人の女性として「自分自身として立ち直りたい」必要のため、シングルマザーという道を選んだ。その「自分」という輪郭を求めて遠くまで走らねばならない。

だからこの二人称の小説では、「私」と「君」、彼女が自立すべき家族の未知に向かって呼びかけ合うことで表現が成立する。

4 「おんなこども」の表現

干刈の小説で主人公の「私」は、男性から逃げたわけではない。「家族」の現在を守ろうとしただけだ。

三作目のテレビドラマ化された『ゆっくり東京女子マラソン』では、PTA小説とでもいうべき小学校「四年一組」の母親群像が活写されている。

- 大里洋子（学年委員）……夫の両親と同居する旧家で三人の子持ち。
- 佐久間満子（厚生委員）……十歳年上の夫、妊娠時に発病した心臓疾患を抱えて一人娘を育てる。
- 結城明子（広報委員）……前作の「私」を引き継いだような男子二人の離婚家庭。
- 吉野ミドリ（郊外委員）……上の二人の子供までは男が産まれて育児に専念。キャリアウーマンの共働きで育てたが、三人目の次

小説では右の四人を軸に、クラスの児童と母親たちの日常生活が点景される。三年から担任だった女教師が出産のため休職、停年間際の男性教師と交代したことで、PTAと学校側に小さな対立劇が起きるのだが、特定の誰が主人公ということにもならない。

このパノラマ風の小説で作者が描きたかった主役とは、高度資本主義と呼ばれる男性の産業社会に対峙して、柔らかい下半身のように営まれ続ける「おんなこども」たちの世界であろう。

男社会の半分を支えて、ちまちまとした家族生活の内部で流された血と熱い思いは、女性たち自身の手で表側の光に露呈され乾かされてゆくべきだ。このテーマを掲げ干刈あがたは二十冊ほどの作品を残し、十年後の一九九二年病没した。彼女のあとに、様々な若い女性作家たちの可能性が開かれたともいえる。

『樹下の家族』一九八三年福武書店刊
『ウホッホ探検隊』一九八四年福武書店刊
『ゆっくり東京女子マラソン』一九八四年福武書店刊
（いずれも福武文庫版）
※参考　『女性はいま　どこにいるのか』芹沢俊介著　昭和五十八年毎日新聞社刊

（いまむら　ひでお・卒業生）

カット　檀上奈津美

アニメ『無限のリヴァイアス』の魅力

現代版漂流記

城内裕樹

アニメーション映画『時をかける少女』（細田守監督）の評論を前回の「書評」秋号（一二八号）に寄せた。アニメーションは実写では表現できない角度からの映像を作り上げ、幅広い背景設定の上に物語を構成することができる媒体だ。私がアニメーションに感じる魅力というのはそれだ。アニメーションだからできることに着目すればより映像を楽しむことができると思う。今回も一作のアニメーションを取り上げて、このアニメーションのどの点に私が関心を抱いているのかを述べたい。

その作品は『無限のリヴァイアス』というサイエンス・フィクションアニメーションである。監督はロボットアニメを数々手がけた谷口悟朗、シリーズ構成と脚本は少女漫画が原作の『ハチミツとクローバー』などに参加したことで知られる黒田洋介が担当している。制作はＳＦアニメに強いサンライズが行った。

この『無限のリヴァイアス』は一九九九年十月から半年間、テレビ東京系で夕方に放送された子供向けの作品だ。しかしこの作品は単に子供向けのものであるとは考えられない作品の魅力がある。なぜなら『無限のリヴァイアス』に描かれるのはまぎれもない少年少女の漂流記であり群像劇だからである。

少年の漂流記といえば児童文学で名高いジュール・ヴェルヌの『十五少年漂流記』が挙げられるが、『無限のリヴァイアス』はむしろ『十五少年漂流記』のアンチ

テーゼとして描かれたウィリアム・ゴールディングの小説『蝿の王』に影響を受けて作られている。閉鎖社会に投げ込まれたティーンエイジャーがどのように生き残っていくのかが表現された作品だ。

『十五少年漂流記』では原因不明の事故により無人島に漂着した少年達が協力して生活していく。感情の対立や助けあう心を、少年たちの共同生活を通して描かれる。少年達が数々の困難を乗り越え最後には協力していくところは読者の心を躍らせる。『蝿の王』はこの美しい冒険活劇にひびを入れる。

小説『蝿の王』も飛行機が墜落し、少年達は南太平洋の無人島に置き去りにされるところから物語が始まる。漂流して生き延びようとする子供たちは縄張りを作り出す。たった十数人の人間なのにまとまることができないのだ。亀裂した人間関係、縄張り争いから生まれる覇権争い。最後に救出はされるのだが、彼らの心には癒えない傷が残った。『蝿の王』は閉鎖空間に投げ出された人間集団が如何に不安定で非協力的なことになるのかを表している。『十五少年漂流記』のように人間というのは皆で力を合わせて生きていこうと団結するとは限らない。

私はもし同年代の人間が無人島に漂流してしまったら、漂流した人間の数が多ければ多いほど団結して生きていくのは難しいのでないかと思う。お互い個性があるからこそ、あの人とは気が合うがどうしても気が合わない人もいるのが普通の人間の感情だ。『無限のリヴァイアス』ではそれが痛烈に描かれるのである。シリーズ構成を行った黒田洋介はこの作品の為に百人以上の登場人物の設定をしたと言っている。それぞれのキャラクターに個性をつける。そうすれば自ずと似た性格の人間はグループを組む。それらのグループはまた大きなグループに集まったり、あるときは対立をしたりする。人間集団の明るい面も暗い面も幅広い登場人物の設定によって可能になる。

『無限のリヴァイアス』の舞台は今から二百年後の未来だ。人類は宇宙へと進出し、太陽系のそれぞれの惑星や衛星に居住することを可能にした。しかし、あるとき太陽が暴発を起こし太陽系がフレアに飲み込まれた。人類の半数はそれにより死んでしまう……。

SF小説にありそうな設定が物語の基盤にある。アニメーションではその作品の舞台設定が面白さのキーポイントとなりSFではより重要視される。ともかく、『無限のリヴァイアス』では宇宙にまで生活圏を伸ばした人類にも関わらず、太陽の暴発により環境は悪化し人間は

生命の危機と隣り合わせになっているという困難な状況に遭遇している。

若者達はそんな環境の中でも生きていかなければならない。絶望が見え隠れする世界の中で、主人公達は宇宙飛行士の資格取得の為に衛星の養成所に通う。宇宙の専門学校のようなものだ。ある日、何者かの襲撃により衛星が破壊されてしまう。巻き込まれた生徒達は偶然に謎の航宙船に乗り込み命を助かることになるが、生徒達に待っていたのは宇宙船の中で送る漂流生活であった……。

つまり、『十五少年漂流記』や『蝿の王』での無人島をここでは孤立した宇宙船が代替しているのである。事故により漂流してしまった宇宙船で助けがくるまで生活しなければならない少年少女はお互いにルールを縛り切り抜けようとする。四八七人のティーンエイジジャーは救助への希望を持ち生活を送ろうとする。

ここで注目すべきは、この集団には明確なヒエラルキーが存在している点である。宇宙船を操縦するには高水準の訓練を受けた専門の生徒達が行わなければならない。彼らエリート学生が宇宙船の主導者となるのである。それは私たちが歴史で知っている王族、日本でいうなら権力を持つ武士の階層と類似している。知識を持った人間が集団の主権を取ろうとする。彼らのグループが先導して、宇宙船のインフラ、食事面（食事は最初から備蓄がある）を計画的に整えようとする。皆、初めはそれに従うのだが、徐々によく思わないグループが登場する。彼らは合理的に統率することよりも力を持っている人間が権力を持つべきだと考える。暴力的な力だ。また、ただ状況に流されるだけのグループも存在する。救助が来るまで我慢すればいいのだから、それまでは上層部の言うことを聞いておけばいいのだと考える集団だ。彼らは自らでプロレタリアートを受容する。それは後に自分達が不遇に陥ったとき反乱を起こす可能性を持ったグループでもある。技術に身を置く人間もいる。外部からの攻撃から身を守る為に宇宙船にある兵器を使おうとする集団だ。彼らは宇宙船を操縦する技術とは違った、もっと職人肌な技術を携えている。これらの人間集団が交差し、物語は協力と対立の渦へと飲み込まれていくのである。

また集団としてのマクロな人間関係ではなく、ミクロな人間関係も物語の軸になっていく。主人公はこれといって才能の無い人柄の良さだけが取り柄の人間だ。主人公の弟は才能に満ち溢れ兵器を操る技術に長けているから宇宙船でも権力を持つグループに属することになる。弟は兄の能力の無さから兄を極端に嫌うようにな

る。また兄弟には幼馴染の少女がいて、複雑な恋愛の三角関係を持つことになる。こういった個人の人間模様も影響して混乱の漂流生活が完成していく。対立による暴力、男女の感情の交差、私たちが法律や、宗教、道徳観念によって抑えつけている人間の負の本能が発揮していく。

アニメーションだからできることの一つに、多彩な登場人物の設定をダイレクトに作品に反映させるというものがある。架空の登場人物を絵にすることで、個性、性格を純粋の映像化できるという面はアニメーションのメリットだ。確かに実写の映画のような人間の自然さは失われるかもしれない。要素が前面に出たキャラクターは見る人によっては強烈で違和感が出るかもしれない。私はそのようなデメリットを背負ったとしてもこの操作を行うことで強い人間模様を表現できることができるのではないかと思う。確かに仮想の人間であるが、それは全てのフィクションでいえることで、アニメだから特別というものではない。明確に登場人物を添えることによって人間関係が観ているものにも分かりやすく伝えることができるのではないだろうか。『無限のリヴァイアス』では人間関係の複雑さ、ヒエラルキー、反乱、人間本能の美しさと汚さなど様々なものを表現させることに成功している。そして、宇宙という特殊な環境を表現するのにアニメーションは適している。まだ解明し尽くされていない世界に人は憧れたりロマンを持ったりする。分からないからこそいろいろと想像し舞台設定を創ることができる。だからこそSFアニメは人気があるのだし、ジブリのファンタジー作品が人々を感動させるのだ。

多数の登場人物が出てくる物語は昔から存在する。『三国志』は武将が数多くいて、それぞれの人物の行動が交差するから物語が面白くなる。三国志のディープなファンが多いのも登場人物の豊富さが原因の一つだろう。また西洋ファンタジー小説『指輪物語』もエルフやホビット族など多彩な種族が協力して戦うから深い物語が生まれていく。

日本では『忠臣蔵』などでそれが描かれている。マクロな集団の戦い、ミクロな集団での闘いは多人数のキャラクターがあってこそ味わい深いものになるのではないだろうか。

個人が集団に属することで登場人物の行動テリトリーが広がり、やがて集団はより大きな社会を作っていく。実はアニメーションでは近年それが描かれない傾向がある。現代アニメの方向性を決定付けた『新世紀エヴァンゲリオン』から派生する多くのアニメは集団から社会へと構成するはずの人間を分離した。世界という漠然とし

たものと個人の間に大きな繋がりを結ぶことで、集団と社会を描かずに物語を進めることに成功した。現代のアニメやライトノベルの多くにみられる現象だ。インターネット上で「セカイ系」と呼ばれる技法である。この技法を使ったアニメが周りには非常に多い。

別角度で見れば、現在の私たちの環境にマッチしている技法なのかもしれない。地域の繋がりが薄くなったが、テレビメディアやインターネットによって世界の大きな情報を得ることが簡単になった。リアルな世界で近距離の集団を作らなくなった私たちの思考は自然と「セカイ系」をベースにした作品を求めているのかもしれない。

しかし、『無限のリヴァイアス』は閉じた空間で人間集団の意味を提示している。個人と世界の間にあるはずの集団の素晴らしさと苦しさを描いている。『新世紀エヴァンゲリオン』以降こういった作品が生まれていることも非常に興味深い。

名著とされた『十五少年漂流記』から文学としての『蠅の王』へ。そして現代版「漂流物語」としてアニメで誕生した『無限のリヴァイアス』は閉鎖してしまった空間で生きる若者達を描いている。それはただ協力して乗り切る冒険小説ではなく、人間の負の感情でいつでも崩壊しかけない人間社会そのものを映し出す。ポストモダンに登場した実存主義がそれまでのロマン主義に替わったとき、人間をより現実的に表現した物語が世界中で登場することになった。私たちはこういった物語から人間の汚い部分を見つめ直し、もう一度人間とはどのようなものなのか、人間の美とはどこにあるのかを考え直す。ニヒリズムから希望へと、その契機として私は『無限のリヴァイアス』という作品を紹介したい。この作品は放送されて幾分経つが、未だに多くのファンに支持されている隠れた名作アニメの一つである。

（しろうち　ひろき・文学部二年生）

カット　P. N. Crowbandit

連載

本のいろいろ㊶

関大図書館―和漢軍書要覧について―

仲井　徳（いさお）

『和漢軍書要覧』

『新撰書籍目録』

江戸時代には六〇〇〇書肆（書店、出版社〈板元〉も兼ねる）が出す広告や出版目録、販売用の各種書籍目録（しょせきもくろく）〈書目〉があるが、特定の主題に関して主題目録があり、軍書（軍記とも）の書目について考える。

『和漢軍書要覧』二巻一冊　吉田一保 著
明和七（一七七〇）刊
文化一二年（一八一五）刊
R0/913.4304/Y1/1

上巻　和軍書の部　下巻　唐軍書の部
一二四編の軍書を掲げている。

軍書ものの流行

元和偃武以来の文治政治の影響を受けて、中世末期から近世初期にかけて戦国武将や近世大名の武勲や武功について語り物形式で記述した書物である。

『太閤記』『佐久間軍記』『明智軍記』等が歓迎された。

軍記読みの流行

講釈として、一七世紀後半・元禄時代に講談師が語り聞かせた。

著者吉田一保は、当時大坂で高名な講談師であった。

『太平記読み』『絵本太閤記』『通俗三国志』等が有名。

KOALAでは一八点がヒットする。

〔参考〕

『新撰書籍目録』四冊　享保一四年（一七二九）
R/025.1/B2/1-1/4

『本朝書籍目録考證』一冊　和田英松 著
一九三六刊　022.21/W1/1

『日本書目大成』四冊　長澤規矩也 編
一九七九刊　R0/025.1/N5/1―1/4

（なかい　いさお・神戸女子大学文学部准教授・元関西大学図書館員）

『太閤記』

連載

本のいろいろ㊷

関大図書館―破提宇子について―

仲井　徳（いさお）

『破提宇子（はデウス）』

『伴天連追放令』

頃は天文一八年（一五四九）、フランシスコ・ザビエル（一五〇六～一五五二）が鹿児島に来たり、イエズス会士としてカトリック教の伝道を始めたことにある。

次いで、ヴァリニヤーノ（一五三九～一六〇六）が布教に来日し、セミナリヨ・コレジョを設立、九州の諸大名を教化した。天正少年使節を連れてローマ法王に謁見、さらに布教のための活字印刷機を日本にもたらした。これがキリシタン版である。グーテンベルクの活字印刷術が、一四〇年後には極東の日本に上陸したのである。この印刷方法は南蛮文化の憧れもあって、織田信長、豊臣秀吉をはじめ皇室関係者にも大きな影響を及ぼしたはずである。

しかし、結論的にはキリスト教は禁教になり、キリシタンは弾圧され、キリシタン版も葬り去られる運命であった。弾圧をかいくぐって残った図書は三二点である。

ここでは、ハビアン（Fabian）という特異な人物によるキリシタンの排斥―排耶（はいや）蘇―について述べたい。

ハビアン・フーカン（巴叱弇・不干斎、一五六五～一六二一）は加賀（金沢）の禅僧であったけれど、母のジョアンナとともにキリスト教に改宗する。母は北の政所の侍女であった。上層部までキリスト教が広まっていたことが分かる。天正一四年（一五八六）イルマン（修道士）になったハビアンは、京都・南蛮寺に於いて松永貞徳（一五七一～一六五三）と林羅山（一五八三～一六五七）と宗教論争を行う。天動説か地動説か、造物主は在りや無しや等々原理的な問題を巡って宗論があったが、羅山の朱子学的論理とハビアンの弁証論とは平行線であった。その時に書かれたのが、

ハビアン著　『妙貞問答』三冊　慶長一〇年（一六〇五）

で、浄土宗の妙秀とキリシタンの幽貞の尼僧による問答形式を借りて、日本の既存宗教―仏教・儒教・神道―を排斥し、キリスト教を推すことでついに妙秀がキリスト教に改宗するというもの。

ところが、豊臣秀吉の「伴天連追放令」が出たりしたのち、ハビアンは慶長一三年（一六〇八）突然棄教して、一転してキリ

キリシタン版『落葉集』

スト教排撃に回ったのが、

ハビアン著　『破提宇子』一冊

一六二〇年（元和六）刊

081/N6/2A-26

一八六八年（慶応四）序刊

LM2/は/3/2

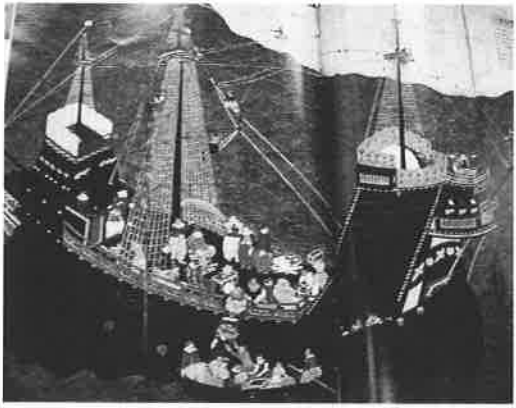
である。体系的反キリシタンの転向書といわれる。

ハビアンには、キリシタン版の『平家の物語抄』を編刊するなど事暦も多いが、小説では芥川龍之介著『るしえる』に取り上げられてハビアンの心の軌跡を伺うことができる。その他、キリシタン関係では、山口でザビエルにより受洗した盲目の琵琶法師・イルマン・ロレンソ（Lourenço 1526～92）が公家の清原枝賢や大名の高山右近をキリシタンに改宗させたり、京都の南蛮寺を建設したことも特記しておきたい。

また、キリシタン版に関しては、コンスタンチノ・ドラード（Dorado 1567～1619）が天正少年四使節の従者として渡欧し、生涯活字印刷を行ったという彼の数奇な運命も忘れられない。

〔参考〕若桑みどり著　『クアトロ・ラガッツィ――天正少年使節と世界帝国――』

（神戸女子大学文学部准教授・元関西大学図書館員）



『南蛮船』

図書館資料紹介 (11)

International Military Tribunal for the Far East: Dissentient Judgement of Justice R. B. Pal

渡部晋太郎

米ソの冷戦が終了し、確かに今後世界大戦が起こる可能性は乏しくなった。しかし、ドイツ文学者の西尾幹二も言う通り、「二十一世紀の世界では大きな戦争は起こらないだろうが、二十世紀の戦争をどう解釈するかが国益を分ける大争点になる」と考えられ、その意味で、いわゆる東京裁判史観への根本的な批判を内包する『パール判決書』をどう解釈するかが、特に日本国にとってその命運を左右しかねないものとなっている。さて、その『パール判決書』であるが、日本では占領中公刊が禁じられており、イギリスでも出版が禁止、アメリカ合衆国においても出版されず、一九五三年になってやっとインドのカルカッタの出版社Sanyal & Co. から刊行されたのだった。日本では『パール判決書』の翻訳は『共同研究　パル判決書』上下巻として講談社学術文庫から刊行されており、また、その原文も一九九九年に復刻版が国書刊行会より『東京裁判・原典・英文版　パール判決書』として刊行されているのであるが、この復刻版の底本としているのも一九五三年に刊行された上記の『パール判決書』、International Military Tribunal for the Far East: Dissentient Judgement of Justice R. B. Palである。しかし、これほど著名な図書であるにもかかわらず、その原書は稀覯書にあたり、例えば全国大学図書館総合目録NACSIS Webcatでは立教大学図書館一館しか所蔵館が示されていない。幸い、関西大学図書館にはこの原書だけでなく、パール博士著、田中正明編『平和の宣言』（東西文明社、昭和二十八年）、パール博士歓迎事務局編『I Love Japan　パール博士言行録』（東京裁判刊行会、昭和四十一年）といった現在では入手困難なパール博士に関する基本書も所蔵されている。中島岳志著『パール判事　東京裁判批判と絶対平和主義』（白水社、二〇〇七年）における如く、「パール判事は憲法九条の護持を主張した」との新説（珍説？）が唱えられたりする昨今、パール博士の実像を知り、様々なパール解釈の可否を判断するためにも、一度は手にしてみたい資料のひとつである。

（わたべ　しんたろう・関西大学図書館職員）

図書館資料紹介 (12)

弘文荘待賈古書目 CD-ROM版

渡部 晋太郎

一九八四年二月二十五日の朝日新聞夕刊一面トップに「「土佐日記」為家本を発見　原本の姿を忠実に　死蔵され二百年余　自筆本は不明」という見出しのスクープが掲載された。これは「土佐日記」の四つの臨写本うちこれまで所在がわかっていたのは前田育徳会蔵の定家本だけであったのだが、この度、もうひとつの臨写本である為家本が発見されたというものだった。それまで知られていた唯一の臨写本である定家本は原本の忠実な書写ではなかったため、注釈書の多くはより忠実な臨写であった為家本の転写である青谿書屋本を底本に使っており、例えば、岩波書店から刊行されている『新日本古典文学大系』第二十四巻収録の「土佐日記」も底本としているのは青谿書屋本である。そのような状況にあった中、青谿書屋本の親本である為家本が出現した訳であるから、これは大事件と言ってよく、新聞が記す通り「古書では戦後最大の発見、といってもあながち誇張ではない」。では、この事件はどのようにして新聞記事に至ったかというと、それは一古書店の発行図録から端を発したのであった。発見者は古書店の経営主である反町茂雄氏で、同古書店が昭和五十九年月十日に発行した『弘文荘敬愛書圖録　Ⅱ』の冒頭に掲載された販売古書の解説からこのスクープが見出されたのである。

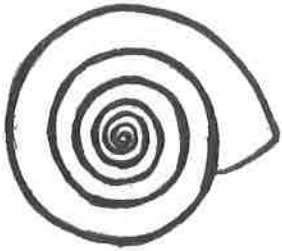
反町茂雄氏は古書業界にその人ありと知られた古書店主で、『天理図書館の善本稀書』（八木書店、昭和五五年）や平凡社ライブラリーから刊行されている『一古書肆の思い出』全五巻にまとめられた古書談義は多くの読書人に歓迎されている。また、同古書店が発行する『弘文荘待賈古書目』は古典籍の世界へのナビゲーターとして未だ変わらぬ価値を有しているのであるが、その『弘文荘待賈古書目』が一九九八年にCD-ROM版として八木書店から発行され、一号から五〇号を含む七十七冊の目録が各種検索機能を備えた上、全頁をデジタル画像データとして利用できるようになったのだった。上記の『弘文荘敬愛書圖録　Ⅱ』もこのCD-ROMに含まれており、為家本「土佐日記」の図版もカラー画像で見られるだけでなく、画像拡大機能を使うことにより、紙の質感までも把握することが可能となっている。古典籍の世界に関心のある人は冊子版と共にこのCD-ROM版を活用することを是非お勧めしたい。

（わたべ　しんたろう・関西大学図書館職員）

文芸創作講座 小説

かたつむりと缶ビール

槇原俊郎



1、『序』

合法的にトリップしたいのなら、断然「こたつ」をおすすめする。

背筋を伸ばし目をギラギラさせてこたつに入る人はあまりいない。人類にそれは不可能である。誰もが瞳をとろんと澱ませ、多くの者が枕がわりの座布団によだれの染みをつくる。これをトリップと言わずに何と呼ぼうか。

こたつの「ぬくさ」がもたらす快感はどこまでも甘い。なぜ人間はこたつの中ではこれ程までに警戒心が緩むのか。攻撃性など微塵もなくなる。

これは僕の説だが、こたつという装置は母親の胎内を想起させるのではないだろうか。布団に包まれヒーターの温かさを感じることは、羊膜に包まれ母親の内臓の温かさを感じることによく似ている。絶対的に「守られている」「愛されている」という過去の感覚が、こたつという装置によって無意識下に再現されるのだろう。

2、『起Ⅰ』

マーブリングのようなまどろみの中、せっかく充足感にうち震えていたのに、先ほどから誰かが僕の足をしきりに小突く。この部屋にいるのは僕以外に妻だけだ。仕方なく返事をする。

「なに?」「のど渇いた」
「そう?」「何か飲みたい」
僕ら夫婦の良くない点は（世間に評価されない点は）、妻が専業主婦であるのに対して、僕も専業主夫であるという点だ。まさに失業保険が僕らの生活の生命線なのだ。
しかし、失業保険というものは、離職していれば未来永劫もらえるものでは当然ない。そんな制度があれば、未来永劫働かない者が続出するからである。もらえる額や期間については様々な要件により差異があり、単純に言えば僕のような若い世代には厳しく、老人や病人には優しい。僕の場合はたった九十日で給付が打ち切られ、もともと前の会社が薄給だったのでもらえる額も少ない。これを福祉制度の不備ととるか、行政の愛のムチととるかは個人差があるだろう。
だが、そんな決して満足いかない失業保険で今の僕らが食いつないでいるのも事実なので、これをもらわないわけにはいかない。そもそも失業保険とは再就職の意思のない者には支給されないため、僕は定期的にハローワークへお上のご機嫌をうかがいに行く。一応のポーズ作りは必要なのだ。
言うまでもないが、タッチ画面とにらめっこしたり、

職員に近況を手短に報告するだけでおもしろいことなどちっともない。僕はここに来て、なぜ職業安定所をわざわざ横文字でハローワークなどと呼ぶのかが分かった。職員にハローと挨拶するだけの仕事（ワーク）でお金がもらえるからハローワークなのだ。実に単純明快。まぁ、職員も本気で職を探している中高年の対応で忙しく、真剣に仕事を見つける気などさらさらない僕などにはかまっていられないのだろう。

そう、新しい仕事など僕は最初から求めてはいないのだ。失業保険打ち切りが刻一刻と迫っているというのに。以前の職場でものらりくらりはしていたが、決してリストラで追われたわけではない。戦力外通告の前に自分から音を上げて途中離脱したのだ。理由は仕事をしたくないので。だが、働かざる者喰うべからず。そして、亭主はハローなワークへ。

最近は中高生の職場体験の試みが活発だが、このハローな職場も体験させてみてはどうか。こうはなりたくないと奮起するか、将来安易なドロップアウトに走るかはこれまた個人差があるだろうが。

中学二年生の春に税関に職場体験に行った僕が、結果的にこんな暮らしぶりに陥った事情は様々だが、こたつの甘美な魔力がその一端を担っているのは間違いない。どんなドラッグにも副作用があるように、こたつのぬくいトリップは快感と引き換えに労働意欲を人から奪うのだ。言い換えれば、これこそ究極のグウタラ製造機なのである。

もちろん大多数の者は正月の終わりとともにその魔力に打ち勝ち、いそいそと会社なり学校なりに出勤・登校して行く。だが、そうできない者もいるのだ。今冬の僕がそうだったように。もう僕がまっとうに仕事を続けるためには、沖縄かどこかの南国に移り住むしかない。けれども、それを実行する行動力があれば、とっくにこの「ぬくさ」から抜け出せているだろう。そう考えれば、僕が労働意欲のメーターの針を「低」の方向へ振り切らせ、社会からリタイアしたのもそれしか選択の余地のない、必然のことだったのかもしれない。

だから僕は春など永遠に訪れず、失業保険の打ち切りの日もやって来ないことを祈りつつ、今日も朝からこたつで妻とぬくぬくしているのだ。現実逃避というマーブリングにまどろみながら。

3、『起Ⅱ』

妻はＡＢ型である。それがどう関連しているかは分からないが、どうもやはり人様とはズレているところが見

受けられる。行列のできるラーメン屋に行っても水餃子しか頼まないし、空き瓶は基本三日ほど眺めてから捨てる。未だに何を考えているのかつかめないのが妻の持ち味なのだ。これが十代の世間知らずな夢見る少女なら「不思議ちゃん」の一言で済まされるのだが、妻は今年いよいよ三十の大台なので始末が悪い。致命的である。このまま老婆になって民生委員に「あなたの奥さん、痴呆症ですか?」と尋ねられ、僕がうっかり「別に」と答えたら、僕もボケていると思われるに違いない。

この甘美でトリッピーな日々についてもそうだ。こんなにも自堕落で甲斐性なしの（自覚はある）旦那に妻は文句の一つも言わない。ある日突然夫が「もう会社行きません。しかも無期限で」と宣言すれば、世間一般の妻は激怒するか、もしくは慰労・鼓舞するのが普通であるはずだ。せめて動揺するなり唖然とするなりのリアクションを起こすのが人間としての務めであろう。それを「そうなんだ」の一言で済ます我が妻は、底抜けの阿呆なのか、それともある意味奇特と言えるのか、あるいはその両方なのか……。

確かに顔を合わせる度に、やれ働けだの仕事見つけろだの言われると僕も気が重い。だが、だからといってここまで何にも言わないのはどうなのだろうか。妻の幼い頃の教育環境を疑う。徹底的に物欲や現世への執着をそぎ落とすような洗脳でもされたのか。単にＡＢ型の宿命が為せる所業とは考えにくい。

かと言って、僕の方から「こたつで寝てばかりの旦那についてどう思う?」なんてことは到底聞けない。口が裂けても。せっかく手に入れたこの安らかな毎日を手放すきっかけになるおそれがあるからだ。

このように一見こたつで弛緩しきっている僕も、頭の中では壮絶な妻との駆け引きが繰り広げられているのだ。もしかしたら妻は僕に免疫耐性をつけさせないためにおし黙り、ここぞというタイミングで「働けよ」と言うのを見計らっているのかもしれない。そうでなければ、ある日忽然と家を出て僕に精神的ダメージを負わせようと企んでいるのかもしれない。はたまた本当に頭が鈍かっただけで、行き着くところまで生活が逼迫して来てようやくガミガミ言い出すのかもしれない。

いずれにせよ、とにかく今は事態を静観するしかない。こたつの中から。半目で。

4、『承』

他人の目から見れば奇妙かもしれないが、平穏なこたつ生活を送っている僕の心中は極めて穏やかだ。やりた

くないこと（仕事）をやらず、やりたいこと（こたつで寝る）だけをやっているのだから、精神衛生上これより好ましいことは思いもつかない。
「水か紅茶かコーヒー。それぐらいはお煎れしますよ」
それに妻から不満が噴出せぬよう、この生活を始めてからの僕は非常に優しい。事情を知らない人に僕らの日常の場面を切り取って見せれば、僕はなかなかの良き夫に映るだろう。
首を鳴らしながら僕はのそのそとこたつから這い出る。
「僕は紅茶にするよ。君は？　君も紅茶でいい？」
「もっと他にないの？」
AB型の妻は両手をひろげ大あくびをする。あくびをするとどうして涙が出るのか。潤んだ瞳をしばたきながら首を傾けて僕の方を見る。
「いつも紅茶かコーヒーじゃ芸がないよ。なにかおもしろい飲み物ない？」
「おもしろい飲み物？」
そんなものは生まれてから一度も聞いたことがない。ファンタ、なんてギャグをのたまう年齢でもあるまいし。
「ないよ、何も。何か買いに行く？」
「うーん」
そう言ったっきり妻の動きがしばらく停止する。その隙に僕はコンロで湯を沸かし、とりあえずマグカップを二つ用意しておく。それから一旦こたつに戻り、もぞもぞとあぐらを掻きだす頃に再び妻が始動する。
「私、考えたんだけど」「うん」
「ビールなんてどう？」
朝から酒。しかも真冬にビール。新規開拓を目指すビール会社の回し者かと思ったが、ここで妻と波風を立ててはいけない。あくまでもソフトな返答の言葉を選ぶ。全てはこのこたつライフを守るために。
「ビール？　なるほどね。真夏に鍋をするのと同じ発想だね。うん、こたつにビールか。なかなかオツな提案だよ。素敵だね。ロマンがあるね」
少々過度な方がうちの妻には効く。これで機嫌が良くなれば、あとはゆっくり自分のまどろみ世界に耽ることができる。僕なりの生きる知恵である。妻の気持ちはころころと変わるので、最初だけ持ち上げておいて、適当なところでなだめすかしてやればいいのだ。
「センスあるなぁ。すごく斬新だよ。いや、君といると本当に退屈しないよ」
「でしょ？　こたつで乾いた体にグビっと一杯。たまら

ないよ、きっと」

妻の口ぶりが妙に堂に入っていたので、それも一理あるなと僕は思ってしまった。確かにちょっぴり旨そうだ。しかし、今この家にはビールなど見当たらない。買いにいくのも面倒だ。それに何より、無職の身で朝からこたつで酒を呑むというのはさすがの僕も気が引ける。それこそダメ人間確定の烙印を押されそうだ。失ってはいけない最後の牙城を自ら壊す行為である。僕は気を強く持ち、妻をいさめる。

「でも、もうお湯沸かしてるからまた今度ね。スーパーへ買出しに行った時にビールも買ってこればいいよ。さ、紅茶かコーヒーどっちにする?」

妻の顔をうかがう。

「いらない」

即答。非常にまずい。さらに妻は言う。

「いいよ。このままこたつで干からびて死ぬ。さよなら」

僕はふと考える。もし、このまま本当に妻がそうなれば。保険の類は一切加入させていないが、案外今より気兼ねなく自由な暮らしができるかもしれない。しかし、口は条件反射的に次の言葉を紡いでいた。

「分かった分かった。行ってくるよ。待ってて」

気ままに見えるこたつライフもそう楽ではないのだ。いつの時代も人間も頭を悩ませるのは人間関係が大半である。その中でも夫婦の問題というのは、親兄弟・友人知人も介入不可のそれはそれはややこしい問題なのである。

5、『転I』

すぐ近くに酒屋がある。が、その店は朝十時半にならなければシャッターを開けない。つまり、今の時刻は九時半過ぎであるから、あと一時間ほどはこたつに包まってまったりほっこりできる計算だ。それを「僕」が許すならば。決してそんなことはまかり通らないことを、僕はこれまでの経験からたやすく予測できる。

今まで僕はさんざん自分のことを勤労意欲ゼロの怠け者のように卑下してきたが（実際その通りだが）、僕だってやる時はやるのだ。一度思い込んだら限界までやり通すのが僕という男である。こたつに引きこもることだって、そんじょそこらのお方には決断できないだろうし、いざ始めてみても一週間もすれば飽きてしまい投げ出したくなるだろう。その点、僕は持続力と根性という面では比類なき実力を秘めている。労働意欲ということに関しては、ただ単に僕という人間が「働くこと」に向いていなかっただけだ。人には向き不向きがある。全て

においてパーフェクトな人間なんて存在しない。適材適所。成績表がオール5だからといって寿司が握れるだろうか？　僕はオール5でもなかったし、寿司も握れない。でも、こたつでウトウトまどろむのは誰よりも得意である。

笑うなら笑えばいい。しかし、もし人類がこたつでぬくぬくするために誕生したのであれば、神様に褒められるべきはこの僕だ。そんなはずはないとあなたは言い切れるだろうか？　こたつニートの正体が、こたつ聖人と表裏一体である可能性もこの宇宙は孕んでいるのだ。

頼りがいのある厚手のダウンジャケットを引っ張り出し、スニーカーの紐を一度ほどかずにそのまま両足をかぽかぽと挿入する。妙にテンションが高揚してきた。真っ黒の毛糸の帽子をすっぽり被り、鼻息荒く玄関の扉を開ける。愛する妻が「こたつでビールを飲みたい」と泣いているのだ。最初こそ確かに「やれやれ」と思ったが、不思議と今は使命感にも似た感情が心の中で燃えている。大げさに言えば、大宇宙の意思とやらに導かれている心持ちもしないでもない。

しかし、寒いものは寒い。部屋の窓から見る限りは陽射しも幾らかあって、もしかしたらと期待したが、そんなものはドアから一歩出た途端に二月の寒風に吹き飛ばされた。身を切るような、というよりは身を砕くような冷たさである。こたつのぬくさに体が慣れきっているので余計に寒く感じるのかもしれない。身震いをしながらマンションの階段を駆け下りた。

ちなみに英語では、真冬のことをデッド・オブ・ウインターとも言う。あらゆる生物の生命活動が低下するこの季節に、なぜ僕は朝から冷たいビールを求めて家を出るのか。すぐに心が折れそうになるが、持ち前の気力と情熱でなんとか持ち直す。全ては妻のため、ひいては自分のこたつライフのためなのだ。

さて、我が家には車もバイクも自転車もない。コンビニまでは徒歩で夏は八分、冬は九分ほどである。途中、まだ開店する気配など全くない酒屋を腰をこごめたまま恨めしげにちらりと見た。

ようやく着いたコンビニは暖房が効いていたが、ビールのアルミ缶は当たり前だがよく冷えていた。思わず小さく悲鳴を上げてしまいそうなくらいに。

缶ビールを二缶ぶらさげながら、九分後の世界を目指して帰路に着く。国道から遠く離れた住宅街にひっそりと伸びるバス道。凍てつく空気は透明で、頭の中は何だかとてもクリアーだった。

クールダウンした脳みそで少し考えて見る。こたつ

ニートという身分に甘んじている自分。それを存分に満喫する一方で、こんな日々はそう長くは続かないと知っている自分。楽園崩壊までのタイムリミットを見て見ぬふりをしている自分。

もしかしたら、今すぐもう一度普通に働き始めた方が、次第に目を背けられなくなってくる将来の不安からも解き放たれて……。ずばり、そっちの生き方の方が実は「楽」なのではないだろうか？

そんなことに思いを巡らしている時、僕はかたつむりを踏んだ。

もし、この時かたつむりを踏んでいなかったら、僕は自分の力で自分の生きる道を見い出し、こたつのまどろみの世界からも抜け出せていたかもしれない。まじめに会社で働き、まじめに給料をもらい、いずれは子供も授かり「うちの子にも、もうちょっとまじめになって欲しいよ」と愚痴をこぼす、そんなまじめな大人になれていたかもしれない。

でも、僕はかたつむりを踏んだ。

「僕が悪かった。今まで君にどれだけ迷惑をかけたことか。僕、働くよ。向いてないなりにも精一杯がんばるよ。君はずっと黙っていたけど、やっとその理由が分かったんだ。君に言われていやいや会社に戻ったって、どうせまたすぐに挫けるに決まってる。働いて辞めて働いて辞めての繰り返しになるだろうね。それじゃあ何の進歩もない。だから、自分で気が付かなければならなかったんだ！　それが人間的に成長するということであり、どんなに過酷な労働に耐えうる、いかなる苦難も乗り越えられる、決して揺るがない「強い心」を獲得するための唯一の方法だったんだ！　君は最初からそれを知っていたんだね。君は神様かい？　さもなくば大宇宙の大いなる意思かい？　とにかくもうこたつは押入れの奥深くに仕舞ってしまおう。いや、粗大ごみに出してもいい。僕も信じられないよ。ついさっきまでこたつの中で無為に人生を浪費するばかりだった自分が、こんなことを言うなんて！」

でも、僕はかたつむりを踏んでしまった。

だから、こんな長ゼリフを言いながら、買ってきた二缶のビールで社会復帰のお祝いに妻と二人で乾杯することもできなくなった。

悟りの境地の直前で僕の思索は断絶し、二度とそこに辿り着くことはできなくなった。まっとうに生きるための活路は、かたつむりの固い殻が潰れる耳障りな音とともに永遠に立ち消えてしまったのだ。

6、『転Ⅱ』

冬にだってビールが売っているのと同じように、冬にもかたつむりはいる。たいていは木のうろや落ち葉の下でじっと冬眠しているけれど。だが、皆がせかせか会社に行く中、一人こたつにこもる人間がいるように、一匹だけ冬のアスファルトをうろうろする物好きなかたつむりもいるようだ。そして、奇跡的な確率で一人と一匹の運命はリンクする。

足元から突然、鈍い破裂音がした。とっさに僕は右足から体重を抜き、思わず後ろにのけぞった。だが、靴の裏には間違いなく何かを踏み潰した不快な感触が残っていた。

もう自分がつい先ほどまで、極めて重要な思案をしていたことなど微塵も思い出さなかった。慌てふためきつつも音の正体を確認して愕然とする。

ぐしゃ、ぐちゃ、めりめり、ばりっ、がっ、ぺきっ、じゃりっ、ぎちっ、どかん……。かたつむりが爆ぜる音を表すには少し派手すぎるかもしれないが、実際に激しく損傷したうす茶色の縞柄を見るとそんな音像が頭に浮かんだ。

僕は一瞬だが、右足一本でかたつむりに乗っかってしまったらしい。僕の全体重を受けた哀れな陸生巻貝は、見るも無残にへしゃげて倒壊寸前だった。しかし、何も砕けた陶器のごとく粉々という訳ではない。一応巻貝の原型はとどめているので、何とか圧死は免れた可能性もある。

僕はその痛ましいかたつむりを注視した。指でつついてもみるが、生死の確認は容易ではない。寒さも忘れ、決して短くはない時間が流れて行くのをただただ傍観する。

それにしても、もしここで命を取りとめたとしても、もうこんなにボロボロの殻ではきっと役に立たないだろう。これでは雨露さえしのげない。殻の亀裂からすぅっと天敵である鳥のくちばしが差し込まれるイメージが脳裏をかすめては消えていく。

こうなると申し訳程度に付いているより、いっそのこと殻を放棄してしまった方が、今後前向きにやっていけそうなものだ。動きも少しは軽やかになるだろう。だが、そこまで考えて僕ははっとする。

「殻を失ったかたつむりは、これからナメクジとして生きていくのだろうか……」

僕は身震いをした。無理だ。これまで自分の宿を背負い、殻の中でぬくぬくと生きてきたかたつむりには無理

だ。ナメクジなどというサヴァイバルな競争社会でやっていけるはずがない。社会不適合、脱落、気にも留められない弱者の死。失業手当の打ち切り。強制的な社会参加。

「お前は僕の分身だ！」

僕はかたつむりを両手で拾い上げ、左の掌にそっと乗せて必死に呼びかけた。

「生きろ！　僕が守ってやる。生きるんだ！」

僕はかたつむりを優しく両手で包み、天を仰いだ。自分でも少し信じられないが、真剣に神に祈ったのだ。救済を。「この弱き者を見捨てるおつもりですか」と。こうなった原因にも顧みず。

7、『滅Ⅰ』

「おかえり。すごく遅かったね。何だかお腹すいちゃった」

何も知らない妻はこたつにあごを乗せてくにゃくにゃしている。僕はスニーカーを紐をほどかないまま後ろへ飛ばすように脱ぎ捨て、ビールを乱暴に冷蔵庫にねじ込んだ。

「どけ！　今ならまだ間に合う」

僕は競泳の飛び込みのように、かたつむりを抱えたまま頭からこたつに潜った。たちまち目の前がヒーターの真っ赤な光に溢れる。

「なになに、一体どうしたの？」

妻ももぞもぞとこの真っ赤な世界に首を突っ込んで来た。熱を帯びた空気に僕らの頬は燃えゆらぎ、ヒーターの焦げつくようなジーという音が耳の奥でくすぶっていた。

「まだ死んじゃいない。温めてやるんだ」

そう言った僕の口調は、さっきとは打って変わって実に落ち着いていた。なぜだか声を押し殺し、静かに静かに妻にことの成り行きを説明する。そして、最後にはこう付け加えた。一段と声をひそめて。

「僕とかたつむりは試されている」

まさにその直後。ひしゃげて割れての巻貝が不等な間隔でずずずと動き、かたつむり本体がぬっと顔をのぞかせた。そして、元気に触角を動かして辺りの様子を窺っている。

これが、神の愛とやらなのだろうか。僕は感激で言葉を失ったが、妻は僕の感慨など丸っきり伝わっていなかったらしく、「あ、生きてたんだね」と呟いただけでこたつから上半身を引っ込め、家賃月六万五千円の世界へと戻って行ってしまった。

「僕、こいつを飼うことにしたから」
僕も妻の後を追い、こたつから這い出て座り直す。そして、不悶なかたつむりを片手であやしながら妻にそう宣言した。
「もう、こんな姿では野生で生きていけないからね。僕が責任持って育てる。まぁ、小さい虫かごが一つあれば充分だから大変なことじゃないよ」
「そう……」
どうやら飼育に妻の協力は得られそうになかった。こんなにも可哀そうな生き物を見て少しも同情しないとは、やはり妻は何を考えているのかさっぱり分からない。それよりも、かたつむりのエサは何を用意すればよいのだろうか。僕が幼い頃の記憶を辿ろうとした時、ふいに妻が口を開いた。
「ねぇ」「ん、なに?」
「私のことは養ってくれないのに、その変てこなかたつむりは養うの?」
僕のこたつ生活に対する正真正銘の妻の初批判だった。僕が耳を疑ったのは言うまでもない。まさかの不意打ちとも言えるタイミングに僕は動揺を隠せない。妻はさらに言葉を続ける。
「あなたどうせ気が利かないから、ビールしか買ってきてないでしょ。私おつまみが欲しいのに。だから、ほら、食べましょう、それ」
「た、食べる? 馬鹿言うなよ、せっかく救われた命を。エスカルゴじゃあるまいし」
「かたつむりに違いはないでしょう。それとも何? かたつむりには喰わせてやるのに、私には喰わせてくれないの?」
「喰わせるの意味が違うよ。ね、またコンビニで何か買ってくるから。それで我慢して」
「私はエスカルゴが食べたいの」
「だから、こいつはエスカルゴじゃないって。そもそもエスカルゴっていうのは野生のを捕まえて来るんじゃなくて、農園か何かで衛生的に養殖したやつなはずだし」
「あなた、これ飼うっていったじゃない。だからもうこれは養殖のかたつむりよ」
「そんな無茶な」
「あぁ、私とかたつむりを天秤にかけて、あなたはかたつむりを選ぶ人なの?」
「いや、そんなつもりでは……」
僕は妻を必死になだめながら考えた。努めて冷静に。ここで妻を爆発させたままだと、確実に僕はこたつから追いやられる。働け働け養え働けの毎日になることは必

至だ。それは非常によろしくない。妻は先刻「天秤」という言葉を使ったが、もしかするとこれは妻とかたつむりとの選択を迫る天秤ではないのかもしれない。つまり、これは僕のほのぼのこたつライフと、僕の分身であるかたつむりとの約束（要はかたつむりの生命）こそが天秤にかけられていると言えるのではないだろうか。

僕に働けと言うのは、死ねという言葉にさえ匹敵する。とどのつまり、妻が提起した選択とは究極的には、「僕が死ぬか、かたつむりが死ぬか」という選択なのである。

僕は手首の動脈の辺りをかわいらしく這うかたつむりを眺めた。

8、『滅Ⅱ』

「成仏しろよ」

本来ならオリーブオイルで香ばしく焼き上げるべきかもしれないが、そんな洒落たものは我が家にはない。フライパンにどす黒い残り油をさっと引く。ぱちぱちと音を立ててすぐにかたつむりを迎え入れる準備が整う。死のカウントダウンが始まる。失業保険終了の秒読みも確かに生死に直結しているが、こちらのリアリティーに比べれば子供のままごとのようなものだ。僕は息を飲む。

「さ、いっそひと思いに」

ＡＢ型の妻が悪魔のようなことを言う。

「だめだ、とてもできない。こんな残酷なこと」

僕は頭をかかえる。

「意気地なしね。魚を焼くのとどう違うのよ。どうせ長く生きられないんだから、食べてあげた方が供養にもなるって。かして、私がやったげる」

「いや、僕がやらなければならないんだ。これは僕が背負うべき十字架なんだ」

僕の指先のちょっとした動作で、うなだれた罪なきかたつむりはフライパンに落下する。その瞬間にジュウジュウと悲鳴を上げながらこんがり焼けるか、ボロボロの殻で短時間は耐えてもどうせは蒸し焼きになってしまう。それを想像するとどうしてもつらかった。

「冷たいフライパンに乗せて、それから徐々に炙っていく？」

「なぶり殺しだよ、それじゃあ」

「焼くのが嫌なら茹でる？　五右衛門風呂みたいに。あ、でもそれじゃあ不味そうか。茹でかたつむりなんてね。フフフ」

笑った……。この期に及んで。妻の人間性を疑う。

「揚げるっていう手もあるけど。どうせそれもだめで

しょ？」
僕は力なくその場にへたり込む。
「やっぱり、だめだよ。これは明らかに動物虐待だ。シラウオの踊り喰いが良くて、かたつむり殺しがなぜいけないか、うまく説明はできないけど嫌悪感でたまらない。動物愛護の精神って本質的にはそうゆうものだよ」
「動物愛護の精神ねぇ……。とにかく、まぁ、苦しめずに調理すればいい訳ね」
もはや聞く耳を持たず僕は自説を続ける。
「君が言う通り、そう長くは生きないと思う。何とか助かったものの、あの事故で瀕死の重傷だったに違いないからね。だからせめてそれまでここで飼ってやろうよ。天寿をまっとうしてからでも食べるのには遅くはないだろ？」
しばらく生活を共にすれば妻もかたつむりに情が湧くかもしれない。いや、案外一晩眠ればかたつむりに対する嫉妬なんてケロッと忘れているかもしれない。僕は賭けに出た。だが、ものの見事にあっさり惨敗した。
「私は一日たりともあなたが他の女を養ってやっているところを見たくないの」
「お、落ち着け、オスかもしれないぞ」
「かたつむりは雌雄同体よ」
そう言えばそうだった。いや、肝心なのはそんなことじゃない。オスでありメスであるかもしれないが、かたつむりは女ではない。しかし、もう今の妻にはどんな論理的な説得も届きはしないだろう。正面突破ではなく、変則的な攻撃の手を考えることが急務だ。
「今の世の中、男女平等。今度は君が働きに出る番だ」
なんていうのはどうだろうか。今までになかった発想だ。……いや、だめだ。妻は高校を出て以来、一貫して家事手伝いとして生きた女性であり、そもそも空き瓶を三日間眺める人間に正社員をまかせる企業が簡単に見つかるとは思えない。
（僕の提案を妻が神秘的な確率で承諾したとして）その場合はパートとして働きに出るのが妥当だが、それでは当然収入も少なく、僕もアルバイトを始めなければならない状況になるのは必至だ。アルバイト。高校生や大学生に交じってアルバイト。そんなものに耐えられる精神力があれば、最初からこたつに引きこもってなどいない。
何度も言うが、僕もおかしいが、こんな状況で今まで何も言わなかった妻の方が異常だと僕は思っていた。だが、やはりその分妻が溜め込んでいた怒りと不満は途轍もないエネルギーになっていたようで、その放出の度合

いも凄まじい。まさにこのかたつむりはその爆発のきっかけで、僕はとんだ地雷を踏んでしまったようだった。爆発のきっかけが多少不条理でも、妻の言い分は要所要所が正論なので止めるのは難しい。

「私が包丁でぶっつり首を切ってあげるわ。即死でしょ。全然苦しまないわ。その後でフライパンで焼けば動物の愛護の精神にも反しないはずよ！」

獣のように咆哮し、妻は僕の手からむんずとかたつむりを奪ってまな板の上に転がした。

「よせ、早まるな！」

妻が包丁を大きく振りかぶる。そして、奇声を発しながら振り下ろす。すると、かたつむりは異様な殺気を感知したのか首をひょいと縮めた。包丁はミリ単位でかたつむりをかすめ、寸前のところでかたつむりは妻の凶刃を逃れた。

まさに危機一髪。しかし、僕が胸をなで下ろす暇もなく妻は次の凶行に及ぶ。かたつむりを鷲づかみにすると、そのまま電子レンジの中へ放り込んだのだ。タイマーが出鱈目に回され、ブーンという起動音と共に回転皿が今度こそ死への秒読みを開始する。

「そんな殺生な！」

僕はかたつむりを救い出そうと一歩踏み出した。しかし。

「動くな！」

刃先を僕に向け、妻が立ちはだかった。僕はその場に凍りつく。冷や汗が背中をすべる。その間も電子レンジは非情に回り続けた。

9、『終』

どれほどの時間が経ったのか。電子音が死刑執行完了を告げた。

妻は包丁を下ろし、僕らの間に張り詰めていた空気もようやく緩んだ。

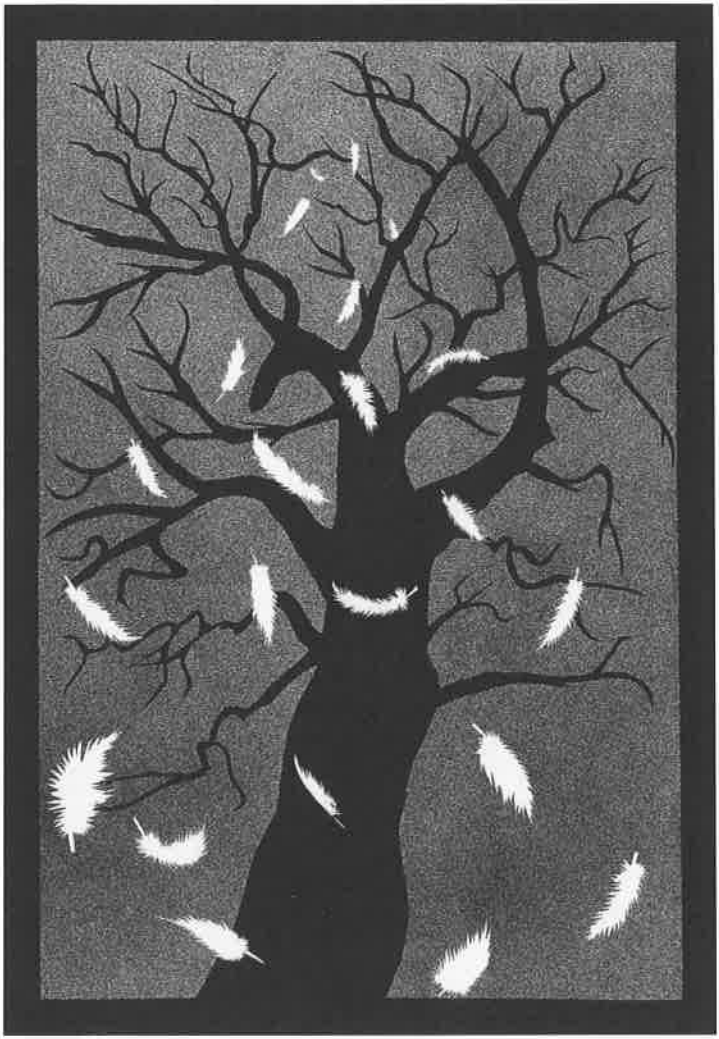
僕は電子レンジに駆け寄り、その扉の内部を恐る恐るのぞき見る。尋常ではない量の湯気が充満していた。意を決して扉を開けた途端にひどい臭気が周囲に立ち込め、僕は思わず顔をしかめる。下水道の底に沈殿した泥を煮しめたような匂いだ。目まいと吐き気を催す。だが、かたつむりの最後を見届けない訳にはいかない。僕の分身なのだから。覚悟を決めて回転皿に目を落とす。

かたつむりの殻は水分が完全に飛び、まるで骨のように散開していた。電子レンジの中で干からびてミイラになったかたつむりは、後にも先にもこいつだけだろう。そんなことに思いを馳せながら骨をぱらぱらと拾ってや

る。
「ふう、これですっきりしたわ。さ、こたつでビールでも飲みましょう。喉がカラカラで干からびちゃいそう」
妻はごそごそと冷蔵庫を漁る。僕は半ば放心状態で骨を拾い続ける。
しかし、どうも様子がおかしい。かたつむりの殻の部分はあっても、「身」の部分が一向に見つからないのだ。そのことを妻に言うと、妻は狂ったように高笑いをした。
「あんまり長いことチンしちゃったから消滅してしまったのね。あんなの体のほとんどが水分だもんね。ナメクジが塩かけられて縮んじゃうのよりおもしろいわ。かたつむりが電子レンジで消えちゃっただなんて。フフフフフフ」
笑い終わった後で、妻はさっきまでの狂態が嘘のように晴れ晴れしい表情をしていた。機嫌はもう完全に良くなったようだ。僕もこれでしばらくはほのぼのこたつ生活を存続できる。よく考えてみれば、妻は僕に他の女を養うなとは言ったが、僕に働けとは言わなかった。これでいいのだ。僕と妻はこたつに戻る。
僕は再びマーブリングのまどろみに沈み、妻は僕の分も缶ビールを飲んで彼女なりのまどろみの海に消えていった。これでいいのだ。
消え入る意識の淵で、僕は誰ともなしに言った。
「ニュースでよく聞く生活保護ってどうすれば受けられるんだろう。また役所に聞いてみよう。妻が精神病だと申告すればもらえる額が少しは増えるかな」
「精神病んでるのはあなたでしょ」
そう返事をしたのは妻か、それとも電子レンジに消えたかたつむりか。
あぁ、ぬくい……。

（まきはら　としろう・文学部四年生）

カット　車谷考介



文芸創作講座 小説

胎動

原田愛子

三十回目のリフティングに失敗し、ボールは地面に着いた。おしかったなと端山真二は笑う。そうしながらも俺と同時にやり始めたリフティングはまだ続いていた。小さく息を吐く。吐いた息と一緒に集中力が切れた。五十回目で彼は止めた。手でボールをキャッチする。

「遼介はもっと次の足を素早く動かしたらいいんじゃないかな」

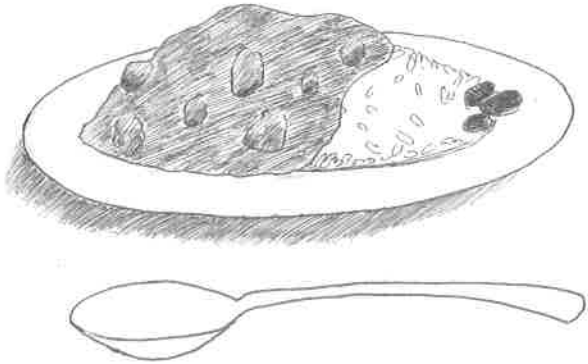
そう言って彼はリフティングをしてみせる。俺のように危なっかしい動きではない。やってみろと言わんばかりに彼が向き直る。

サッカーは好きだ。そうでなければサッカー部など入っていないし、今こうやって練習もしていない。けれど真二ほど熱心に打ち込むことはできなかった。

俺は足元のボールを拾い、リフティングを試みるも今度は二回で落としてしまった。動作が鈍くなっているのがよくわかった。

「今日はそろそろやめようか」

肌を刺す冷気。口の中が乾き、唇から微かに血の味がした。手がかじかんで動かない。空が徐々に赤から紫へと変わっていく。日曜日の公園には俺たち以外誰もいない。閑静な住宅地の外れにあるこの場所はいつもどこか寂しげだった。一本道路を挟んだところに子供用の遊具を備えた公園があるが、この時間には人気がない。どこもかしこも静まりかえっている。普段はそんなこと気に



ならないのに、今日は自分の鼓動すら耳につく。

「じゃあな」

俺たちは公園の外で別れた。俺は家路を急ぐ。悠長に歩いていたい気分ではなかった。

いつだって些細なことで彼との差を自覚する。とても悔しくて、しんどい。息が詰まる。

断続的に口から零れる息は一瞬白くなり、すぐに暗闇に紛れる。額が汗ばむ。足音が自分自身を急き立てる。

夢の中のようだと思う。視界は曖昧で体もだるい。自分のものではないような感覚。息が切れる。

坂の下で一度呼吸を整え、上っていく。坂を駆け上がる体力は残っていなかった。玄関を前に大きく息をつく。

「ただいま」

家では母さんが夕飯の準備をしていた。父さんはまだ帰っていない。今日は中学時代の同窓会があるらしい。父さんがいないなら適当でいいわねと言い、今晩はカレーになった。匂いを嗅いだとたんに腹がすいてくる。

「あんたも本当にサッカー好きよね」

おかえりと言った後、台所で鍋をかき回しながら母さんは口を開いた。どことなく呆れているような口調。とっさに俺なんかより真二の方がサッカーのことずっと

真剣だと言いたくなった。
「こんな寒い日に外で自主練習なんて、母さんには絶対できないわ」
俺は眉を顰める。母さんの言葉に腹がたつわけじゃない。この後に続くだろう人物と比べられるのが嫌なのだ。
「兄さんみたいにバスケすればよかったのに。そしたら練習も室内よ」
兄さんについて話すときの母さんの声は弾む。それに対して俺はぶっきらぼうになる。単調に言葉を返した。
「体育館だって十分寒いよ」
あの場所がいかに寒いかは朝会などで経験済みだった。つまらなそうに母さんはそうとだけ答える。
兄さんは今日も高校でバスケだ。進路の決まった受験生は一月でもはつらつとしていた。

兄さんは小学校の頃からバスケ一筋だった。四年生から入ることができる小学校のバスケチームに入り、毎日毎日昼休みや放課後練習をしていた。
兄さんと俺は五歳差で、俺はよく体育館に見に行っていた。キャプテンをする兄は俺の自慢だった。俺も四年生になったら彼のようにバスケをするのだと決めていた。
俺は兄さんにバスケを教えてもらった。ドリブルやシュート、パスのやり方。決してうまくいかなかったが、それでも楽しかった。だから当時はそれでよかった。兄さんと同じ年になれば自然にできるようになると思ったのだ。
サッカーに出会ったのは三年生だった。クラス替えで初めて同じクラスになった真二と急速に親しくなりサッカーを紹介された。真二には兄が二人いて、一番上の兄がサッカー好きだったのだ。俺たちはクラスの友人も含めて昼休みにサッカーばかりするようになった。
その頃から兄に対しては憧れ以外の感情も抱くようになった。兄はすごい人だ。言われなくても勉強するし、頭もいい。中学の部活でもキャプテンをしていて進学先も自分で決めた。バスケの強い高校へ行くのだと彼は笑った。行きたいところへ行ける力。何より揺るぎない目標を持つ彼が眩しくて、重かった。
兄のようにはなれないといつしか思い始めた。兄の一部であるかのようなバスケットボールというスポーツには近寄りがたくなってしまった。俺は真二と打ち解けるのと同じくらいの速さで新しく出会ったスポーツに傾倒していった。もし真二が野球をしようと言えば、今の俺

は野球部だったのかもしれない。バスケ以外ならなんだってよかった。余計なことを考えずに楽しめると思った。

「遼介、何部に入るか決めた？」

昨年の春の中学の入学式の帰り、真二が笑った。中学校の周りに植えられた桜が花びらを散らしていた。肩に付いたそれを俺は払った。

「もちろん。真二は？」

目がうんと細められる。嬉しくって仕方がないというように。

「サッカー部だよ。当たり前だろ」

俺たちの通っていた小学校には四年生から参加できるバスケ部の他に、五年生から加わることのできるサッカー部があった。俺たちはそれに入っていた。地域にはもっと本格的なサッカー部があったのかもしれない。学校主催のそれは平日しか活動がなかった。それでも長い休みのときにはたまに練習や試合があったから、それに備えて真二と俺はすっかりサッカー漬けになってしまっていた。

「遼介もだろ」

他意のない言葉。一瞬返事に詰まる。何故かひっかかる。声の調子も脈絡も嫌な要素は何一つないというのに。

どうしたと真二が首を傾げた。それから前に向き直る。

「楽しみだな」

「ああ」

春の日差しはまだ柔らかいはずなのに、俺は目を眇めた。

「兄さん遅いね」

食卓の席について母さんに声をかける。携帯に「メールあり」の表示。兄さんからだった。

「夕飯、外で食べるって」

カレーをよそっていた母さんはわずかに眉を寄せた。

「また遅いのね」

今年の春から兄さんは大学へ通うために家を出る。学生寮があるらしい。兄さんは大学もバスケで決めた。向こうからお呼びがかかったのだ。

「春からはどうなるのかしら」

独り言に近い呟き。母さんと目が合う。彼女はため息をつき、席に腰を下ろす。

「だって父さんは帰り遅いし、兄さんは家にいないわ。あんただってクラブでなかなか帰って来ないしね」

出されたカレーに手をつけないまま、言葉の続きを待つ。母さんの言わんとすることがわからない。
「変わっていくのね」
しょうがないわねと言って母さんは自分の分のカレーをよそいに台所へと向かって行った。その見慣れた姿が急に小さくなったように感じた。

ホイッスルの音が響く。失速し、立ち止まる。夏の日差しは容赦なく俺たちを照りつけた。熱された大地。汗が頬を伝い、滴り落ちる。拭う手の甲には土が付いていた。唾を呑み、唇を噛む。また点を入れられた。キーパーがゴールの真ん中で俯く。ユニフォームは土まみれになっている。それでも相手を阻止できなかった。俺も同じだ。守りきれなかった。
一対二。試合の終了時間はすぐそこまで迫っている。
「まだまだだ」
背中に衝撃。俺を叩いて横を走りぬける真二はまだ体力が残っているのか笑みさえ浮かべている。汗をもう一度拭い、顔を上げる。眩しいと思った。目が熱くなる。理由はわからない。ただ彼を追って走る。キックオフ。蹴りだされたボールは真二に渡り、勢いよく相手ゴールに向かって転がっていく。真二は止めようとする相手チームの選手を巧みにかわす。決められた道に沿うように彼はゴールへと近づき、シュートを放つ。

母さんの苛立ちを含んだ叫びで皿の中にスプーンを落とすところだった。最後の一口をほおばる。美味しいと思っているが、口にだしたことはない。そんな恥ずかしいこと俺にはできそうもなかった。
居間のテレビ画面には観衆で埋め尽くされたリンクが映っていた。広い氷の上に一人だけ滑っている。青い衣装に身を包んだ女性がジャンプするも、着地に失敗していた。慰めるような解説者のコメント。
「踏切が早かったですね。練習では成功していたのですが」
母さんが演技を睨む。
「何でここでこけるのかしら」
練習でうまくいったからといって本番で必ずしも成功するわけじゃないことなんて、誰にだってすぐわかりそうなものだ。けれど視聴者は完璧な発表を期待していて、それが破られると理不尽に怒る。彼女の何を知ってるってわけじゃないけど、たまったものじゃないと思う。フィギュアスケートの選手は一日七時間とか十時間とか氷の上で練習しているらしい。それだけじゃなくて

柔軟とか踊りとか色々勉強しなくちゃうまくなれない。

「お金かかるのよね」

以前母さんはそう言っていた。彼女はフィギュアスケートを見るのが好きなのだ。好きだからこそ期待し、怒り、文句も言うのだろう。

「緊張するんだろうな」

何万人もの人が一斉に自分を凝視する。そんな中に俺なら立ちたいと思わない。人々の諸々の気持ちまで背負うのは怖い。

青い服の女性はポーズを決めた。拍手がおこり、彼女は礼をする。顔のアップが映る。黒目がちな目が潤んでいた。点数が出る。その瞬間、彼女は微かに引き結んだ唇を震わした。

次が最後だった。青い服の女性より若い。解説者が十五歳、期待の新星と嬉々として語る。細い体。白い服に付けられたスパンコールがきらきらと輝く。音楽が始まる。滑らかな移動。軽々とジャンプをこなし、着地も全然ぐらつかない。あっという間に彼女の演技が終わる。

才能というものがある。俺は頬杖をついて歓声にこたえる選手を見た。零れる笑顔は達成感を湛えている。虚しくならないのかと疑問を感じた。同じだけ仮に練習したとしても、この選手とこの選手の前に滑った選手は同じだけの演技はできない。それはそういうものなのだ。わかっている。わかっているのだけれど。それでも苦しくはならないのだろうか。そんなこと気にしないのかもしれない。自分のことに精一杯で他人の才能が羨ましいとは思わないのだろうか。

羨ましいとは少し違う。憧れというか、もっと体の内側から溢れてくる気持ち。いてもたってもいられなくて、走り出したくなるような感覚。

「フィギュアスケート見てるんだ」

振り返ると兄がいた。ただいまと彼は笑う。いつだって機嫌がいい。苛々している兄なんて見たことないし、想像できない。鼻の頭と頬、耳が赤い。

「外寒かった？」

何だかおかしくって笑ってしまう。俺は鼻の頭を指差して尋ねる。彼の白い歯が零れた。

「寒かったよ」

照れ隠しなのか乱暴に鼻をこする。

「今日カレー？」

「そうだよ」

外で食べてくるんじゃなかったと彼は眉を八の字にする。

「母さんのカレーおいしいから」

スプーンが指から滑り落ちた。

暗くなると少しは涼しい気がした。空はぼやけている。走り回ったせいで体が重い。

「同点でも、負けるよりは断然いいよな」

相変わらず疲れなど微塵も見せず真二は話す。対戦校から中学校まで一度戻り、ミーティングの後は解散となった。いつも二人で練習する公園の木々から蝉の声が聞こえてきて、熱さを際立たせる。

「そりゃあ」

自分でも自分が不機嫌な理由がわからない。疲れたからだとは思う。きっと得点にからめずいいとこなしだったのが、ショックだったのだ。下らない。チームの成績を喜べたらいいのに。俺は自分のことでいっぱいだ。

「疲れてる?」

気遣わしげな声に言葉を失う。心配させる自分がふがいなくなって嫌になる。首を横に振った。

「大丈夫! でも今日は何かばてた」

真二は声をあげて笑った。どことなく真二も体が重そうだった。

「今日はよく粘ったよな、俺たち!」

お前のおかげだ。真二がいなかったら諦めてたかもしれない。そう言えない。ただ笑ってそうだよなと返事した。真二の言葉は違うのだとも思いながら。

「何かあったのか?」

風呂あがりに居間で俺はニュース番組のスポーツコーナーでのフィギュアを見ていた。青い衣装の女性がこけるシーンの後に「期待の新星」の演技が放映される。

「何で?」

テレビに視線を注いだまま、質問を返す。兄さんは少し苦笑し、大きな温かい手で俺の頭を撫でる。

「元気ないみたいに見える。真二君と何かあったのか」

俺が答えに窮すると再び乱暴に髪をかき回された。湯冷めするなよと笑って兄さんは風呂へ行ってしまう。決して深入りしてくるのではなく、かといって無関心でもない。ちょうど心地いい距離をとって俺から話すのを待ってくれる。兄さんの傍はいつだって居心地がいいけど、それに甘んじるのはいけない気がしていた。彼に頼らなくたって、俺は俺のことをきちんとできるはずだと。

「兄さんはどうしてそうなんだろ」

要領を得ない問い。歯噛みする。本当に聞きたいことがうまく言葉にならない。気持ちを表現するのは本当に難しい。自分の中でもまとまらないときは特に。

浴室を前にして俺は中の兄さんに呼びかける。鼻歌が止まる。
「どういう意味だよ」
明るい声が浴室内から響いてくる。寒い洗面台の前で手持ち無沙汰に指をこすった。
「いつも楽しそうだと思って。嫌な事ないの？」
「考えないようにはしてる」
意外だった。呆気にとられて返事を忘れた。兄さんはなおも続ける。
「だって考えてもしょうがないし。気の持ちようだとも思う。楽しもうとすれば楽しくなる気がするから」
一通り答え、何で？　と聞き返される。
「別に。聞いてみたかっただけ」
彼がそれ以上訊ねる事はない。この引きのよさがくせものなのだ。話したくさせる。
「兄さんはさ」
彼がどうだというのか。憧れであり、比較対象であり、頼れる兄弟であり、意識せずにはいられないもの。少し息苦しいくらいに。俺は彼のようにはなれない、そんなことはわかっている。だから何だというのだ。
「どうして違うんだろ、俺と」
あわてて兄弟なのにと付け加える。
「そんなに違うかな。食べ物の好みとか、けっこう似てるだろ」
ああとか、うんとか適当に返事をする。論点がずれてる。はっきり聞かなかった俺のせいなのだけれど。
「性格とか」
「性格ねぇ。似てるっちゃぁ似てるし、似てないったら似てないかもな」
彼は自分で言って笑った。はぐらかされている気になってむっとした。きっと兄さんはそんなつもりないのだ。彼はこんな人なのだから。
「母さんのカレーうまいって言った」
口にして、自分で驚く。同時に納得もした。そんな些細な事。好きなものを好きだと臆面もなく言える朗らかさに違いをみせつけられるように思っていたのだ。
「おいしいだろ？」
「おいしいけど、何か言いにくい」
噴出した彼の笑いが響く。言ってしまってすっきりしたような、恥ずかしいような。思春期だなと彼は笑いながらはやしたてる。
「年取れば、変わるさ。たぶん」
変わるのだろうか。今の気持ちはずっとは続かないのだろうか。俺より先に生まれて年を取った兄さんにしか

分かり得ないことなのかもしれない。

俺と真二は一緒に中学校に通っていて、いつも真二の家の近くで待ち合わせしている。月曜は朝から曇り。雨が降るかもしれないからと折りたたみ傘を母さんに渡される。兄さんは言われる前にさっさと自分の鞄に詰め込んでいた。俺の視線に気付き、口元を緩める。

「俺だってよく言われてたよ。お前と同じ歳の頃は」

いってきますと軽く手を振り自転車に跨る。三年間通った高校と別れるのはどんな気持ちなのだろうか。俺のことばかりじゃなくて、兄さんの話も聞いてみたいと思った。

いつもの時間、いつもの場所に真二は居た。

「おはよ」

俺は真二の真剣さが羨ましかった。年の離れた兄に勝てないのも嫌だったが、友だちで同じ歳の真二と差がつく事が我慢ならなかった。負けたくなかった。いつの間にか張り合おうとしていた。彼が眩しかった。同じ時間だけ練習しても、真二と俺には才能の差があるのだとは思いたくなかった。

「俺は俺なんだよな」

わからないというように真二の眉が下がる。

「お前を驚かせるくらいうまくなりたい」

そして強くなりたかった。サッカーだけじゃなくて。

真二が笑った。俺もつられる。

「じゃあ練習しようぜ」

真二が小走りになり、俺の三歩前で止まる。突然くるりと反転して、右手を出した。握手を求めるように。

「俺は遼介とするサッカー好きだからさ」

練習の度、試合の度、直視できないほど眩しく感じるのだろう。顔が緩む。握った手はとても温かかった。

（はらだ　あいこ・文学部四年生）

カット　車谷孝介

掌編小説

クラムボン、飛んだ

魚日記

くそったれ、とぼやきながら自転車を引っ張り出す。誰かが無理やりに押し込んだ自転車が邪魔をして、出そうとしてもハンドルやペダルが次々に引っかかってうんざりする。作戦を変更して仕方なく自転車を停め直し、邪魔モノを一旦引っ張り出す。やっとスムーズに自転車を出せる空間ができ、ともかく自転車を後ろ向きのまま引き出すと、その空間に引っ張り出した誰かの自転車を入れ直す。ええい、朝からうんざりだ。ちくしょう、ちくしょう、と声には出さずに呟きながら、ペダルを踏みしめて会社に向かった。走り出すと寒風が頬に吹き付け、今度は寒さに苛立つ。思い切り走ったら体が暖まるかと、立ちこぎでペダルを踏み込んだ。会社まで自転車で約二十分。着く頃には冬でも背中に汗がにじむ。

ようやく一人暮らしに慣れてきた。お金は予想以上に飛んでいくけれど、一人の気軽さは捨てがたかった。お金が無いことで、嫌でも規則正しい生活習慣が身に付いていく。三度の食事を作り、家計簿を付け、自転車で会社へ行く。飲みに行く回数も減り、夜はさっさと寝る。意地みたいに、てきぱきと生活している。気が付けば誰か他人の生活を借りているような、なじみのない時間と空間に居座っている。時々自分を振り返り、私なんでこんなところにいるんだろう、なんて考えてしまったりするが、だからといって帰りたいと思う場所があるわけでもなかった。最近はそんなことを考えながら、ため息を

つく回数が増えた気がする。プチ鬱っていうのは、こういう感じを言うんだろうか。いいことなんてひとつもないや、と自転車をこぐ無機質な時間中、ぼんやりと考えたりしている。

哀愁のようなものは半年遅れでやってきた。哀愁と呼ぶにはもう少し清々しい気持ちもあるのだが、たぶんそれも含めてこの感情をそう呼ぶのだろう。規則正しい生活の中でふいにそれは私を包み込んだ。

半年前に、離婚した。まだほんの数日前のことのように感じられるのに、あれから季節は二つも過ぎている。五月、ぽかぽかと脳天気な春のことだった。

いつの間にか冬になっていたんだな、と昨日の帰り道に思った。いつもより気温が低く、ハンドルを握る手がかじかみ、もう手袋がいるなと思ったのがきっかけだった。引っ越したときは初夏だったから、手袋をどこに仕舞ったのか忘れてしまい、探すのにひと苦労した。

意識してか無意識にか、一人暮らしをするために借りた部屋は結婚生活を送っていた広めのワンルームとよく似ている。そのせいでこれまで自分を保ってこられたのか、あるいはそのせいで思いがけず哀愁に襲われてしまったのかはわからない。てきぱきと忙しく生活リズムを刻んできた半年間。単にそれに疲れてしまい、体が

「もう休もうよ」と弱音を吐いているのかもしれない。もう休もうよ。そんなに走って一体、どこへ行くって言うのさ。そう言ってブーイングする体が、知らぬ間に自転車をこぐ足をのそのそと重くさせている。ちくしょう、と振り切るように力を込めてペダルを踏みつける。ちくしょう、ちくしょう。何が憎いわけでもないが、心の中でそう呟くと、何とも言えぬ乱暴な爽快感が込み上げてくるのだった。

週末には決まって家の近所にあるバー『7th note』へ向かう。マスターが一人きりで経営している流行らないバーだ。そこで二、三杯ちびちびと飲んで、ほろ酔いになって帰っていく。

マスターの「トモヤン」とはすっかりなじみになった。智哉という名前なのだが、おしゃべりの中で聞いたあだ名を勝手に呼ばせてもらっている。トモヤンは普段は身内が経営している建設会社でサラリーマンをしており、夜になるとバーを開ける。端から見るとなかなか多忙そうなのだが、トモヤンは「もう慣れたし、バーは半分趣味だから」と平気な顔をしている。

『7th note』は週末でも一時前になるとたいていお客は私一人になり、トモヤンと二人でおしゃべりをする。二人になったとたん、トモヤンはお仕事モードから愚痴モードに変わり、お互いいろんなことについての愚痴合戦をする。たいていがここで話してしまえばそれだけで発散できてしまいそうな、他愛ない愚痴に思えた。けれどトモヤンはいかにも深刻そうに、「どっか行きたいよねぇ」と言う。

「俺こんなとこで何やってんだろう。ほんとはこんなはずじゃなかったんだけどさ。かと言ってどうなるはずだったかも想像できないんだよねぇ。結局現状が嫌でエスケープしたいだけなのかなぁ」

そう言って間延びした声でビールをくいと呷る。何だか私のことを代弁されているような気がした。

「そう、それなんだよねぇ。どこかに逃げたいのにさ、どこに行きたいのかわかんないんだよ」

「逃げたいの？　行きたいの？」

「わかんない、逃げたいのかな」

「だったらどこでもいいんじゃない」

「だって逃げた先がもっと悪かったら嫌じゃない」

「贅沢な奴」トモヤンがちょっと笑う。それから何となく沈黙になって、二人、しばしそれぞれの思いに耽った。

愚痴の内容はだいたいいつも同じだった。三年前、奥さんに恋人ができて逃げられてしまったトモヤンは、「女なんて誰も信用できない」と言う。合言葉のように

そればかりぼやくくせに、それでも早く彼女が欲しいなんて言うから、それって矛盾よねと私は呆れる。離婚して一人暮らしを始めた私は、「誰かの生活を借りているみたい」とため息をつく。ふやけた毎日の海を、ふらふらと泳いでいる気分。どこかへ行きたいのに、どこ行く宛もなく、気が付けば自転車で会社に向かうだけの毎日だった。

「プチ鬱になっちゃってるよ、私」

私が酒臭いため息を吐くと、トモヤンは根拠もなく「大丈夫だって」と軽い調子で返す。「自覚症状があるうちはさ」トモヤンはいつの間にか愚痴合戦に飽きてグラスをきゅっきゅと拭いていた。

年末になり、会社も正月休みに入った。一週間ほどある休みのほとんどを実家で過ごすことにした。

電車を降りると、駅まで車で迎えに来てくれたのは姉だった。

「帰っとったん」

田舎に帰った途端、当時の言葉に戻ってしまうから不思議だ。

「うん。私も仕事、辞めたしな」

姉は来年結婚する。そのために年末で看護師の仕事を辞め、来年からは夫になる人が経営している化粧品会社を手伝うことになったのだ。

久々の実家だが、当時とほとんど変わっていない。唯一、買ったばかりらしい台所の食洗機が、古びた家の中できらきらと居心地悪そうに縮こまっていた。

自分の部屋だったところはとうに物置にされてしまっているが、それでも部分部分に名残がある。高校までここで過ごした。何か掘り出し物でもないかと押入れをあさっていたら、古い本が積み上がっていた。好きだった横溝正史のシリーズがその大半を占めている。引っ掻き回していると、懐かしいものが出てきた。小学校の国語の教科書だ。そういえば、国語教師をしていた父に取っておいてくれと頼まれ、捨てられなかったのだった。手に取ってみるとざらざらと埃っぽい。暗くてわからないが、光が差していたら私は大量の埃にまみれていることに気付くのだろう。ぱらぱらとめくってみた。すぐにそのページが目に付き、思わずにやりとする。「やまなし」という宮沢賢治の童話があるのだが、幼い頃によく姉と二人でそれを読んで笑ったものだった。というのは、その童話に「クラムボン」というのが出てくるのだが、それが一体何なのかが一切書かれていない。話の中で、子がにの兄弟が川面を見上げ、クラムボンは笑ったよ、と

か、クラムボンは死んだよ、とか言っておしゃべりしているシーンがある。クラムボンって何やろね、と姉と二人空想を膨らませて、どっちが面白い答えを言えるか競ったりした。以来「やまなし」は私と姉が最も好きな童話だ。そんな経験が大学の卒論にまで影響し、「クラムボンとは何か」について研究を重ねたりした。

足音がして、姉が部屋の扉から覗いた。

「母さんが、アップルパイ買ってきたって」

「うん、行く」

顔を上げた私が持っているものに姉も気付いたのか、後ろから覗き込む。途端に笑う。

「懐かしいなぁ。クラムボンか」

あはは、と姉は笑いながらも懐かしんだ。私も笑い返しながら、姉と二人教科書に目を落とす。

「何なんやろね、クラムボンって。結局一度も納得のいく答えに出会えたこと、なかったなぁ」

卒論でも、結局答えは出なかった。宮沢賢治本人さえそれが何なのか決めていない、答えを与えないことで物語を神秘的にする目的だった、という答えを無理やり搾り出したら、年老いた教授は「君、これが卒論かいな」と渋い顔をしていたっけ。

笑ったり死んだりするもの。答えのわからないもの。なぜだろう、クラムボンの話をするとき、どうしようもない懐かしさとわずかな罪悪感が込み上げる。そして失くしてしまった何かを思い出しそうな気がするのだった。

年明け早々、会社の年始会が行われた。今年はホテルの宴会場を借り、豪勢にもディナーまでついた年始会だった。ランダムに決められた席に着くと、隣は親しい営業の桑野だった。互いにホッとしてしばしおしゃべりがはずんだ。

「そういえば美和ちゃん、藤山の結婚祝いの飲み会、行ったの？　俺忘年会と重なって行けなくてさ、どんな感じだったのかなと思って」

藤山というのは私と同じフロアの同僚だった。結婚するとは聞いていたが、結婚祝いをすることも知らされていなかった。聞けば私と親しい同僚たちが皆で企画した飲み会だったらしい。私にだけ声が掛かっていなかったことを知り、ショックを隠せなかった。「私、誘われてないや」と笑ってみせたが、桑野は少し気まずそうにごまかした。

「離婚したからかなぁ」

いつもの愚痴合戦の中で、トモヤンにからむ。年始会

でしこたま飲んだ後だったから、その日はいつもより酔っ払って悲観的になっていた。
「ねぇねぇ聞いてる？　何とか言ってよ、普通なぐさめるんじゃないのぉ、こういうとき」
「聞いてるよ。もう、馬鹿だな、そんなに重要なの？　そんなことが」
「重要とかそういう問題じゃないっしょ、いくら離婚してても声ぐらいかけてほしいよねぇ。心配しなくても断ってあげるのに」
「また卑屈になって。やっぱプチ鬱だな、お前」
「プチじゃないよ、完全、鬱だよ」
　ひゃひゃひゃ、と奇声を上げるように笑う。うっとうしい客め、とトモヤンがこっそり勘定を書き換える。
「ねぇ、旅に出ようよ」
「旅ぃ？」
「そう。前にトモヤンが言ってたじゃん。エスケープしたいって」
「言ったけどさ、そんな勇気ないもん」
「だからぁ、エスケープの予行演習だよ。とりあえず練習に、行けるとこまで行ってみようよ」
「ちょっと待って、予行演習って、なんかかっこ悪くない？」
「かっこいいも悪いもないよ、ただの旅だと思えばいいんだよ」
「そうかなぁ、そんなもんかなぁ」
「決まり！　来週の土日ね。お店閉めてよね、旅館の予約とかは私が取っとくから」
「ええ、勝手だなぁ」
　行き当たりばったりで旅行を企画したものの、その思い付きはひどく私を興奮させた。強引に約束を取り付けると、トモヤンの気が変わらないうちに店を出た。

　翌週の金曜、いつものように店を訪ねて予約が取れたことを告げた。待ち合わせ時間と場所を伝えた後、行き先は、と言いかけると、待った！　とトモヤン。
「行き先は内緒にして、着くまで言わないで」
　変な奴、と思いつつも、オッケー、といたずらでも企むような気持ちで頷いた。
　海に行きたかった。最後に行った海は、会社の同僚たちと行った鳥取砂丘だった。特別印象深かったわけでもないが、そこしか思い付かなかった。

　待ち合わせの駅に行くと、トモヤンは先に来て待っていた。遅いよ、とふてくされているところを見ると、案

外トモヤンの方が楽しみにしていたらしかった。
鳥取まで約三時間。電車でゆるゆると行く。道中、初めのうち感じていたわくわく感はしだいに退屈に変わり、コーヒーとサイダーを交互に飲みすぎておなかの中がたぷたぷになっていた。
ようやく着いたが、電車を降りたトモヤンは無感動だった。「砂丘って、行ったことある？　すごい景色よねぇ、まず砂丘に行くでしょ」と私がはしゃいで見せると、うるさいなぁお前、と素っ気ない。何よ、つまんないの。せめて最初ぐらいトーンを合わせてくれればいいのに、とふてくされつつも、まず旅館で荷物を預け、それからバスに乗って砂丘へ向かうことにした。
砂丘には二度来たことがあったが、そのたび無防備な目に広大な景色が飛び込んできて圧倒された。雨上がりの砂丘は肌寒く、想像よりも灰色じみていたが、思いがけず見えた虹が希望の象徴のようにきらきらと笑っていた。それまで無表情だったトモヤンが、途端に子供のような笑顔になって「これこれ、こういうのを待ってたんだよな」とよくわからないことを言いながら駆け出していった。私は時々つまずきながらそれを追いかけ、一緒にはしゃいだ。「なんか失楽園みたい。もしくは逃亡して追われた世界の果てみたい」と言うと、「もっといい表現ないのかよ」とトモヤンが顔をしかめる。
砂の山に登り、我が子を見るように愛しい気持ちで海を眺めた。水の音がそうさせたのか、なぜかそのとき、ふとクラムボンを思い出した。
トモヤンにクラムボンの話をしてみた。
「何だろうね、クラムボンって」
笑ったり死んだりするもの。正体不明の生き物。
「それって俺じゃん」
面倒くさそうに聞いていたトモヤンが、ふと思い付いて海を見たまま言う。
「正体不明ってさ、つまりそいつ自身の意思がどこにあるのかわかんないってことでしょ。俺と一緒」
不思議、文学者でも何でもないトモヤンの言葉だけが頭にすっとなじんでくる。呆気なく答えを与えられたような気がした。
「じゃあ、私もだ。私も、クラムボン」

旅館に戻ると、予定より遅くなった夕飯をとった。それから旅館自慢の露天風呂に浸かって上がってくると、布団が二式、ぴったりとくっつけて敷かれていた。そのときになってやっと、ああ、そういえば、男の人と二人きりで旅をしていたんだ、ということを思い出した。急

にどぎまぎして、トモヤンがトイレに行っている隙にこっそりと布団を離した。

暗闇の中、互いに眠ったふりをする。薄明かりの下でこっそりとトモヤンを窺うと、ごろりとあっちに寝返りを打ってしまった。誰なんだこの人は。なんで私こんなところにいるんだろう。暗がりの中一層濃くなったトモヤンの黒髪の闇を眺めながら、ぼんやりと思った。トモヤンはトモヤンで、隣のこの女は誰なんだ、と同じことを思っているのかもしれない。

襲ってきたりするかと思ったら、大きな鼾が響き始めた。何だよ、とちょっと安心しながらもふてくされる。別に、したいわけじゃないけどさ。でも二六歳ってまだ若いし、そんなに悪くない顔だと思ってるし、充分そういう対象にはなるんじゃないのぉ？　ちょっと自信なくすじゃんか。「ちょっとは頑張れよな、こんなに魅力的なんだぞ。ばか、知らない、おやすみ、三十六歳！」最後の方は苛立ちまじりに小声に出したけど、どうせわかるもんかと思い切りがさごそと寝返りを打って、トモヤンに背を向ける。

「おやすみ、二六歳」

布団の向こうから声がして、驚いて振り返る。一瞬遅れて、私たちは声を上げてげらげらと笑った。

次の日の朝、目が覚めて体を起こすと、どっと疲れていることに気が付いた。明日からまた仕事だと思うと余計に疲れた。けれど気分はどことなく爽快。いつもの退屈で平凡な私の部屋ではないというだけで、贅沢な気分だった。

チェックアウトの後、トイレに行ったトモヤンを待つ間、売店でお土産を眺めた。会社に一箱買っていこうかとお菓子の箱を手に取って眺めていたら、トモヤンが戻ってきた。

「買うなよ、お土産なんか」

となぜか頬を膨らませる。

「なんで？」

「何のための旅だと思ってるんだ、エスケープの予行演習なんだぞ。ただの旅行と一緒にするな」

トモヤンは私の言い出した企画だということを忘れているのか、真剣に旅について語る。

「ここは鳥取じゃない、どっか聞いたこともない外国なんだ。現実を持ち込まないでくれ」

売店のおばさんがトモヤンがそうして真剣に説教するのを見てぽかんとしていたから、恥ずかしくなった。お菓子の箱を戻して、逃げるように旅館を去った。

缶コーヒーを啜りながら駅に向かうバスを待った。体

は予想以上に疲れており、できれば早く帰りたかった。
「あと一ケ所ぐらい観光に行く？　早めに帰るでしょ？　お昼はどっか途中で寄ろうか」
　私が言うと、トモヤンは真顔のまま首を振った。
「ごめん、悪いけど先に帰ってくれる？」
「え？」
「俺、もう一回、海見て帰るから」
「だったら一緒に」
「いや、一人がいいんだ」
「せっかくここまで一緒に来たのに一人で帰れっていうの？」
「だから悪いって言ってるだろ。頼むよ」
　トモヤンの勝手な思い付きに腹を立てながらも、わかったよ、と折れた。私はさっさとカバンを持ち上げると、やってきたバスに一人乗り込んだ。車窓からトモヤンを振り返ると、トモヤンはまるで初めから一人旅をしていたかのように、さっさと背を向けて歩き出していた。
　一人の帰り道、次第に腹立ちは消え、帰り道こそが旅のように思えた。一人きりの長い道のりは、会社に向かって自転車で走っているあの無機質な時間と何も変わらない。自転車をこいで行けるところは限られていて、どれだけ走っても「どっか聞いたこともない外国」には辿り着けそうもない。
　次の週末、いつものようにバーへ行くと、すぐに店の中が暗いのに気付いた。訝しく思ってドアを見たら「都合により無期限休業」とぶっきらぼうに書かれた貼り紙がぺらぺらと風に晒されていた。
　貼り紙を掴み取るようにして乱暴に剥がし、ヒントを探すようにそのたった一行を読み返すうち、ふつふつとトモヤンがいなくなったことを実感していった。驚きと呆れに混じって、冷静にその事実を受け入れている私がいた。ああ、こいつ、やったんだ。とうとうやったんだ。私は一人、この街に取り残されてしまった。それともトモヤンの方が、脱線してしまったのだろうか。やりきれない焦燥感にかられ、ちくしょう！　と歯軋りする。私も行かなくちゃ、という焦りが込み上げるのに、どこへ行っていいのか見当もつかなかった。ちくしょう、ちくしょう。くしゃくしゃっと紙を丸め、ドアに投げつけた。ガラスに映ったプチ鬱女の影を見ながら、なぜだかトモヤンの、闇みたいに濃い黒髪を思い出していた。

（終）

（さかなにっき　筆名・卒業生）

カット　松尾一誠

連載

自転車のはなし（五）

丸瀬康裕

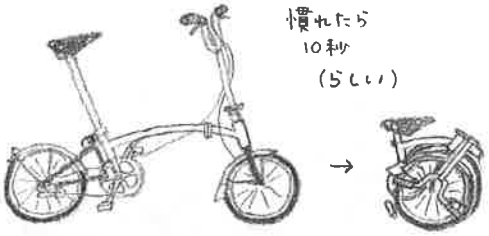
八　折りたたみ自転車

自転車を小さくする

自転車を愛好するようになると家の中にいつのまにか自転車が増えているから不思議である。趣味で集める人の多い切手やカメラなどとちがってこれは少々場所をとるのでやっかいである。駐輪場や、どこか庭の隅にでも置いておけばいいではないかと言われるだろうが、自転車好きは外には置かないものである。玄関やベッドの横に置いたり、天井から吊るしたりしているうちに人間の居場所がどんどん狭くなっていく。

自転車はクルマやモーターサイクルに較べるとささやかな存在だが部屋に置いてみるとさすがに嵩がたかいのである。それで乗らないときには小さくなってくれたらどんなにいいだろうということで折りたたみ自転車というものが世の中にある。置き場所をとらず、そしてクルマのトランクなどに積んで簡単に運べるから便利だ。今この原稿を書いている私の机の下に小さくなっているのもそれである。

このタイプにはいろいろな折りたたみギミックがあるのだが、私のものは後輪が前方にひっくり返って、一本ステーが中央で折れ曲がり、ハンドルもポキリと下へ倒れるようになっている。この自転車の考案者がホームページで折りたたみと展開を実演している。走ってきて



止まり、畳んで片手で持ち上げて一振り二振りしてみせたあと、すぐまた組み立ててすぃーっと走りさっていく。じつにまたたくうちに小さくなり大きくなる。これを見て私の心は揺れたのである。

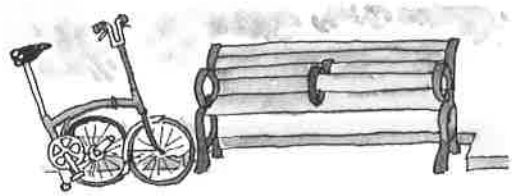
電車に自転車をのせる

輪行という言葉をご存知であろうか。自転車からタイヤなどをとりはずし袋に入れて電車やバスなどに乗せて旅やサイクリングなどに出かけることを言う。家の近くの危険な国道などを回避していきなり景色のよい快適な田舎道を走れるのはとてもステキなことである。

以前、私はロードバイクで輪行しようと思い自転車を入れる専用の袋を購入したことがある。そして出発する前にいちど練習しておくのが賢明であろうと考えた。前後のタイヤをはずしてなにやらパーツ保護の器具を取り付けしかるべき場所と方向にフレームやタイヤを配置して袋をかぶせて担ぎ紐を装着するまでに私は二時間近くかかった。夏の昼下りであった。私は汗だくになり情けなくて涙まで出てきた。この作業を駅前で行い、到着駅で逆のことをやり、さらに帰途に同じことをするのである。おまけに恐竜の骨でも入っているみたいにごつごつした巨大な輪行袋は担ぎにくく、自転車は軽いはずなのにじつに重いのである。おおいに意気消沈した私は輪行を諦めることにしていたのである。

かくて新しい折りたたみ自転車を手に入れた私は、秋の晴れた日、最寄りの京阪香里園駅まで行った。改札のある二階へあがるためエレベーターの前に停車し折りたたもうとすると、駅前に自転車を放置させないように目をひからせている腕章をつけたおじさんが飛んできて、ここはあかん、ここに置いたらあかんと言う。大丈夫畳

んで電車に乗せますからと私はホームページで見たとおりの折りたたみ作業をおじさんの前でおたおたしながらして見せるのである。えらちいさなりまんねんなあ、ちょっとよろしかと興味津々の顔で言うので持たせてあげる。そんなに軽くはないんですけど、ほらこうしてカヴァーを被せると小ぶりのトランクみたいでしょう。そ



の後この場所に来るたびに別の人が係りになっていて、また同じようなやりとりをくりかえすのである。

淀屋橋

ＪＲに乗り換えてどこかの片田舎へ向かうのではなく、今日の行き先は淀屋橋、大阪市のど真ん中である。ここを出発点にして市内をぶらぶら散歩しようというつもりである。組み立ててしまえば小径車であるから、もちろんロードバイクのようなスピードは出ない。ただ可愛らしい外観をしているわりには意外とよく走る。ロンドンではこの自転車が通勤の足としてたくさん走っていると聞く。しかし、ヘルメットを装着してぴたぴたのレーシングパンツを履いて乗るような自転車ではない。デザートブーツにアーガイル柄のセーター、それにハンチングなどがお似合いというところである。ようするに普段着でよいのである。

地下の駅から地上に出てみれば、ちょうど昼休み時間らしく、スーツ姿の勤め人たちがランチに出かけようとかなりの人通りである。黒いビニールカヴァーを取りはらい自転車の組み立てをはじめると声はかからないものの少なからざる好奇のまなざしが向かってくる。これは手際のいいところを見せなければならないと思えばよけ

いに焦ってここでもおたおたする。それでもまたがってペダルを漕ぎはじめるまでの全工程に私のような手際のわるい新米でも二分とかからないのはやはり設計がすぐれているのである。

このような自転車であるから御堂筋は歩道をゆるゆる走行することにして、適当に停まってはぎんなんの降り落ちる銀杏の並木にカメラを向けてみる。ロードバイクに乗るときも私はカメラを持参するのであるが、それはここまで、こんなところまで走ってきましたという証拠写真をとるという感覚である。それには薄く小さなデジタルカメラが適当である。今日のような自転車なら、レンジファインダーの銀塩カメラなどを首から提げているのが気分である。気が向けばペダルをとめて、光の行方をゆっくり追ってシャッターを押す。

詩的な自転車

走る走る。風になって走る。信号のない道を、人やクルマのいない道をどこまでも走りたい。それがロードバイクである。もたもたするクルマを抜き去り、町を抜け、山を越え、そして岬の向こうに新しい発見が待っているのだ。

一方、折りたたみ小径車でたとえば河川敷の信号もクルマもないサイクリングロードを走るとする。ロードバイクの時とちがってそのうちいつまでも風景が変わらないことに飽いてくる。土手を降りて街中の道へ入っていく。道路事情ははるかに劣るが、角を曲がるごとになにかしらわくわくするものがある。町や通りや家の佇まい、その名称、匂いや息づかい、そして人々の生活が肌に感じられる。

目的の場所まで移動すればそれで終わりという歩行を、意味と指示機能にのみ徹した「散文」であるとすれば、どこへ行くかではなく移動の過程そのものに美しさや愉悦を見出すことを目的とする舞踏は「詩」であるとした、あまりによく知られたマラルメの定義にならって言うならば、小径車はすぐれてポエチックな乗り物であるといえる。路地や裏通りを得意分野とするこの自転車は人を路上の詩人にしてくれる。

大阪探検

仕事人たちはそろそろ昼の休憩が終わりやがてビルの中に消えていく。私は、さて、これからどこへ行こう。備後町四丁目の角を曲がってみるとする。北御堂を左手にこのまま進めばすぐに靭公園だ。公園と呼べるほどのものがない大阪中心部にあってほぼ唯一のりっぱな公園

である。落ち葉を鳴らして入ってみれば、木立のあいだを、犬と散歩する人、幼児を遊ばせている母親、ベンチに掛けて本を読んでいる若者、テニスに興じる老人など、のどかな時間がしずかに流れている。このあたりには公園を囲むようにカフェやレストランがあちこちに点在する。私もすこし遅いランチにしよう。

そのあと靭公園を西に抜けて、新なにわ筋を横断し、木津川を渡る。そのまま道なりに進むと九条駅近くに小さな映画館がある。これまでは地下鉄を乗り継がねばならない、私にしてみれば遠く便利のわるい場所であったが、自転車で走ってみればなんのことはない、土佐堀川を下ってすぐのところではないか。

商店の途切れた角、ふと視線の先に巨大な宇宙船のような建物が見える。京セラドームである。ここからふたたび木津川を東に渡り道頓堀川に沿って進む。汐見橋、幸橋、住吉橋を過ぎて北へ進路をかえれば、堀江の町である。飽和した心斎橋周辺の賑わいの波がここ数年地味な家具の町であったこのあたりに押し寄せてきている。群れ歩く若者たちの熱気が私には少々居心地わるく、ここは素通りして四ツ橋筋に出てまっすぐ北上する。肥後橋を渡り、毎日新聞社跡地に立つ大きな書店に入る。

しばし立ち読みをして出てみれば、街明かりが夕闇を照らしている。すでに帰宅ラッシュがはじまる時刻である。自転車をたたみ人ごみとともに車中の人となるか、このまま風をうけてのんびり気ままな道を行くか。家までは淀川に沿っておよそ二〇キロそこそこ。この自転車にとって長い距離ではない。そもそも私に早く帰らなければならない理由など何もないのである。

九　映画の中の自転車（二）
続・自転車に乗る男たち

『明日に向かって撃て』

二人で自転車に乗るという風景がある。二人用に作られているタンデム自転車のことではない。高校生などが学校帰りによくやっている、見つかるとおまわりさんからお叱りをうけるあの二人乗りである。後ろの荷台にお尻を乗せるか、荷台のない場合は後輪を跨いで車軸の

でっぱりに両足を乗せて立ち、前で漕いでいる人の肩あたりに手をかけて走るのである。いずれにせよ好ましい走行条件ではないが、ふらふらよろよろを気の合った者同士が分かち合いお喋りしながらのんびりと走るのは愉しいものである。恋人同士ならなおさらであろう。

ダービーハットにベストといういでたちの男の漕ぐ自転車のハンドルに、前の開くゆったりとした部屋着をルーズに身にまとった女が器用に腰掛けて、牧場をゆっくりと走っていくというシーンが、六〇年代の西部劇『明日に向かって撃て』（一九六九）にある。一九世紀終わりごろに実在した二人の銀行強盗ブッチ・キャシディとサンダンス・キッドを描くアメリカン・ニューシネマのひとつである。西部劇といえばテンガロンハットに馬と拳銃という土臭い映画のところを適度に脱力させるジョージ・ロイ・ヒル監督の新演出で、くだんの場面にはバート・バカラックの主題歌が背景に流される。当時発明されてまもない自転車を「未来の馬さ」と言ってポール・ニューマンがキャサリン・ロスを誘う。緑色の風景の中をやわらかな逆光を浴びて、自転車にまたがる笑顔の二人の姿がロマンチックに描写される印象的なシーンであった。この場面の自転車が西部劇の定石を破るための選択であることは言うまでもない。

ジェームズ・コバーン

他にアメリカ映画で見るならば、地味な登場のしかたではあるが、『大脱走』（一九六三）にも自転車の場面がある。ドイツの捕虜収容所から囚われの連合軍の兵士たちが地下に穴を掘って集団脱走を試みるという実話をもとにしたジョン・スタージェス監督の大作である。スティーヴ・マックイーンをはじめ個性豊かな名優たちの競演とハラハラどきどきする分かりやすい展開はハリウッド的映画作りの真骨頂である。

数ある名場面のひとつはマックイーンが収容所脱出のあとにドイツ兵から奪って駆けるオートバイのシーンであろう。スタントマンを断ろうというほどのオートバイ好きのマックイーンが緑豊かな郊外の道を走りぬけ追い詰められて巡らされたフェンスをバイクごとに飛び越えてしまうのである。

一方同じく首尾よく脱走したジェームズ・コバーンであるが、こちらはオートバイではなく自転車を一台失敬して後生大事に離さず持ってきたトランクを荷台にくくりつけ、なにくわぬ顔でペダルをのんびりまわして田舎町を走り去っていくのである。自家用飛行機を乗りまわすアメリカ版〇〇七デレク・フリント（『電撃フリント・ゴーゴー作戦』（一九六六、『電撃フリント・アタック作戦』一九六七）のコバーンならば自転車なぞはばかばかしくて話にならないところである。しかし、さすがに脱獄したばかりの徒手空拳の身であるからこの際贅沢はいえない。長身痩躯で手足の長い彼が自転車に乗ってヨーロッパの田舎町をゆらゆらと走るのは脱走の緊迫感がまるでなくあいかわらずのコバーンらしい人を喰った場面である。アメリカ映画でありながら、舞台がヨーロッパであるために、ハリウッドスターが自転車に乗ることに

なったといえよう。

ビーチクルーザー

自転車の登場するハリウッド映画はけっして多くない。『スターウォーズ』（一九七七）や『タイタニック』（一九九七）、『駅馬車』（一九三九）などどうにも自転車などが出てきそうにはない。宇宙船や馬車に飛行機、汽車そしてクルマというのがアメリカ映画における乗り物であって、ハリウッド的なスペクタクルには自転車はあまりに地味すぎるのだろう。

そもそも自転車は広大なアメリカ大陸ではあまり役にたたない。したがってこの国では二輪車といえば、モーターサイクルということになる。ハーレーダヴィッドソンの活躍するロードムーヴィー『イージーライダー』（一九六九）をはじめ、さきの『大脱走』もそうであったが、オートバイの登場するアメリカ映画は枚挙にいとまがない。

実用にならない自転車だが、それでも現代のスポーツ自転車の代表選手であるマウンテンバイクはアメリカ生まれである。一九七〇年代カリフォルニアあたりで若者が山の斜面を滑り降りる遊びから誕生したといわれている。オフロードを走破するための太いブロックタイヤと衝撃を吸収するためのサスペンションのついた自転車である。

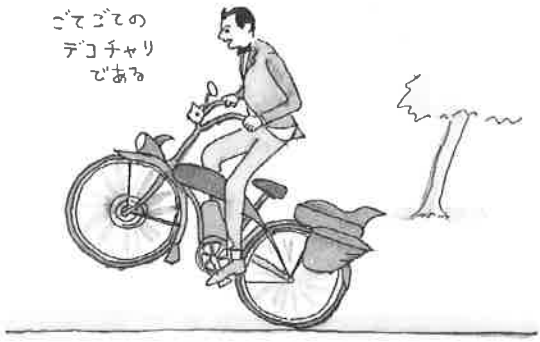
もうひとつのアメリカ生まれの自転車として、マウンテンバイク以前に、波乗り遊びをする人たちが浜辺で乗るためのビーチクルーザーがある。どちらの自転車にしても、遊びの中から生まれているのがこの国らしいところだ。

ビーチクルーザーは日本ではあまり見かけない自転車である。オートバイからエンジンを取り去りかわりにペダルをつけたような外観である。左右に大きく鳥が羽根をひろげたようなハンドルや、空気のたっぷり入る浮き輪のようなタイヤ、オートバイの燃料タンクを模したような装飾が派手派手しく付いた、アメリカンテイスト満載のいわば自転車の「アメ車」である。

『ピーウィーの大冒険』

このビーチクルーザーが登場する映画がティム・バートンの初長編作品『ピーウィーの大冒険』（一九八五）である。ＳＦＸを駆使して凝った人工世界を構築するバートンらしく、アメリカ版のＭｒビーンといえるようなドタバタ喜劇なのだが、恐竜などの登場するオモチャ箱のようなカラフルな映像世界が展開する。

巻頭、愛車の真っ赤な特別製のビーチクルーザーに乗った主人公ピーウィー（ピーウィー・ハーマン）はいつのまにかツール・ド・フランスの走行集団の中にいて、どんどん速度をあげてついに一位でゴールに入ってしまう夢のシーンがある。すでに紹介したジャック・タチ『のんき大将』（一九四七）の一場面の引用になっている



のがおかしい。こてこてのアメリカ映画なのだがやはり自転車といえばフランスなのだろうか。そういえばフランスを舞台にしたミスター・ビーンの最新作（『Mrビーン、カンヌで大迷惑』二〇〇七）でも、パリからカンヌに向かう途中の道で、おんぼろ自転車に乗ったビーンが猛烈な速度でロードレーサーの集団を追い抜くシーンがあった。

ムッシュウ・ユロやMrビーン、ピーウィーなど喜劇のヒーローたちではなくアクション・ヒーローとなると、かれらはみな自転車などには見向きもしない。自転車に乗るジェイムズ・ボンドやスーパーマンを想像できるだろうか。ただし刑事もの、探偵ものの場合はどうだろうか。かれらの活躍と推理はある程度生活に足がついていなければならない。名刑事コロンボのくたびれた愛車は舞台がヨーロッパや日本ならさしずめ自転車であろう。同じ倒叙スタイルで描かれる日本版コロンボである警部補古畑任三郎は事件現場に自転車でかけつける。その自転車がセリーヌ製だというところがダンディな田村正和にふさわしい。

監督ルイ・マル

病院の床掃除にせっせと励むひとりの若者、ふと窓の

向こうの木漏れ日の中に可憐な小鳥の姿をみつける。ポケットからパチンコを取り出してぐいとゴムを引絞って狙い打ちする。粉を吹くように産毛が散って地面に鳥が落ちる。この場面のあと、ジャンゴ・ラインハルトの軽快なギターが鳴り始め、若者は緑なす田舎道を自転車に乗って疾走する。

パトリック・モディアノとともに脚本を書いた『ルシアンの青春』（一九七三）のオープニングである。病院を辞めた彼はナチスに協力して冷血なエージェントとなり、そののちレジスタンスに捕えられ処刑されて短い一生を終える。映画は小川で水浴びする少女のかたわら、彼が日を浴びてまどろむ場面で終わる。淡々とした描写で、才をひけらかすような映像の多かったルイ・マルの、スタイルの変貌を告げる作品であった。

ルシアン（ピエール・ブレーズ）の乗る自転車はどこにでもある普通の古ぼけた実用車である。この作品から一五年後、『五月のミル』（一九八九）でマルはふたたび主人公が自転車に乗るシーンで映画をはじめる。こんどはドロップハンドルのスポーツタイプである。乗り手は若者ではない。南仏の郊外にある宏壮な館に老母と暮らすミル（ミシェル・ピコリ）は自転車を愛する初老の男である。必ず自室に担いであがりメンテナンスを怠らないのである。

ある日突然母が息をとめる。蜂蜜採りに来ていたミルは呼びかけに昼食の用意が出来たと思い、立てかけてあった自転車に跨りペダルに足をのせる。深い前傾姿勢になって、柔らかな陽光のふりそそぐ森を走り抜けていく。オープニングロールとともにステファヌ・グラッペリのヴァイオリンが流れる。レナート・ベルタのキャメ

ラが捉える初夏の光がまぶしく美しい。

一九六八年の五月のことである。遠くはなれたパリでは学生を中心にした大規模な暴動が起こっている。この五月革命の余波が田舎町のガソリンの供給を滞らせ、食料の遅配を生む。訃報を聞いて、ミルの娘夫婦と子供たち、姪とその友達、兄弟夫婦などが次々にやってくる。横たわる母の遺骸を傍らに、死者の悪口、遺産の話、活動家の学生批判など、卓を囲んでにぎやかに呑み貪り喰い、また意気投合した男女がつぎつぎと屋敷の二階に姿を消していく。

そしてあろうことか葬儀屋のストライキのために死者を庭に穴を掘って埋める算段となる。さんさんと降りしきる陽光のもとで、みんなで和気あいあい草の上のピクニックに興じる。富裕なブルジョワの家に生まれたマルにとっては、たとえかれら金持ち家族を笑い揶揄しながらもこれは多かれ少なかれ彼自身の世界なのである。

当時57歳のルイ・マル監督は映画の主人公とほぼ同年齢である。彼は屋敷の家具をどうするかで話がもめたとき、何もいらない、ベッドと僕の自転車だけ置いていってくれとミルに言わせている。ルイ・マルは自転車が好きだった。一九六二年の作品『私生活』でもブリジット・バルドーを自転車に乗せている。輝くブロンドをなびかせて素足でペダルを漕ぐシーンは、いかにも耽美派のマルである。また同じ年、愛してやまない自転車競技ツール・ド・フランスの記録作品『ツール万歳』を撮っていることも付け加えておかねばならない。

（まるせ　やすひろ・本学非常勤講師）

画　筆者

連載

本のいろいろ㊸ 関大図書館―和漢朗詠集について―

仲井 徳（いさお）

『白楽天の七言詩』

キリシタン版『和漢朗詠集』

平安時代中期、一一世紀はじめに成立した、漢詩と和歌の朗詠―楽曲の伴奏に合わせて朗読する―ための詞華集（アンソロジー）。当時、著名な漢詩文や和歌を口ずさむことが流行した。

藤原公任撰　『和漢朗詠集』上下二冊
寛永五年（一六二八）刊
919.3/F2/10-1/2

藤原公任（ふじわらのきんとう　九六六～一〇四一）が選んだ和歌二一六首、漢詩五八八詩計八〇四首の朗詠集。和歌では、紀貫之、凡河内躬恒の作品が多く、漢詩では、白楽天のものが一三五首で最多で、菅原道真、源順の作品も多くある。上巻に四季の和歌、下巻に主として漢詩の雑部を置く。下巻「祝」部に「君が代」の原典があるが、もっとも、『古今和歌集』の第七巻「賀」部に読人しらずで出ている。

『和漢朗詠集』は中世・室町時代から近世・江戸時代を通じてベストセラーであった。和歌や漢詩を学ぶのに手っ取り早い、「百人一首」や「唐詩選」を合わせたようなものであろうか。

白楽天の七言詩「遺愛寺鐘欹枕聴　香鑪峯雪巻簾看」（遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く　香鑪峯の雪は簾を撥げて看る）は、清少納言が簾を巻いて雪景色を見せた『枕草子』の話は有名である。

KOALAでは、関連図書が二三四点ありました。うち和装本は五〇点。

キリシタン版　『和漢朗詠集』上

大本一冊のみ存　慶長五年（一六〇〇）刊

スペインのサンロレンソ旧王室文庫所蔵。これは複製版。

キリシタン宣教師たちが伝道のため、日本語を学習するために編纂された。従って、国字（日本語）で漢字仮名交じりの連綿体による木の活字により、長崎で印刷された。キリシタン版の残存三二点のうち、国字本は一三点ある。日本語でもローマ字で印刷した、教義の伝道書が一三点、他はラテン語である。

国字（日本語）での文学書としては、『平家の物語抄』『伊曽保物語』『金句集』『落葉集』『和漢朗詠集』『太平記抜書』等があるが、それなら、江戸時代を通じての大ベストセラーであった『伊勢物語』のほうがお勧めであったのに採用されなかったのは絵入り本であったため敬遠されたかと思われる。

〔参考〕古書肆・青裳堂が編纂した目録『和漢朗詠集の版種』一冊　二〇〇七年刊は、一四一種の版本すべてに写真を付して解説している刮目の書誌である。

（神戸女子大学文学部准教授・元関西大学図書館員）

原稿募集

「書評」誌では、広く院生、学生の原稿を募集しています。
おおまかな投稿要領を記します。

[投稿要領]

▽書評
二、〇〇〇字～四、〇〇〇字程度
▽映画・音楽などに関する評論など
二、〇〇〇字～四、〇〇〇字程度
▽評論・論文など
二、〇〇〇～八、〇〇〇字程度
▽創作（小説、戯曲、詩、短歌など）
小説、戯曲一二、〇〇〇字程度
▽氏名、学年、連絡先を記入下さい。
採否は編集委員会の判断によります。この点ご了承下さい。

問い合せ先
関大生協書評編集委員会宛
E・メール info@kandai.ne.jp

編集メモ

今号に、昨年の四月からはじまりました〈文芸創作講座〉から、文学部澤井繁男先生のご協力をえて、二編「かたつむりと缶ビール」、「胎動」を小誌に収載しました。魚日記さんの「クラムボン、飛んだ」とあわせたものがたりの空間です。

今回の丸瀬康裕先生の「自転車のはなし」は、折りたたみ自転車で大阪探検とスクリーンに走る自転車のものがたりです。伴走して、新たな光景に出会えた感じがします。

昨年の十一月十二日から十七日、博物館で「吹田を知る」展示会が開かれました。この中から三点を、町の発見として小誌に紹介いただきました。

ところで、これからの季節に生き生きと鳴き、跳ねまわるトノサマガエル、アマガエル、ヒキガエルなどを吹田で耳に、目にしなくなって久しい。

日頃食するファーストフードから世界をみまわした報告、インド、ネパールの街での出会いなどに、発見したよろこびが伝わってきます。

「出版社探訪・海風社」、「文庫をあるく・関西沖縄文庫」では、はじめて取材体験する土倉さんが、代表者、編集者、主宰者からあたたかく、取材に応じていただきました。短い時間でしたが、その一端を画と文にまとめています。

手にする機会の多い文庫や新書を、私流の楽しみとしてはじめました。そこで表紙裏、裏表紙裏に連載していました「図書館資料紹介」に代えて、その一篇をここに載せました。次号では、文庫、新書をさらに広く紹介できればと思っています。

文学部浜本隆志先生は、前号まで八回連載された「図像で読み解く魔女の世界」を加え、新しく『拷問と処刑の西洋史』と題し、昨年末に新潮選書の一冊として出版されました。この著作の書評を金谷千慧子先生にお願いしました。金谷先生は「魔女の復権はありえるか」と題し、「暗黒史の被害者はなぜ、罪のない女性に多かったのかを心深く考えるきっかけにしてもらいたい」と結ばれています。

春号も、筆者の体験と創作、評論など色鮮やかにこめていただきました。（M）

我が愛する詩人の伝記

室生犀星

田中 登

近代日本を代表する詩人たちの伝記を、その詩作品をも交えながら簡潔に綴ったのが、室生犀星『我が愛する詩人の伝記』だ。そこで取り上げられているのは、北原白秋・高村光太郎・萩原朔太郎・釈超空・堀辰雄・立原道造・津村信夫・山村暮鳥・百田宗治・千家元麿・島崎藤村の十一人。全員犀生と何らかの形で交流があった人たちだけに、著者の人間観察も充分に行き届き、思わずハタと膝を打ちたくなるような場面にでくわすこと、しばしばだ。

たとえば、「この二篇にある善良な性格は、全く詩を書く人でなかったら、何わざにも従けなかったであろう、ふつうの人間はこんなに正直にものを言うことが出来ない。詩人のなかでも千家のように、大上段の純朴を少しの顧慮もなく表わし得る人は、まず彼一人といってよいであろう」。犀生の細やかな観察は、当の詩人のみならず、その周辺にいた人物にまで及ぶ。「この女の人は超空没後、十万円の手当を遺族から貰って、京都の生まれ在所に戻った。私はさめざめと泣いていた人を、折口家の梅の木の見える背戸近い縁側で見てから、むかしの古い人、泣くだけしか超空にやれなかった血色の好い女の人を、その後どうしていられるかを思った。この情景はこまかく物を見る超空の、ただ一つ見落としたしおしおとした女光景であった」。人間通の詩人の言葉がまことにすがすがしい。

（たなか　のぼる・文学部教授）

限定復刻版
中公文庫
2005年９月刊
264頁
本体価格　1,429円

関大図書館所蔵
中央公論
1959（昭和26）年２月

角を曲がるごとになにかしらわくわくするものがある。
町や通りや家の佇まい、その名称、匂いや息づかい、
そして人々の生活が肌に感じられる。

緑なす田舎道を自転車に乗って疾走する。

柔らかな陽光のふりそそぐ森を走り抜けていく。

1968年の5月のことである

何なんやろね、クラムボンって。
結局一度も納得のいく答えに出会えたこと、
なかったなぁ

愛しい気持ちで海を眺めた。
水の音がそうさせたのか、
なぜかそのとき、
ふとクラムボンを思い出した。

『書評』 通巻129号 2008年 春号

編集・発行 関西大学生活協同組合『書評』編集委員会
〒565-0842 吹田市千里山東3-10-1
TEL:06-6368-7527 FAX:06-6368-7555
info@kandai.ne.jp
発行年月 2008年4月
頒価 330円